

高林西原古墳群(2)

高林西原古墳群(2)

群馬県立がんセンター緩和ケア病棟建築工事及び外構工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書



群馬県立がんセンター緩和ケア病棟建築工事及び外構工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一三
公益財団法人群馬県立がんセンター埋蔵文化財調査事業団

2013

群馬県立がんセンター
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

高林西原古墳群（2）

群馬県立がんセンター緩和ケア病棟建築工事及び外構工事に伴う
埋 蔵 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2013

群 馬 県 立 が ん セ ン タ ー
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



13号墳全景(東から)



13号墳埴輪列出土状態(北東から)

序

本県がん対策の中心的役割を果たすために設置された群馬県立がんセンターは、高林西原古墳群と呼ばれる群集墳の中に立地しています。周辺は県内有数の古墳密集地として知られ、敷地の内外には今もなお多くの古墳をみることができます。

このがんセンターの敷地内では、新病院の建設事業に伴って、すでに平成12・13・16年度に当事業団が発掘調査を実施しております。その際は、11基という多数の古墳を調査し、馬形埴輪や人物埴輪をはじめとする形象埴輪が数多く出土するなど、貴重な成果を上げることができました。

この度新たに南西隣接地に緩和ケア病棟が建設されることになり、当事業団が前回に引き続き平成24年度に発掘調査を実施いたしました。その結果、さらに4基の古墳が見つかり、再び多量の埴輪が廻らされていたことが判明しました。古墳王国といわれる群馬県の中でも、この太田市南部のようにひときわ目立つ古墳分布密度の高さは、安定した経済活動を背景とした土着有力者層の成長を示すものと考えられます。高林西原古墳群の発掘調査成果がこの古墳時代の社会形成を解き明かす貴重な歴史資料となることは間違いありません。前回の調査の成果と併せて、古墳時代の研究の進展に寄与するものと思われま

す。最後になりましたが、群馬県立がんセンター、群馬県教育委員会、太田市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行に至るまで多大なご指導・ご協力を賜りました。本書の刊行に際し、心から感謝申し上げますと共に、本書が歴史研究の資料として広く活用されることを願い、序といたします。

平成25年11月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 上原訓幸

例 言

- 1 本書は、群馬県立がんセンター緩和ケア病棟建築工事及び外構工事に伴う埋蔵文化財発掘調査による、高林西原古墳群の埋蔵文化財調査報告書である。本書で報告するのは高林西原古墳群5区(5-1区・5-2区)であり、1～4区については平成12・13・16年度に新病棟建設事業に伴って当事業団が調査を行い、その成果は『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第371集 高林西原古墳群』として、平成18(2006)年3月に刊行済みである。
- 2 所在地 太田市高林西町617-1 群馬県立がんセンター内
- 3 事業主体 群馬県立がんセンター
- 4 調査主体 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 5 調査期間・面積
緩和ケア病棟部分(5-1区・2,288㎡) 履行期間 平成24年7月1日～平成24年11月30日
調査期間 平成24年8月1日～平成24年9月30日
外構部分(5-2区・986㎡) 履行期間 平成25年2月1日～平成25年3月31日
調査期間 平成25年3月1日～平成25年3月31日
- 6 発掘調査体制は次の通りである。
緩和ケア病棟部分(5-1区)
発掘調査担当 上席専門員 関根愼二 主任調査研究員 宮下 寛
遺跡掘削請負工事 有限会社毛野考古学研究所
委託 地上測量 株式会社シン技術コンサル
外構部分(5-2区)
発掘調査担当 上席専門員 関根愼二 専門調査役 津金澤吉茂
遺跡掘削請負工事 有限会社高澤考古学研究所
委託 地上測量 株式会社シン技術コンサル
- 7 整理事業の期間と体制は次の通りである。
履行期間 平成25年4月1日～平成25年11月30日
整理期間 平成25年4月1日～平成25年9月30日
整理担当 上席調査研究員 高井佳弘
遺物写真撮影 補佐(総括) 佐藤元彦 資料統括 岩崎泰一 保存処理 補佐(総括) 関 邦一
- 8 本書作成の担当者は次の通りである。
編集 上席調査研究員 高井佳弘
執筆 資料統括 徳江秀夫(遺物観察表:埴輪・土器・土製品) 資料統括 岩崎泰一(遺物観察表:石器・石製品)
上席専門員 谷藤保彦(遺物観察表:縄文土器) 補佐(総括) 関 邦一(遺物観察表:金属器)
上席調査研究員 高井佳弘(前記以外)
- 9 出土石器・石製品の石材同定については飯島静男氏(群馬県地質研究会会員)にお願いした。
- 10 発掘調査諸資料および出土品は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。
- 11 発掘調査および報告書作成に際しては、下記の機関にご協力・ご指導をいただきました。記して感謝いたします。(敬称略・順不同)

群馬県教育委員会、太田市教育委員会

凡 例

- 1 本文中に使用した座標・方位は、すべて世界測地系(日本測地系2000平面直角座標第IX系)を使用している。なお、座標北と真北との偏差は、5区中央付近の $X=28,550$ 、 $Y=-42,230$ で東偏 $0^{\circ}16'40.54''$ である。
- 2 遺構平面図等高線や断面図に記した数値は標高を表し、単位はmを用いた。
- 3 遺構・遺物実測図の縮尺率は原則として以下のとおりとしたが、最適と思われる縮尺に適宜変更した場合があるので、各図面のスケールを参照していただきたい。

遺構 古墳・溝—平面図 1:100か1:40 断面図 1:40

土坑・縄文土器集中部 1:40

遺物 石製品(五輪塔) 1:6

埴輪類 1:5 同破片 1:4

土師器・縄文土器・瓦塔・石器(磨石など)・石製品 1:3

銅銭・石鏃 1:1

- 4 遺構の主軸方位・走向は、長軸方向と座標北との傾きを計測した。表記は北を基準とし、東西 90° 以内の範囲で、東に傾いた場合は $N-\circ-E$ 、西に傾いた場合は $N-\circ-W$ というように表記した。
- 5 遺物観察表の凡例は遺物観察表の前(52ページ)に掲載した。
- 6 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。

国土地理院 地形図 1:25,000「上野境」(平成22年12月1日発行)、「足利南部」(平成22年12月1日発行)、
「深谷」(平成14年9月1日発行)、「妻沼」(平成15年6月1日発行)

国土地理院 地形図 1:50,000「深谷」(平成10年9月1日発行)

国土地理院 地勢図 1:200,000「宇都宮」(平成18年4月1日発行)

太田市 1:2,500地形図(平成23年測図)

目 次

カラー口絵

序

例言

凡例

目次

挿図・表・写真目次

第1章 調査に至る経緯・方法・経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	2
1 調査の方法	2
2 調査の経過	4
第3節 整理作業の概要	5
第2章 遺跡の位置と環境	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	7
第3節 基本土層	12
第3章 調査の成果	13
第1節 成果の概要	13
第2節 古墳	14
1 1号墳	14
2 12号墳	15
3 13号墳	20
4 14号墳	32
5 15号墳	34
第3節 溝	34
1 3号溝	34
2 5号溝	36
3 6号溝	37
第4節 土坑・集石	39
第5節 遺構外出土の遺物	42
第6節 縄文時代の遺構と遺物	45
1 縄文土器集中部	45
2 遺構外出土の縄文時代の遺物	46
第7節 旧石器時代の調査	46
第4章 総括	48
第1節 出土埴輪について	48
第2節 古墳調査の成果と意義	49
1 古墳墳丘下の溝	49
2 古墳調査の意義	50
遺物観察表凡例	52
遺物観察表	53
写真図版	
抄録	

挿図目次

第1図	遺跡の位置	1	第21図	13号墳出土埴輪(4)	31
第2図	調査区位置図	2	第22図	14号墳平面図	32
第3図	グリッド設定図	3	第23図	15号墳平面図	33
第4図	周辺地形分類図	6	第24図	3号溝平面図	35
第5図	周辺の遺跡	8	第25図	3号溝出土遺物	36
第6図	基本土層	12	第26図	5号溝平面図	37
第7図	1号墳平面図	14	第27図	6号溝平面図	38
第8図	12号墳平面図	16	第28図	6号溝出土遺物	39
第9図	12号墳出土遺物分布図	17	第29図	16・19・21号土坑平面図、18号土坑出土遺物	40
第10図	12号墳出土埴輪(1)	18	第30図	20・22・25・27・28号土坑平面図	41
第11図	12号墳出土埴輪(2)	19	第31図	1号集石平面図	42
第12図	13号墳平面図、円筒埴輪11据え付け断面図	21	第32図	遺構外出土の遺物(1)	43
第13図	13号墳断面図(1)	23	第33図	遺構外出土の遺物(2)	44
第14図	13号墳断面図(2)	25	第34図	縄文土器集中部平面図	45
第15図	13号墳出土遺物分布図	26	第35図	縄文土器集中部出土土器	45
第16図	13号墳出土埴輪(1)	28	第36図	遺構外出土の縄文時代の遺物	46
第17図	13号墳出土埴輪(2)	29	第37図	旧石器時代調査坑配置図	47
第18図	13号墳出土埴輪(3)	30	第38図	高崎情報団地遺跡15号墳平面図	49
第19図	13号墳出土埴輪・底面	30	第39図	高林西原古墳群周辺の古墳	50
第20図	13号墳出土埴輪・ヘラ記号	30			

表目次

第1表	周辺の遺跡(1)	9	第6表	出土遺物観察表(2)	54
第2表	周辺の遺跡(2)	10	第7表	出土遺物観察表(3)	55
第3表	周辺の遺跡(3)	11	第8表	出土遺物観察表(4)	56
第4表	土坑・集石一覧表	39	第9表	出土遺物観察表(5)	57
第5表	出土遺物観察表(1)	53	第10表	出土遺物観察表(6)	58

写真目次

PL. 1	1	5-1区中央部全景(東から)	2	14号墳全景(南から)	
	2	5-2区南西部全景(北東から)	3	14号墳周堀A-A'セクション(北東から)	
PL. 2	1	5-2区北端部全景(南から)	4	15号墳全景(北東から)	
	2	1号墳全景(南西から)	5	15号墳周堀A-A'セクション(南東から)	
	3	12号墳全景(北西から)	PL. 9	1	3号溝全景(北東から)
	4	12号墳南東部埴輪出土状態(北東から)	2	3号溝全景(南西から)	
	5	12号墳埴輪2出土状態(北西から)	3	3号溝東端部(東から)	
PL. 3	1	13号墳全景(東から)	4	5号溝(左)全景(北から)	
	2	13号墳西部全景(南東から)	5	6号溝全景(東から)	
PL. 4	1	13号墳西部全景(北から)	PL. 10	1	6号溝全景(西から)
	2	13号墳周堀北部C-C'セクション(東から)	2	6号溝全景(北東から)	
	3	13号墳周堀南部C-C'セクション(東から)	3	6号溝A-A'セクション(西から)	
	4	13号墳周堀南東部D-D'セクション(南西から)	4	6号溝B-B'セクション(西から)	
	5	13号墳周堀東部E-E'セクション(南から)	5	16号土坑全景(南東から)	
	6	13号墳周堀北西部F-F'セクション(東から)	6	17号土坑全景(西から)	
	7	13号墳周堀南西部G-G'セクション(南東から)	7	18号土坑全景(北東から)	
	8	13号墳墳丘下溝全景(東から)	PL. 11	1	18号土坑全景(南東から)
PL. 5	1	13号墳墳丘下溝全景(南から)	2	19号土坑全景(南西から)	
	2	13号墳墳丘下溝南部I-I'セクション(東から)	3	19号土坑全景(南東から)	
	3	13号墳墳丘下溝北部I-I'セクション(東から)	4	20号土坑全景(西から)	
	4	13号墳埴輪列(1~9)出土状態(北東から)	5	21号土坑全景(東から)	
	5	13号墳埴輪1出土状態(南から)	6	22号土坑全景(南から)	
PL. 6	1	13号墳埴輪2出土状態(南西から)	7	23号土坑全景(南東から)	
	2	13号墳埴輪3出土状態(南から)	8	24号土坑全景(東から)	
	3	13号墳埴輪4出土状態(南東から)	PL. 12	1	25号土坑全景(東から)
	4	13号墳埴輪5出土状態(南から)	2	27号土坑全景(北東から)	
	5	13号墳埴輪6(左)~8(右)出土状態(南西から)	3	1号集石全景(北から)	
	6	13号墳埴輪9(左)出土状態(南西から)	4	1号集石掘方全景(南から)	
	7	13号墳埴輪11据え付け状態(南から)	5	縄文土器集中部(北から)	
	8	13号墳埴輪11・12出土状態(北から)	6	縄文土器集中部(東から)	
PL. 7	1	13号墳埴輪14出土状態(北から)	7	5-1区中央部旧石器トレンチ全景(東から)	
	2	13号墳埴輪15~18出土状態(北西から)	8	5-2区南端部旧石器トレンチ全景(東から)	
	3	13号墳埴輪15出土状態(北東から)	PL. 13	出土遺物	12号墳(1)
	4	13号墳埴輪16出土状態(南東から)	PL. 14	出土遺物	12号墳(2)
	5	13号墳埴輪18出土状態(北から)	PL. 15	出土遺物	13号墳(1)
	6	13号墳埴輪19(右)・20(中)出土状態(西から)	PL. 16	出土遺物	13号墳(2)
	7	13号墳埴輪21(左)・22(右)出土状態(南東から)	PL. 17	出土遺物	13号墳(3)・3号溝・6号溝
	8	13号墳瓦塔出土状態(南東から)	PL. 18	出土遺物	18号土坑・遺構外
PL. 8	1	14号墳全景(東から)	PL. 19	出土遺物	縄文土器集中部・遺構外(縄文時代)

第1章 調査に至る経緯・方法・経過

第1節 調査に至る経緯

群馬県立がんセンターは、昭和30年に設置された群馬県立東毛療養所に始まるが、昭和47年に群馬県立がんセンター東毛病院と改称され、さらに平成10年に本県がん対策の中心的役割を果たすため現在の名称に改称された。平成19年には老朽化した旧病棟の西側に、高度のがん医療に対応するための新病棟が開設されたが、がんセンターの敷地は周知の遺跡である「高林西原古墳群」の中に位置するため、その建設に先だっては平成12・13・16年度に当事業団によって埋蔵文化財の発掘調査が実施された。調査では11基の古墳などが調査され、その成果は『財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第

371集 高林西原古墳群』(2006)として刊行済みである。

平成22年12月、群馬県がん対策推進条例の成立を受け、がんセンター内に緩和ケア病棟が設置されることが決まった。建設位置は敷地南西隅部となったが、ここにも古墳などの遺構が存在する可能性が高いため、県教育委員会文化財保護課は対応が必要と判断し、平成24年2月に試掘調査が実施された。その結果、古墳周堀などの遺構、埴輪などの遺物が出土したことから本調査が必要と判断され、県教育委員会文化財保護課の調整を経て、翌平成24年度に当事業団が調査を実施することとなった。

調査は緩和ケア病棟の建設工事の部分と、その西側に接する外構工事の部分とに分けて実施することとなり、まず緩和ケア病棟の部分平成24年8月、9月の2ヶ月に実施し、その後外構部分を平成25年3月の1ヶ月に実施した。



第1図 遺跡の位置(国土地理院20万分の1地勢図「宇都宮」(平成18年4月1日発行)使用)

第2節 調査の方法と経過

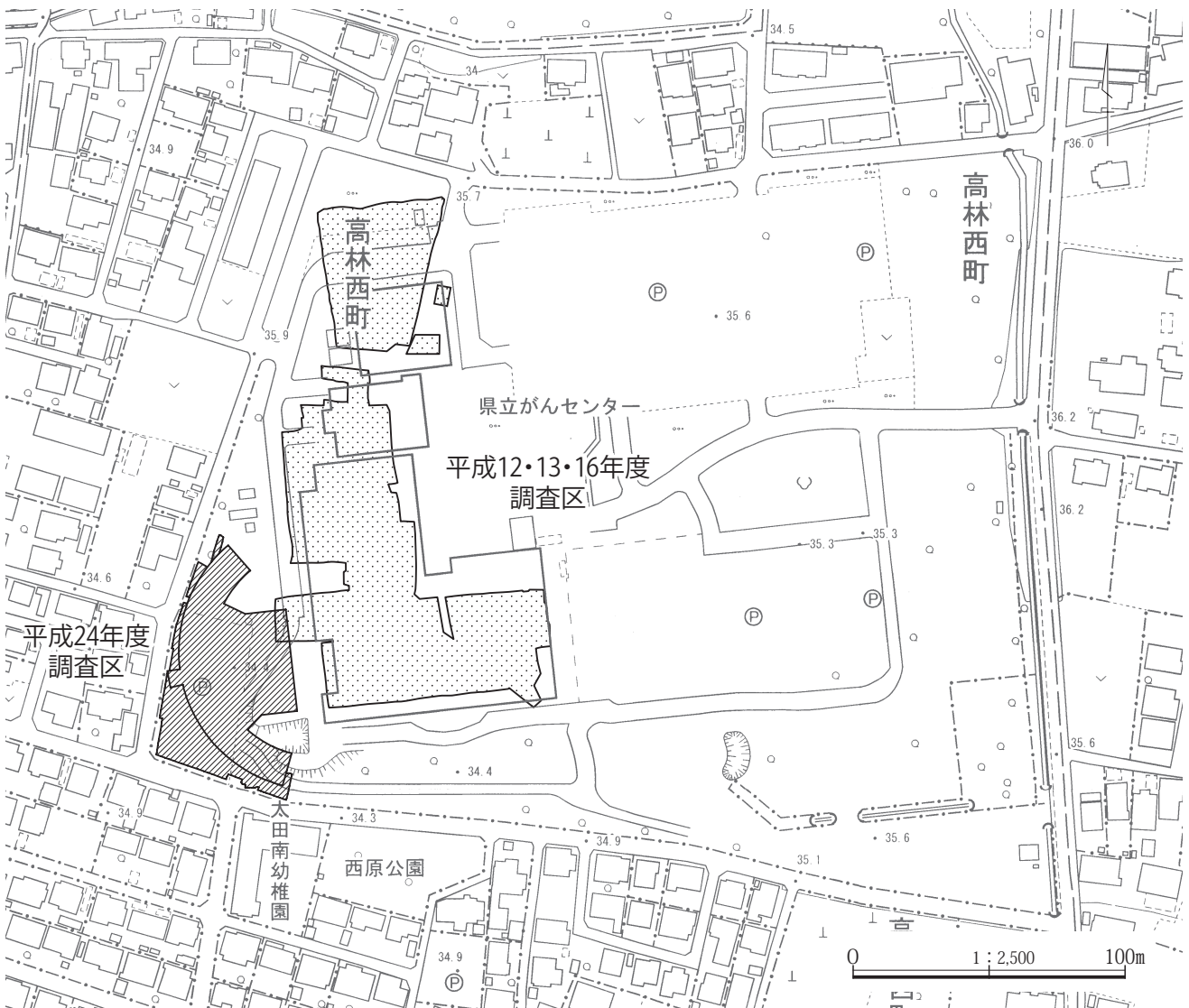
1 調査の方法

調査対象地は第2図に見るように県立がんセンターの敷地南西隅に位置し、新病棟に隣接する場所である。調査では、病院内という事情から、排土置き場を広く確保することはできず、また、排土を運搬する車両などを頻繁に動かすことも困難であるため、調査対象地内に排土置き場を確保する必要がある緩和ケア病棟部分の調査では、対象地を一度に掘ることはせず、まず中央部分を発

掘し、その後北・南・東側の調査を行うことにした。

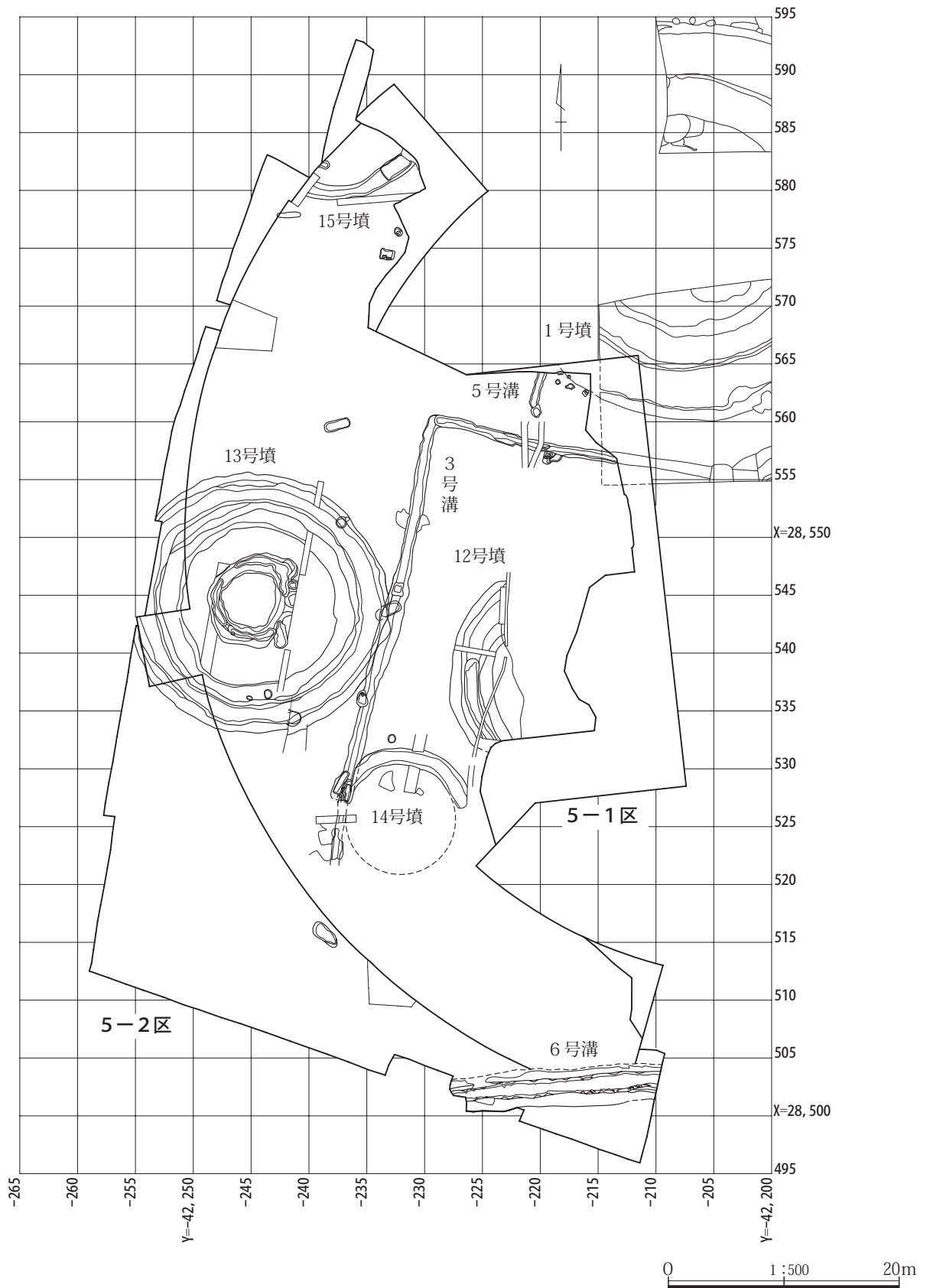
調査区の名称は、平成12・13・16年の調査では調査区を1～4区と呼称したので、今回は5区と名付けた。なお調査時にはそれ以上の細分名はなかったが、整理・報告の便宜上、緩和ケア病棟部分と外構部分とを区別した方がよいと判断したので、整理作業の際にそれぞれ5-1区、5-2区と呼び分けることにした。本書でもその呼び分けを踏襲している。

調査に用いたグリッドは世界測地系(日本測地系2000平面直角座標Ⅸ系)を用い、5m×5mを基本として第3図のように設定した。その名称は本古墳群特有のものを設定することはせず、各グリッド南東隅の座標の下3桁を用いて表すことにした(例：X=28,530、Y=



第2図 調査区位置図

(この図の作成にあたっては、太田市長の承認を得て、同市発行の2,500分の1地形図(平成23年測図)を使用した)



第3図 グリッド設定図

-42,235の場合、530-235と表す)。なお、平成12・13・16年度の調査の際は、世界測地系ではなく日本測地系を用いているので、グリッドは接続しない。前報告書『高林西原古墳群』を併せて使用する場合は注意していただきたい。

調査の方法に特殊なものはなく、ごく標準的な方法を用いた。その概略は以下の通りである。

表土除去は基本的にバックホーを用いて行った。表土除去後はジョレンを用いて遺構確認を行い、確認された遺構について調査を行った。調査した遺構は古墳が中心であったが、墳丘盛土は13号墳にわずかに残っていただけであり、基本的に周堀の調査となった。その他の遺構は土坑、溝であり、それぞれに適した方法を用いた。

遺構名は平成12・13・16年度の調査の続き番号を用いた。すなわち、古墳は12号から、土坑は16号から、溝は4号からを新番号として用いている。ただし、1号墳と3号溝の両者については、平成13年度に調査した遺構の西側延長部にあたるため、旧番号をそのまま使用している。

遺構の測量は測量業者に委託し、平面図・断面図ともに縮尺は1/20を基本とし、作図にあたってはデータをデジタル化し整理事業の便を図った。写真撮影はデジタルカメラを主とし、その他重要な遺構については6×7版のモノクロ(銀塩フィルム)も撮影した。

遺構調査後、旧石器時代の調査を行った。全域について2m×4mの調査坑を合計18ヶ所設定(そのうち10号のみ2×6m)し掘り下げたが、全調査坑で遺構・遺物とも見つからなかった。

2 調査の経過

調査は平成24年度に、緩和ケア病棟部分(5-1区)とその外構部分(5-2区)との2回に分けて実施した。以下、それぞれの調査経過についてまとめて述べる。

緩和ケア病棟部分(5-1区)

調査は8、9月の2ヶ月間行った。

8月1日に現地において調査区の確認を行い、翌2日から駐車場部分のアスファルト除去を開始した。同時にプレハブ建設などの準備作業も並行して行った。アスファルト除去後、6日から調査区中央部の表土除去を開

始、即日遺構確認作業も開始した。表土除去は17日まで継続した。その間、各種施設のコンクリートを除去し、また調査区中の立木の伐採を行い、それらの搬出作業も行った。

6日から開始した遺構確認では、3基の古墳のほか、土坑、溝を検出し、以後それぞれの遺構の調査を行った。13号墳は大部分が調査区にかかり、しかも埴輪列がかなり良好に残っていることが判明したため、今回の調査では作業の中心となった。周堀の掘り下げ作業は8日から開始し、適宜ベルトを設定して土層観察・写真撮影・実測を行いながら調査を行った。埴輪列は28日から調査を開始した。12号墳は存在は確認したものの、東側にまだ延びるため、28日に一部トレンチ調査をただけで、周堀の掘り下げはこの部分の表土除去後に行うことにした。14号墳は調査時には4号溝と呼んでいたが、22日から24日にかけて掘り下げ作業をおこなった。土坑の調査は8日に16号土坑から開始し、以後順次21号まで行き、溝は3号溝の調査を11日から開始した。以上の遺構の調査がほぼ終了した30日には全景写真を撮影した。同日13号墳の埴輪列を取り上げ、旧石器の調査を開始した。旧石器の調査はまず6ヶ所の調査坑を設定し、4日まで継続調査した。13号墳では9月3日に墳丘部の調査を行い、中央に不整形の溝が見つかったため、その調査を4日にかけて行い、これで中央部の調査を終了した。

5日からはまず北側部分の表土剥ぎを開始し、翌6日から遺構確認を行った。この北側部分では15号墳、22～25号土坑が見つかり、7日からそれぞれの調査を開始した。表土除去は引き続き東側・南側で行い、13日まで継続した。東側ではすでに確認されていた12号墳の調査を10日から13日まで行ったほか、同時に1号墳の延長部分、3号溝延長部分、5号溝などを調査した。南側はほとんどが攪乱であり、3号溝の延長部分を調査したのみである。旧石器の調査は6ヶ所の調査坑を設けて10日に北側から開始し、18日まで行った。その後埋め戻し、木根の搬出、器材やプレハブなどの撤去を行い、調査は終了した。

外構部分(5-2区)

調査は3月に実施した。

表土除去は1日から開始し、8日まで継続した。その

間、調査区にかかる立木の伐採も実施した。遺構確認は1日から実施し、13号墳西側部分については1日から掘り下げを開始した。13号墳の掘り下げは7日まで継続して行い、その後埴輪列を調査し、11日からは測量、遺物取上を行い、15日に全景写真を撮影した。また、調査区南端部分には東西方向の大規模な溝が見つかり、6号溝と名付けて8日から調査を開始した。この溝の調査は15日まで継続した。その間、27号土坑、縄文土器集中部の調査を並行して行った。旧石器の調査は6ヶ所の調査坑を設けて14日から開始し、18日まで行った。その後埋め戻し、抜根とその搬出、事務処理などを行い、調査は終了した。

第3節 整理作業の概要

整理作業は平成25年4月1日より9月30日まで実施した。遺構図面は点検・修正・編集を行い、掲載図面をデジタルデータとして作成した。遺物については接合・復元、写真撮影、実測、トレースののち、実測図をスキャニングしてデジタルデータとした。同時に遺物観察を行い、遺物観察表を作成した。写真は遺構・遺物ともデジタル写真から編集を行った。以上の作業と並行して本文の執筆、土層注記や各種一覧表などを作成し、それらを併せてレイアウトを作成したのちデジタル編集し、報告書原稿を作成した。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

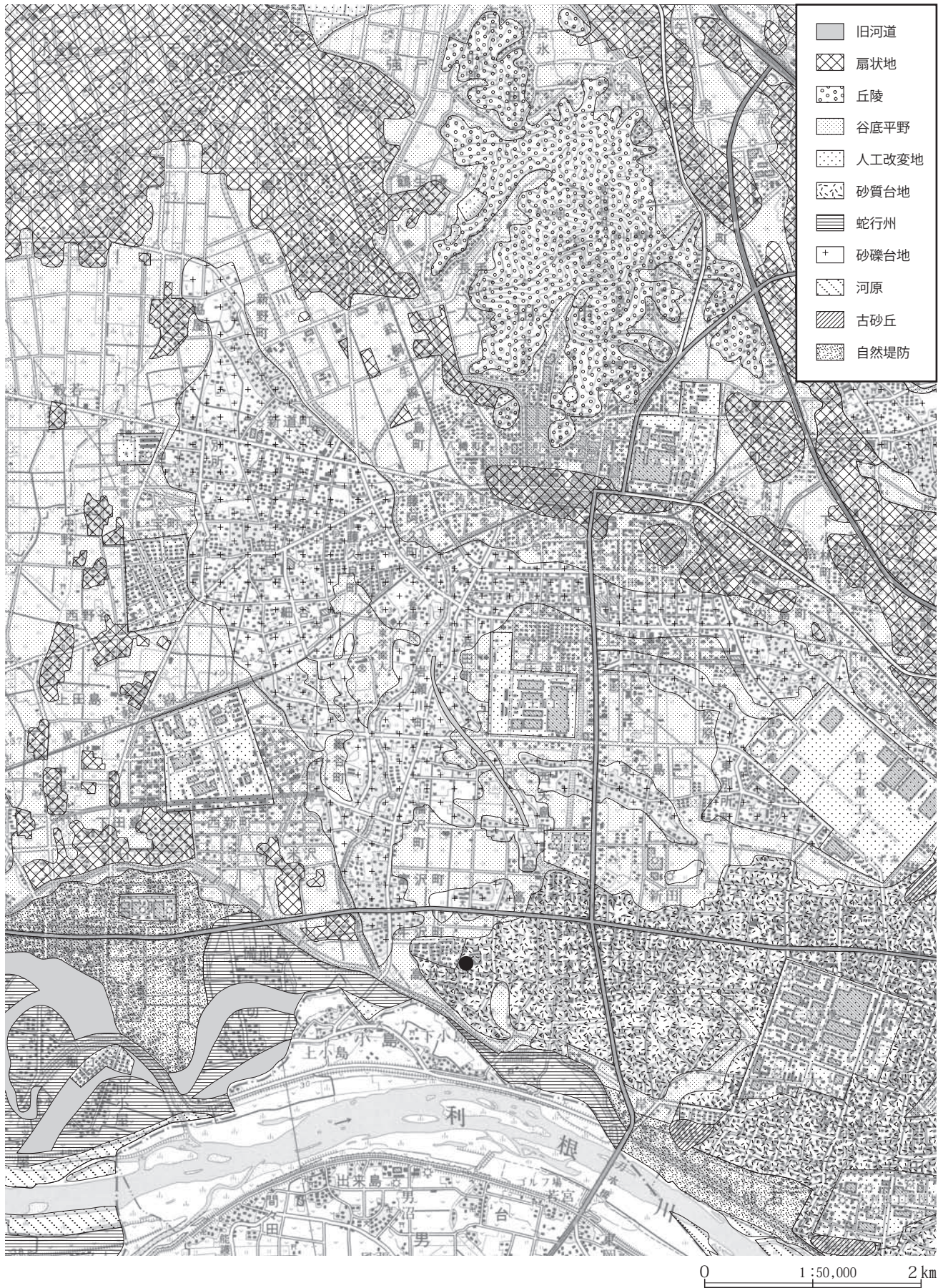
太田市は関東地方北部山地の南側にあり、広大な関東平野の北端に位置している。市域は平成の大合併で大きく広がったが、地形的には、北から中央東側にかけて八王子・金山丘陵がある以外はほぼ平坦で、全体に起伏には乏しく、西側は大間々扇状地、南側は低い台地と、それと高低差の少ない低地とが広がっている。市域の北東部は渡良瀬川、南は利根川によって画され、これがほぼ栃木県、埼玉県との境になっている。

高林西原古墳群のある太田市南部の地形分類は第4図の通りである。ここは大間々扇状地末端のさらに南東側にあたり、付近は低い洪積台地(砂礫台地や砂質台地)が東西方向に分布し、その台地と台地の間は沖積低地(谷底平野)となっている。これらの台地は、『太田市史・通史編 自然』(太田市 1996)によれば北から新井台地、飯塚台地、矢島台地、高林台地と呼ばれており、本古墳群はそのうち高林台地に立地する。

高林台地は、調査地となった県立がんセンターの西側付近を西端とし、そこから東の大泉町へと続く広い台地で、南北の幅は約1.8km弱あるとされる。標高はがんセンター内で36m程度であり、全体的には西から東への緩やかな下り傾斜になっている。この台地と沖積地との境

は、北縁(がんセンターのすぐ北側)では比高約1mしかなく、緩やかに移行してしまうのではっきりしないが、南縁の古戸町付近では比高3m前後の緩傾斜段丘崖となっていて明瞭である。台地の南側には石田川が流れ、さらにその南には利根川が流れている。調査地と利根川との距離は約1kmである。

高林西原古墳群はこの高林台地の西端付近にあるが、現在は全域が県立がんセンターの敷地と牛沢住宅団地になっている。そのため、地表面は全体に削平され、緑地帯として残されていた部分を除いて、旧地形はほとんど残されていないようである。ただし、本古墳群東側の高林鶴巻古墳群の一带には現在でも多くの古墳が残っているので、そこでは旧地形がかなり保存されていると思われる。それから見るとこの付近の台地上はほぼ平坦であったらしく、がんセンター敷地内に一部残る緑地帯の地形を見ても、調査区の範囲内ではさほど大きな地形変形は受けていないようにみえる。墳丘部分が完全に削平されてしまった古墳の周堀を、表土の下に見つけることができるのはそのためであろう。しかし、前掲の『太田市史・通史編 自然』によれば、昭和39年発行(昭和33年測量)の2万5千分の1地形図にはがんセンター付近に「周辺より5m程度高い小丘状地形が等高線で表現されている」とのことである。それは邑楽砂層と呼ばれる砂層の高まりであるとのことであるが、その後牛沢住宅団地の



第4図 周辺地形分類図

(地形分類は群馬県『土地分類基本調査・深谷』(1991)による。
 国土地理院5万分の1地形図「深谷」(平成10年9月1日発行)使用)

造成によって消滅してしまったという。とすれば、がんセンター周辺の住宅地は一部で大きな地形改変を受けているものと思われ、その部分に古墳が存在したとすれば痕跡すら残していない可能性があるので注意が必要である。

台地の内部は水に乏しいので、現在でもそこは住宅地や畑として利用され、水田は周囲の沖積地に作られている。このような土地利用は古墳時代でも同様であったと思われるが、台地上には集落と畠、古墳が作られていたと思われるが、本遺跡内では住居や畠は見つかっておらず、古墳時代後期には墓域としてのみ利用されていたようである。

第2節 歴史的環境

太田市周辺は多くの遺跡に恵まれ、古くから考古学の調査の盛んだった地域である。特に古墳時代には、東国一の規模を誇る天神山古墳を初めとして、多くの重要な古墳や遺跡が存在する。ここでは、それらの遺跡のうち、本遺跡周辺の遺跡を概観したい(第5図・第1～3表)。なお、以下で取り上げる遺跡の名称と、第5図に示した遺跡の範囲は、Web上で公開されている群馬県教育委員会文化財保護課による遺跡分布図(マッピングぐんま「遺跡・文化財」<http://www2.wagmap.jp/pref-gunma/top/select.asp?dtp=86&pl=3>、2013年8月現在)に依拠している。

まず旧石器時代については、これまではさほど調査例が多くなかった。しかし、近年国道354号線バイパスの関連調査が当事業団によって行われ、そのうちのいくつかの遺跡で旧石器が出土し、資料が増加している。福沢新田遺跡(23、○内の番号・文字は第5図、第1～3表の遺跡番号と一致する。以下同じ)では3点の縦長剥片、細谷合ノ谷遺跡(20)では黒曜石製のナイフ形石器が出土している。また、高林三入遺跡(39)では数カ所の石器ブロックが検出され、特にB区ではナイフ形石器、石核、剥片が計200点以上出土している。高林西原古墳群でも、平成12・13・16年度の調査で石器の出土が3ブロック見られ、まとまった資料が得られている。

縄文時代の遺跡も多くはない。五庵遺跡(46、調査時の名称は「築場遺跡」)では草創期の爪形文土器が出土し

ている。早期では燃糸文土器が五庵遺跡のほか、古戸町や牛沢町でも発見されている。中期はやはり五庵遺跡で中期後半の埋甕が発見されている。後期は細谷合ノ谷遺跡で後期中葉の竪穴住居、袋状土坑、埋甕などが確認されている。高林西原古墳群ではこの時代の遺構は陥し穴や土器集中部が見られ、少数の土器と石器が出土している。

弥生時代の遺跡は少なく、この地域の特徴である。この時期の土器片が見つかることはあるが、遺構は確認されていない。

古墳時代は、数多くの遺跡が存在する。前期の遺跡では、上野地域の古墳時代前期を代表する土器である、石田川式土器の標識遺跡の石田川遺跡(25)がある。昭和27(1952)年の石田川河川改修工事に伴う土取り工事によって発見され、調査された集落遺跡である。東海系の特徴を示す土器の一群が発見され、これが「石田川式」と命名された。この時期のきわめて重要な遺跡である。同じく前期の遺跡としては、本遺跡の近傍に高林遺跡(42)がある。昭和34(1959)年に明治大学の犬塚初重氏、小林三郎氏らによって発掘された集落遺跡であり、学史的にもよく知られている。前期の古墳では、頼母子古墳(シ)がよく知られている。残念ながら既に削平されて現存しないが、前方後円墳か円墳であったと思われる、銅鏃30点、三角縁神獣鏡などの銅鏡3面などが出土している。それらの遺物から、太田市周辺では最初期に出現した古墳の一つであると考えられている。この頼母子古墳の後を受けける古墳として、これも本遺跡の近傍に位置する朝子塚古墳(ソ)がある。調査は一部にとどまっているが、全長約124mの大規模な前方後円墳であり、4世紀後半のものと考えられている。また、富沢古墳群(L)では前期の方形周溝墓や円形周溝墓が確認されている。

朝子塚古墳のあと、大型古墳の築造はこの地域では見られなくなるが、中期末から後期にかけては、多くの群集墳が営まれる。その中で本古墳群と東側の高林鶴巻古墳群(D)とは一連のものと考えられる古墳群で、五世紀後半から古墳の築造が始まる。ここでは沢野村74号墳(テ、全長72m)、中原古墳(ト、全長56m)など、大型の帆立貝形古墳を中核として古墳群が形成された。これらの帆立貝形古墳のあとを受けける形で、本遺跡の東の東矢島古墳群(N)では6基の大規模な前方後円墳が、6世



第5図 周辺の遺跡

(国土地理院 2万5千分の1地形図「上野境」(平成22年12月1日発行)、「足利南部」(平成22年12月1日発行)、「深谷」(平成14年9月1日発行)、「妻沼」(平成15年6月1日発行)使用)

第1表 周辺遺跡一覧表(1)

古墳			
番号	古墳名	概要	文献
ア	稲荷塚古墳	径20mの円墳。形象埴輪は太田高校で保管。	53
イ	神明古墳	6世紀後半の全長42mの前方後円墳か。人物埴輪・円筒埴輪。	16
ウ	大塚古墳		53
エ	宝泉村第34号墳		53
オ	新井八幡神社古墳(九合村21号墳)	6世紀後半の円墳。割石乱石積み袖無型横穴式石室。金銅製耳環、埴輪。	16
カ	御庵稲荷古墳	円墳。	53
キ	九合村18号墳		53
ク	新井稲荷塚古墳(九号村19号墳)	全長50m程の前方後円墳か。刀、馬具、玉、鈴など。	16
ケ	紫雲塚古墳		53
コ	御殿山古墳(沢野村113号墳)	5世紀後半の粘土槨を主体部とする円墳か。	16、27、42
サ	細谷白山古墳(沢野村116号墳)	5世紀中頃の円墳。粘土槨らしき主体部から小型仿製鏡出土。	16
シ	頼母子古墳	前期古墳(前方後円墳か円墳)。銅鏃30本、銅鏡3面、刀身1振など。	16
ス	牛沢稲荷山古墳(沢野村27号墳)	全長41mの帆立貝形古墳。5世紀末～6世紀初頭か。	16、45
セ	鐘馮塚古墳(沢野村45号墳)	5世紀前半の円墳。粘土槨か。銅鏡2面出土。削平され現存しない。	16
ソ	朝子塚古墳(沢野村46号墳)	4世紀後半の前方後円墳。墳丘全長123.5m。形象埴輪(家形、盾形)、円筒埴輪。	16、34、41
タ	沢野村102号墳	終末期(7世紀前半)の複室構造横穴式石室を持つ円墳か。	16、18
チ	御嶽神社古墳(沢野村103号墳)	6世紀後半代。全長100m級の大型古墳。巨石使用の横穴式石室か。	16
ツ	沢野村78号北古墳		53
テ	沢野村74号墳	全長72mの帆立貝形古墳。	16
ト	中原古墳(沢野村72号墳)	全長56mの帆立貝形古墳。礫槨。短甲・大刀など出土。5世紀末か。	16
ナ	沢野村63号墳	直径40mの円墳。礫槨。挂甲小札・大刀など出土。6世紀初頭。	16、19
ニ	高林西原公園古墳	直径20mの円墳。6世紀後半。	16
ヌ	沢野村98号墳		53

古墳群

番号	古墳群名	概要	文献
A	高林西原古墳群	本書。鶴巻古墳群とは一連。『総覧』では併せて47基。5世紀後半～7世紀。	本書、6、16、41、47、48
B	小谷場古墳群	戦後削平。『総覧』では17基。中～後期の古墳群。	16、40、41、42、47
C	高林不動古墳群	『総覧』では5基。6世紀後半～7世紀前半。4基が残存。	16
D	高林鶴巻古墳群	西原古墳群とは一連で東側に分布。5世紀後半～7世紀。	14、16、39、45、48
E	藤阿久古墳群	径15mほどの円墳が多く、横穴式石室のものが主体か。6世紀代。	16
F	浜町古墳群	古墳後期。詳細不明。古墳～平安の堅穴住居を調査。	9、49
G	新井古墳群	6世紀後半から7世紀にかけての古墳群。	16
H	飯田古墳群	『総覧』では6基(前方後円墳1、円墳5)。既に消滅。	16
I	飯塚古墳群	『総覧』では12基。国宝武人埴輪の出土。4世紀以降の方形周溝墓や堅穴住居も確認。	16、39
J	岩瀬川古墳群	後期の古墳群。	16、32、33、47
K	細谷古墳群	5世紀代、あるいは前期古墳が存在する可能性も。冠稲荷神社内に5基が残存。	16
L	富沢古墳群	調査により32基の古墳を確認。前期の方墳から7世紀代まで。古墳前期・後期の堅穴住居も。	16、39、40、41、42、43、47
M	西矢島古墳群	前方後円墳1基の他、円墳からなる後期の古墳群。	16
N	東矢島古墳群	6基の大型の前方後円墳と多数の円墳からなる後期の古墳群。	16、34、46、47

その他の遺跡

番号	遺跡名	時代						遺跡の概要	文献
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近		
1	由良北原遺跡				○			散布地。	53
2	天狗林遺跡		○		○	○		古墳時代末主体の堅穴住居6軒、平安時代の溝1条などを調査。	42、46、47
3	由中遺跡				○			散布地。	53
4	由良天王遺跡				○	○		古墳～平安の集落。	53
5	清川遺跡				○			散布地。	47
6	宮元遺跡				○	○		奈良堅穴住居1軒、それ以前の堅穴住居1軒を調査。	48
7	藤久良住古遺跡				○			散布地。古墳。	53
8	大道北遺跡				○			古墳時代の集落。	53
9	舞台A・D遺跡				○	○		古墳後期の大規模集落。土坑から大量の炭化米出土。	16、20、22、23、24、47
10	舞台C遺跡				○	○		古墳後期の集落。中世末～近世土坑墓群。	21、46、47、48
11	塚畑遺跡		○		○	○		縄文後期の土坑、平安の堅穴住居などを調査。	5
12	屋敷内遺跡				○		○	土坑墓・井戸等中世の遺構多数。館関連か。	1
13	今井屋敷跡						○	城館跡。既に消滅。13、14世紀。堀。大量の茶臼・摺臼など出土。	13、17、52

第2章 遺跡の位置と環境

第2表 周辺遺跡一覧表(2)

番号	遺跡名	時代						遺跡の概要	文献
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近		
14	中道西遺跡				○			散布地。	53
15	川窪遺跡				○			古墳前期～後期、平安の集落跡。	16、27、42、47、48
16	烏屑遺跡				○			散布地。	53
17	細谷東遺跡				○			散布地。古墳が存在するか。	46、49
18	細谷中遺跡				○	○	○	古墳～平安の集落。近世墓など調査。	43、47、48
19	細谷八幡遺跡				○	○		古墳～平安の集落。	7、8、27、42
20	細谷合ノ谷遺跡	○	○			○		旧石器ナイフ形石器出土。縄文後期竪穴住居、埋葬、土坑、奈良・平安竪穴住居などを調査。	8
21	御手洗遺跡		○		○			縄文土器多数出土。古墳時代後期の溝などを調査。	41
22	細谷南遺跡				○	○		古墳～平安の集落。B下水田。	7、48
23	福沢新田遺跡	○			○	○	○	旧石器縦長剥片3点出土。平安竪穴住居、中世溝などを調査。	8、46、47
24	米沢中遺跡				○			古墳前期の遺跡。舟形土製品が出土。	16
25	石田川遺跡				○	○		古墳前期の集落。石田川式土器の標式遺跡として有名。平安の竪穴住居も。	12、15、16、29、49、51
26	米沢東遺跡				○			散布地。	53
27	FP泥流下遺跡群			○	○	○	○	FP泥流に埋没した畠跡などの存在が想定される。	53
28	牛沢城跡						○	城館跡。16世紀。堀、土居、戸口。	13、17、52
29	富沢館跡						○	城館跡。既に消滅。16世紀。堀。	13、17、52
30	屋敷東遺跡				○			古墳時代の集落。	53
31	北松島遺跡				○			散布地。	53
32	道灌谷戸遺跡				○			散布地。	53
33	岩瀬川遺跡				○			古墳時代の集落。	53
34	棒ヶ谷戸遺跡				○			散布地。	53
35	家前遺跡				○			散布地。	47、48
36	杉ノ下遺跡				○			古墳時代の集落。	45
37	飯玉遺跡				○			散布地。	53
38	八反田遺跡				○	○	○	古墳～中近世の土坑、井戸、溝などを調査。	3
39	高林三入遺跡	○			○			暗色帯、B Pの上下から旧石器出土。古墳前期～中期の集落。	3、46
40	高沢遺跡				○	○		古墳前期、奈良・平安の集落。	44
41	高林城跡						○	城館跡。既に消滅。16世紀。	13、17、52
42	高林遺跡				○			古墳前期の集落。	16、46、48、50
43	下田遺跡				○			古墳時代の集落。	53
44	小谷場遺跡				○			古墳時代の集落。	53
45	高林不動遺跡				○			古墳時代の集落。	53
46	五庵遺跡		○		○	○		文献2は築場遺跡として調査。爪形文土器出土。8世紀代の竪穴住居。	2、46
47	高林梁場遺跡				○	○		古墳後期、平安の集落。	28、43
48	高林環濠遺構						○	城館跡。近世の代官所だが、中世の遺構か。高林陣屋とも。堀、土居、戸口。	13、17、52
49	高林本郷遺跡				○	○		散布地。古墳。	53
50	向野遺跡				○	○		古墳後期と平安の集落。	42、44、47、49
51	東矢島廃寺					○		昭和初期に古瓦出土。軒丸瓦・文字瓦がある。寺院跡と推定。	16
52	東矢島遺跡				○	○		散布地。	46、48、49
53	古戸赤城遺跡		○		○			散布地。古墳。	47、49
54	和田遺跡		○		○	○		散布地。古墳。	53
55	篠際遺跡				○	○		散布地。	53
56	宮下遺跡		○		○	○		散布地。	53
57	西原遺跡				○	○		散布地。	53
58	毘沙門遺跡		○		○	○		散布地。	53
59	道知塚遺跡				○			竪穴住居、古墳周溝などを調査。	29、33
60	新ヶ谷戸遺跡				○	○	○	古墳前期～中期、平安の竪穴住居、古墳、中世館跡などを調査。	30、31、32、33、35、46
61	沖ノ林遺跡				○	○	○	古墳前期の集落。中世屋敷跡。	27、29、30、44、48
62	田谷遺跡				○	○		古墳～平安の集落。	28、37、48
63	宮西遺跡				○	○	○	古墳後期、平安の集落。近世土坑墓も調査。	25、42、48
64	矢島城跡						○	城館跡。16世紀。堀、土居。	13、17、52
65	矢島城跡						○	城館跡。16世紀。堀、土居。	13、17、52
66	西矢島遺跡				○	○		古墳～平安集落。	45、48
67	北明泉寺遺跡				○	○		古墳時代の集落。	45、47、48

第3表 周辺遺跡一覧表(3)

番号	遺跡名	時代						遺跡の概要	文献
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近		
68	宮前遺跡				○			古墳時代の集落。	31、47
69	小舞木遺跡			○	○	○	○	散布地。	47、48
70	新井館跡						○	城館跡。14～16世紀。堀。	13、17、52
71	北田環濠遺構群						○	城館跡。2つの環濠跡。	13、17、52
72	宮内遺跡		○		○	○		古墳～平安の集落。	5、9、38、46、47、48
73	浜町遺跡		○		○	○	○	古墳～平安の集落。中世の溝、井戸。	4、9、16
74	本陣跡						○	近世太田宿の本陣跡。一部発掘調査。	36
75	稲荷前遺跡					○		平安の竪穴住居を調査。	5
76	三島木遺跡		○		○	○		縄文土坑、奈良・平安の竪穴住居、中近世の掘立柱建物などを調査。	5

文献一覧

1 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985 『浜町屋敷内遺跡C地点』	26 太田市教育委員会 1992 『市内遺跡Ⅷ』
2 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003 『築場遺跡』	27 太田市教育委員会 1993 『市内遺跡Ⅸ』
3 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005 『高林三入遺跡・八反田遺跡』	28 太田市教育委員会 1994 『市内遺跡Ⅹ』
4 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005 『浜町遺跡』	29 太田市教育委員会 1995 『市内遺跡Ⅺ』
5 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006 『塚畑遺跡・宮内遺跡・稲荷前遺跡・三島木遺跡・城ノ内遺跡』	30 太田市教育委員会 1996 『市内遺跡Ⅻ』
6 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006 『高林西原古墳群』	31 太田市教育委員会 1997 『市内遺跡Ⅼ』
7 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007 『細谷南遺跡・細谷八幡遺跡』	32 太田市教育委員会 1998 『市内遺跡Ⅽ』
8 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007 『福沢新田遺跡・細谷合ノ谷遺跡・細谷八幡遺跡』	33 太田市教育委員会 1999 『市内遺跡Ⅾ』
9 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012 『浜町遺跡・浜町古墳群・宮内遺跡』	34 太田市教育委員会 2000 『市内遺跡Ⅿ』
10 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007 『年報26』	35 太田市教育委員会 2001 『市内遺跡ⅰ』
11 群馬県 1981 『群馬県史 資料編3』	36 太田市教育委員会 2003 『市内遺跡ⅱ』
12 群馬県 1990 『群馬県史 通史編1』	37 太田市教育委員会 2004 『市内遺跡20』
13 群馬県教育委員会 1989 『群馬県の中世城館跡』	38 太田市教育委員会 2005 『市内遺跡21』
14 東毛病院宿舍遺跡調査会 1993 『西原古墳群』	39 太田市教育委員会 1991 『埋蔵文化財発掘調査年報1』
15 石田川遺跡調査会 2001 『石田川遺跡』	40 太田市教育委員会 1992 『埋蔵文化財発掘調査年報2』
16 太田市 1996 『太田市史通史編 原始古代』	41 太田市教育委員会 1993 『埋蔵文化財発掘調査年報3』
17 太田市 1997 『太田市史通史編 中世』	42 太田市教育委員会 1994 『埋蔵文化財発掘調査年報4』
18 太田市教育委員会 1969 『澤野村102号古墳報告書』	43 太田市教育委員会 1995 『埋蔵文化財発掘調査年報5』
19 太田市教育委員会 1971 『沢野村63号墳発掘調査概報』	44 太田市教育委員会 1996 『埋蔵文化財発掘調査年報6』
20 太田市教育委員会 1981 『舞台A遺跡の概要』	45 太田市教育委員会 2008 『太田市内遺跡3』
21 太田市教育委員会 1982 『舞台C遺跡確認調査の概要』	46 太田市教育委員会 2009 『太田市内遺跡4』
22 太田市教育委員会 1983 『舞台D遺跡確認調査の概要』	47 太田市教育委員会 2010 『太田市内遺跡5』
23 太田市教育委員会 1984 『市内遺跡発掘調査 舞台D遺跡』	48 太田市教育委員会 2011 『太田市内遺跡6』
24 太田市教育委員会 1985 『市内遺跡Ⅱ』	49 太田市教育委員会 2012 『太田市内遺跡7』
25 太田市教育委員会 1987 『市内遺跡Ⅲ』	50 大塚初重・小林三郎 1967 『群馬県高林遺跡の調査』『考古学集刊 第3巻第4号』東京考古学会
	51 尾崎喜左雄・今井新次・松島栄治 1968 『石田川』
	52 山崎一 1971 『群馬県古城址の研究 上巻』群馬県文化事業振興会
	53 マッピングぐんま 遺跡・文化財(2013年8月のデータを使用)

紀中頃から後半にかけて継続して築造される。これらの古墳の存在は、この地域にかなりの勢力をもった豪族が成長していたことを示すが、これらの古墳の周辺には数多くの円墳が作られ、その築造は7世紀代まで継続して、大規模な群集墳を形作ることとなった。本古墳群の近傍にはこれらの古墳群の他に、南側に6世紀前半から7世紀前半の高林不動古墳群(C)が、西側には小谷場古墳群(B)があり、さらに東矢島古墳群の北西には前方後円墳1基のほか、円墳多数からなる西矢島古墳群(M)がある。台地上は戦後の開発が著しく、そのため消滅してしまっ

た古墳も多いので、詳細を把握するのは困難であるが、この地域が県内有数の古墳密集地であることは間違いな。その他、本古墳群からやや離れた地域も見渡せば、6世紀代の藤阿久古墳群(E)、詳細は不明だが後期の浜町古墳群(F)、全て円墳からなる6世紀後半から7世紀代の新井古墳群(G)などが北にあり、西側には岩瀬川古墳群(J)、冠稲荷神社付近には細谷古墳群(K)がある。これらの古墳群の動向も、本古墳群の歴史的位置を考える上では重要である。

古墳時代中～後期の集落跡は周辺に数多くあったもの

と考えられ、細谷南遺跡(22)、高林築場遺跡(47)などで調査されている。本遺跡内では、竪穴住居はまったく見つかっておらず、この時期には墓域としてのみ利用されていたらしい。

奈良・平安時代では、東矢島古墳群の中に東矢島廃寺(51)があることが特筆される。この付近には東山道武蔵路が通っていると推定され、さらに東の大泉町古氷は邑楽郡家推定地であり、古代では要衝の地である。そこに古代寺院が建立されていることはきわめて重要な事実である。しかし、東矢島廃寺は瓦の出土が知られているのみで、遺構は全く不明であり、現在ではその位置すら明確ではなくなっている。

集落跡では向野遺跡(50)、五庵遺跡(46)、細谷八幡遺跡(19)、細谷南遺跡(22)などが調査されている。

なお、東山道武蔵路の有力な推定地が八反田遺跡(38)として調査されたが、そこには道路跡が発見されず、まだこの周辺の武蔵路の位置は確定していない。

中近世ではこの地域にも多くの館、城の跡が知られているが、本遺跡ではこの時期の遺構、遺物が全く見つからないので、図と表で位置と概要を示すにとどめ、詳細は省略する。

第3節 基本土層

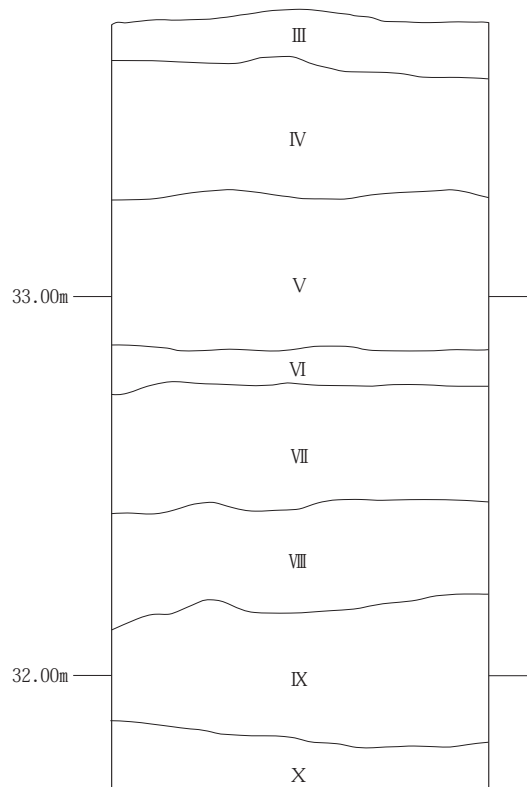
今回の調査区は、ここに病院、養護学校が建設されて以来、様々な用途に使用されていたため、旧地表は全体に削平を受け、攪乱の激しい表土を除去すればその下層はすぐにローム、あるいはローム漸移層となる部分がほとんどであった。

第6図に示す基本土層は、調査区中央に設定した旧石器調査坑4の北壁を実測したもので、表土除去後の層位を示している(位置は47ページ第37図「旧石器時代調査坑配置図」に示した)。Ⅲ～Ⅹの層の番号は、前回の調査の際の基本土層番号を踏襲している。本来はこの上層にⅠ・Ⅱの2層が見られるはずであるが、この地点では削平されていた。Ⅰ層とⅡ層の特徴は次の通りである。このⅠ層の上に表土・旧表土がのるのが、本遺跡の基本土層ということになる。

Ⅰ層 黒褐色～暗褐色土 古墳周堀はこれを切っている。本来この上面が遺構確認面だが、大部分の

場所では後世の削平のため、この層は消滅している。

Ⅱ層 暗褐色～褐色土 ローム漸移層。



- Ⅲ 黄褐色ローム ソフトローム。
- Ⅳ 黄色ローム ハードローム。As-YPを含む。非常に固く締まっている。場所によっては薄くなる。
- Ⅴ 暗褐色ローム 固く締まっている。As-YPを含む。
- Ⅵ 褐色ローム 層厚が薄く、はっきりしないところも多い。
- Ⅶ 黒褐色土 暗色帯。北に行くほど色が薄くはっきりしなくなる。
- Ⅷ 黄色ローム
- Ⅸ 黄褐色ローム 非常に固く締まっている。黄色ロームと斑状になる。次のⅩ層との境界は漸移的に変化し、不明瞭である。
- Ⅹ 黄色ローム 固く締まっている。黄白色のシルト質の土を含む。分層は困難な場合が多い。下層では灰色砂を含むようになる。これ以下は灰色砂層になり、非常に固く締まっていてスコップでも掘ることができないほどである。

第6図 基本土層

第3章 調査の成果

第1節 成果の概要

以下、平成24年度の調査成果を報告する。その際、既に報告済みの平成12・13・16年度の調査の成果を引用する場合が多いが、煩雑となるので、以下の記述では平成12・13・16年度の調査をまとめて「前回」の調査、平成24年度の調査を「今回」の調査と呼び分けることにする。

今回の調査で確認し本書で報告する遺構の数は、古墳5基、溝3条、土坑12基、集石1ヶ所、縄文土器集中部1ヶ所である。そのうち、古墳1基(1号墳)と溝1条(3号溝)は前回調査したものの延長部分である。したがって本遺跡において当事業団が調査した遺構の総数は、古墳15基、溝5条、土坑26基、集石1ヶ所、ピット6基、縄文土器集中部1ヶ所となる。その他に旧石器の集中部が3ブロックである。

今回の調査区は前回の調査区の南西に位置し(第2図)、かつて養護学校のグラウンド、体育館などとして利用されていた場所である。養護学校が廃止され、新病棟が建設された後には、一部に立木が植えられていた以外は駐車場として使用されていた。そのため、地表面はほぼ平坦に整地され、古墳墳丘の高まりは残されていなかった。さらに、調査区内には近現代の攪乱が数多く掘り込まれ、遺構の残りはかなり悪かった。特に調査区南部と東部は攪乱が激しく、12号墳東側、14号墳南側、3号溝南側はそれによって破壊されていた。

古墳は北東隅に1基(1号墳)、北端部に1基(15号墳)が掛かるほか、中央部に3基(12・13・14号墳)が見つかった。調査区が狭く攪乱が多いため全体を調査できたものはないが、前方部のようなものは見られず、残されている周堀の形を見る限りいずれも円墳であると思われる。大きさは周堀内径で計測して、1号墳が21～22m、12号墳が15～16m、13号墳が約17m、14号墳が9.5m、15号墳は14～15mであり、小規模な古墳である。墳丘盛土は13号墳でわずかに残っていたが、全体に削平が著しく、その他の古墳では周堀だけが残っている状態であ

あった。しかも、14、15号墳のように径の小さい古墳は周堀が浅く、底部がかろうじて残っている状態だった。そのため、攪乱が多い部分では、このような小規模な古墳が消滅してしまっている可能性も考えられるので注意が必要である。

出土遺物はほとんどが埴輪であり、12、13号墳から多く出土している。その他の古墳からは出土していない。特に13号墳は円筒埴輪列が倒れたような状態で出土している。1号墳は平成12・13年度の調査では多くの遺物が出土したが、今回は周堀外側のごく一部の調査であり、遺物は全くみられなかった。

13号墳では墳丘部の中央に不整形の溝が巡っていて、その性格が目される。

これらの古墳の時期は、FAとの層位関係からある程度把握することが可能である。13号墳は墳丘盛土下にFAの堆積が見られ、6世紀初頭のFA降下直後に構築されたものと思われる。12号墳は、盛土は削平されて残っていなかったが、確認面にわずかにFAの堆積が見られたので、少なくともFA降下後に構築されたものと思われる。14・15号墳の2基は出土遺物がなく、また周堀埋土も浅すぎるため、FAの堆積がなかったと断定することもできないので、時期を特定することはできない。1号墳は平成12・13年度の調査で周堀埋土にFAを確認しているため、その以前に構築されたものである。

3条の溝のうち、3号溝は埋土にB軽石が混入しており、中世以後のものと思われる。今回の調査区内では直線的な溝がL字形に曲がるような形状をしているので、何らかの区画溝であると思われるが、平成13年度の調査区では9号墳と重複する部分が曲線的に曲がっていた。5号溝は短く、出土遺物もないので時期・性格共に特定できない。6号溝は上面幅が3.0～3.4mと推定され、深さ1.9mの大規模な直線溝である。埋土からは唯一の遺物としてS字状口縁台付甕が出土している。この時期の遺物は他に全くみられないので、この溝は古墳時代前期にまで遡る可能性があるが、埋土にFAの堆積は見られない。埋土上層にはB軽石を含むので、その頃にはほぼ埋まったようである。

第3章 調査の成果

土坑は時期・性格とも不明なものが多い。古墳・溝と重複するものはそれよりも新しく、埋土にB軽石を含むものも見られるので、中・近世のものが多いと思われる。

調査区南西隅付近には縄文土器が集中して出土するところがあり、「縄文土器集中部」と名付けて調査した。周辺は攪乱が激しいが、ピットがほぼ円形に取り囲んでいるようにも見えるので、住居があった可能性も否定できない。

その他に14基のピットを調査したが、そのうち10号ピットは径が大きいため28号土坑と改称し土坑として報告した。それ以外のピットはいずれも浅く散在しているため遺構とは考えられず、攪乱と判断した。

以上の遺構の調査が終了した後、旧石器時代の調査を行ったが、遺構・遺物とも見つからなかった。

第2節 古墳

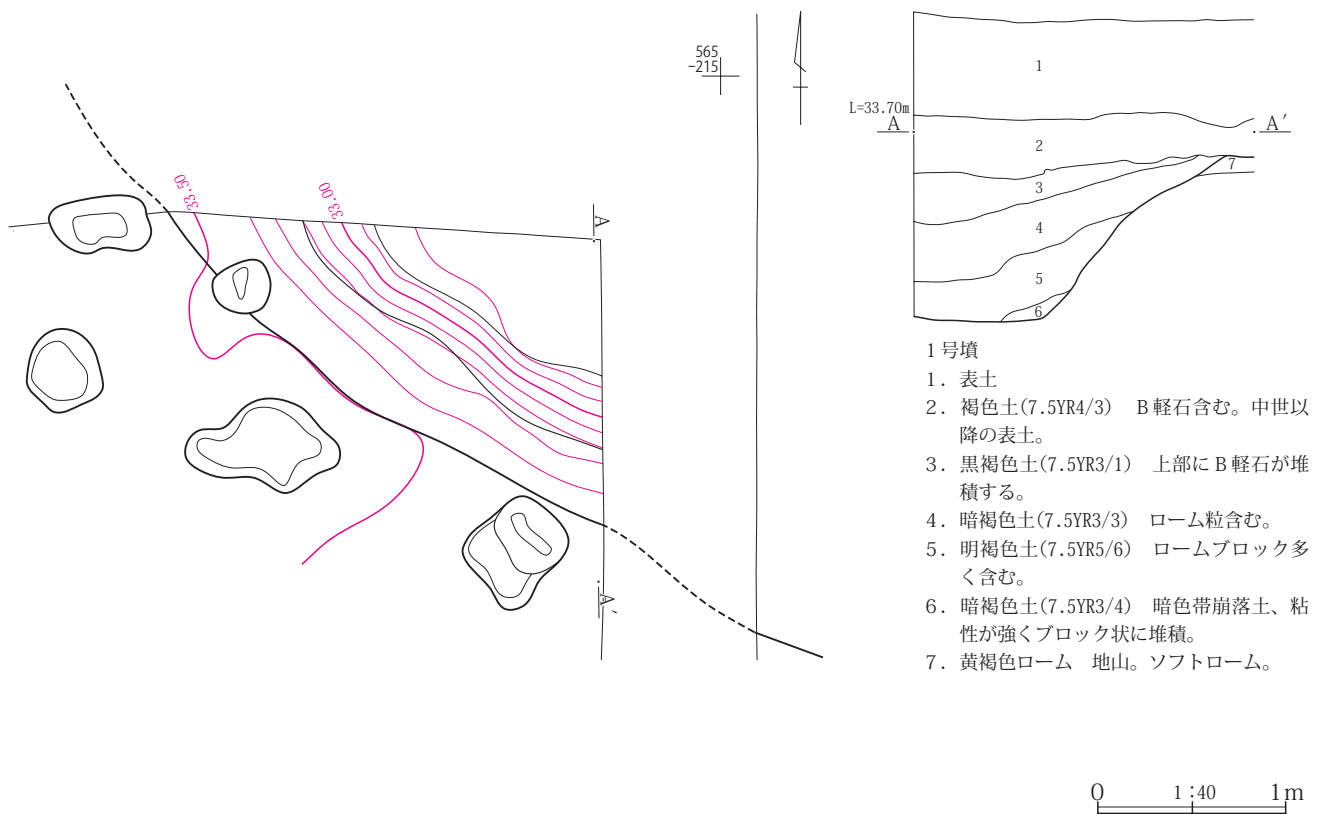
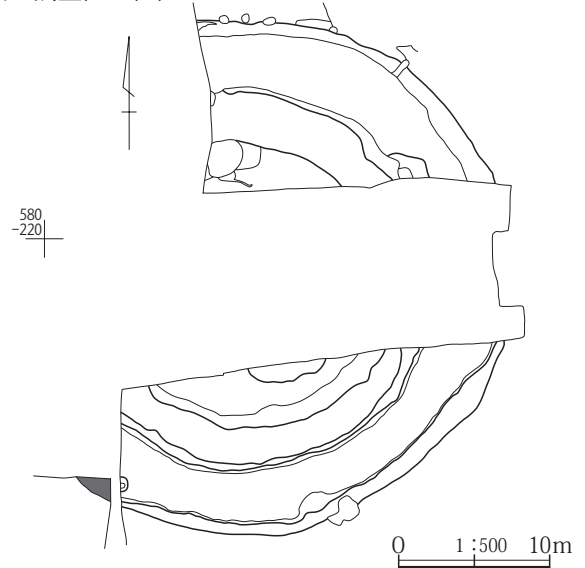
今回の調査では古墳は合計5基調査したが、そのうちの1基(1号墳)は前回調査したものの西側延長部であり、今回新たに調査したのは4基である。調査区が狭く攪乱も非常に多いので、全体を調査できた古墳はないが、

いずれも円墳であると思われる。

1 1号墳(第7図、PL. 2-2)

1号墳は前回の調査で確認した古墳で、周堀内径で21～22m、周堀も含めると径34.5～35.0mの円墳である。ただし、西側が大きく未調査区となるので、帆立貝形である可能性が残されている。前回調査できた古墳の中で

今回の調査区の位置



第7図 1号墳平断面図

は5号墳と共に最大の規模をもっている。墳丘盛土が一部残っていたが、中央部に大きな攪乱が掘られていたため、主体部は全く残っていなかった。残りは悪いものの周堀埋土にFAの堆積が見られるので、築造時期はFA降下前に溯り、調査した古墳の中では最も古いものの一つである。南半部には円筒埴輪列が残るなど、遺物の出土は多かった。

今回の調査では、この1号墳の周堀が5-1区の北東隅にわずかにかかっていた。調査した位置は第7図右上の通りで、古墳の南西部に当たる。わずかな範囲なので、今回の調査によって墳形や直径に変更の必要が生じるということはない。この部分の周堀の深さは、最も深いところで0.88mである。周堀埋土の上層にはB軽石が見られたが、FAの堆積は確認できなかった。前回の調査区でもFAの堆積は部分的に残っているだけだったので、ここで見られないとしても不思議ではない。

出土遺物は全く見られなかった。これは今回の調査区が周堀の外側に当たるからであろう。前回の調査でも周堀内の遺物は墳丘近くから出土するが多かった。

小結 前回調査した古墳の延長部である。小面積の調査であり、遺物も出土しないが、前回の調査結果によれば、墳丘内径21～22mの円墳(帆立貝形の可能性が残る)であり、周堀埋土にFAが見られるので築造時期はその降下以前、5世紀末～6世紀初頭ころであると思われる。

2 12号墳(第8～11図、第5・6表、PL. 2-3～5, 13, 14)

5-1区中央東側にある。水道管が南北に縦断し、その東側は大きな攪乱によって破壊されている。また南東側には外灯が設置されていて掘削することができなかった。そのため調査できた範囲に限られ、古墳全体から見れば部分的な調査にとどまったので、古墳の形を明確にすることはできなかった。しかし、周堀が全体に円弧を描いているのは確実であり、周囲の古墳同様円墳であると考えるのが妥当であろう。円墳であるとするれば、調査できたのは周堀全体の1/4程度であるが、墳丘部はごくわずかである。

古墳の大きさは周堀の形がかなり歪んでいるので計測が困難であるが、周堀外径は約21mと推定される。内径は周堀が緩やかに立ち上がる部分が多いのでさらに計測が困難だが、15～16mと復元できる。とすれば周堀の

幅は2.50～3.00mとなる。周堀の深さは周堀外側から計測すると、北半部は0.50～0.56mと浅く、南半部は土坑状に急激に深くなり、0.93～1.30mである。堀の断面形は基本的には逆台形で、底面は平坦であるが、斜面は途中で1、2回角度を変え、上に行くにしたがって傾斜が緩やかになる。周堀の内側は崩れてしまったらしく、特に北半部は傾斜が緩やかになってしまい、周堀と墳丘部の境がはっきりしない。周堀の埋土上層には、他の古墳と同様、B軽石を多く含む層が堆積していた。墳丘の盛土は削平されて全く残っていなかったが、確認面にわずかにFAの堆積が見られた。

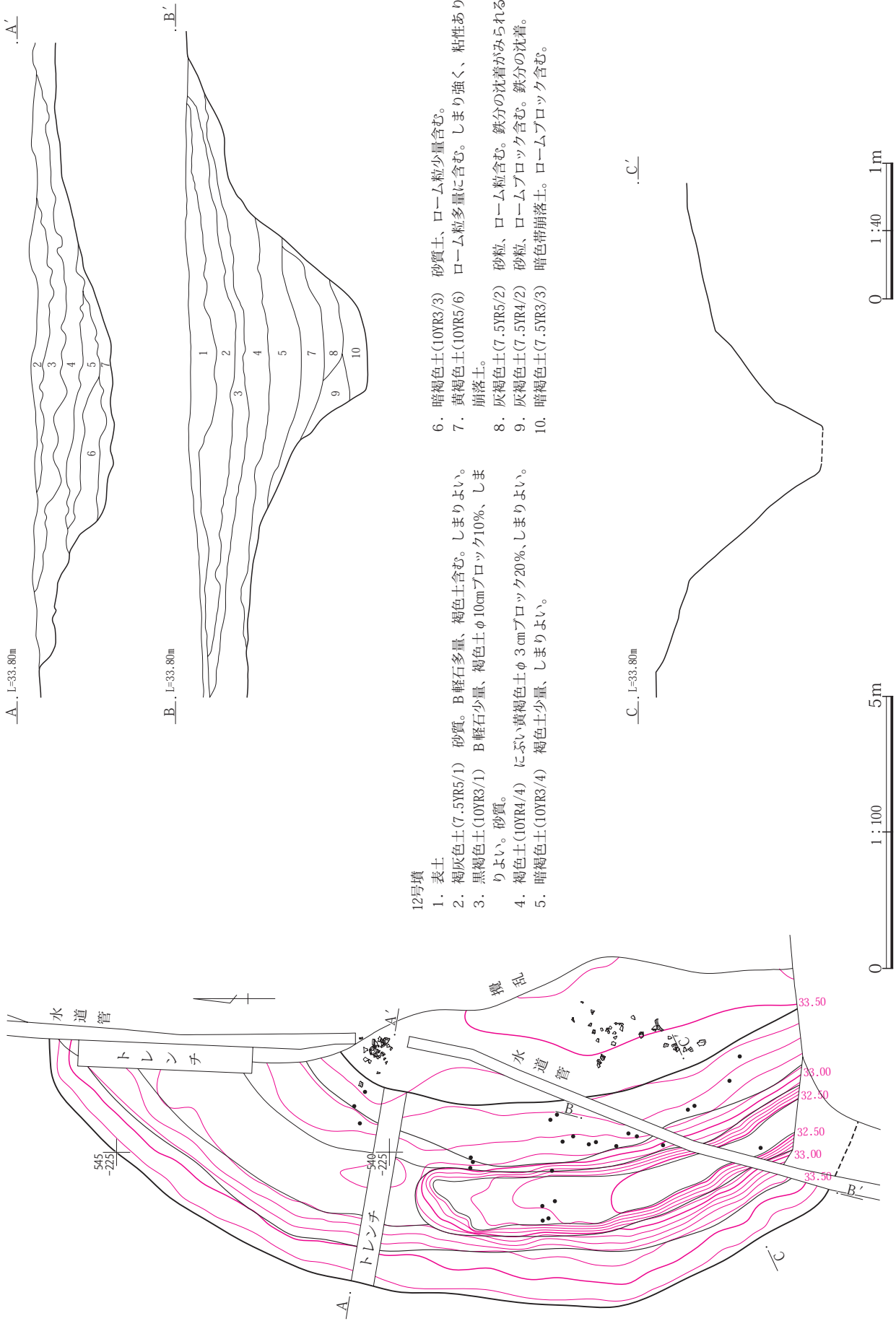
出土した遺物は、中世の遺物1点と時期不明の土器1点を除けばすべて埴輪片で、そのほとんどは墳丘部と周堀の墳丘側から出土している。いずれも小破片になっているが、第9図にみるように、同一個体の破片は小範囲にまとまる傾向が見られるので、墳丘裾部に立てられていた埴輪の破片が周堀側に落ち込み、その一部が残ったものと考えられる。

出土した埴輪はほとんどが円筒埴輪である。

円筒埴輪は、ある程度の大きさに復元できたものは16個体分である。口縁から底部までを残すものは1点しかなく、その他は部分的にしか残っていない。そのため、断定はできないが、規格はすべて2条3段構成であると思われる。器高は1個体(1-1)でしか計測できないが、その個体は31.5cmである。口径は11点で計測、あるいは推定でき18.0～22.0cm、底径は4点で計測・推定ができ10.6～12.8cmである。観察できた個体に限れば、基底部には特に伸長化の傾向は見られない。少ない個体での計測・推定ではあるものの、数値にあまりばらつきがないので、以上の数値がこの古墳の円筒埴輪の大きさの傾向を示していると考えられる。この大きさは、前回調査の諸古墳や今回調査の13号墳のものとは比べて、全体に小ぶりである。

外面調整はヘラナデと思われるもの(7)、ヘラ削りのもの(14)が1点ずつあるほかは縦ハケで、その後口縁部を横ナデする。ハケ目の密度は1cm当たり3～7本とバラツキがあり、同一個体と思われるものでも部位によって異なってみえる(1-1～4)。

内面調整は、指・ヘラによる縦ナデで、口縁部付近には斜縦のハケ目を施しているものが多い。外面・内面と



第8図 12号墳平面断面図

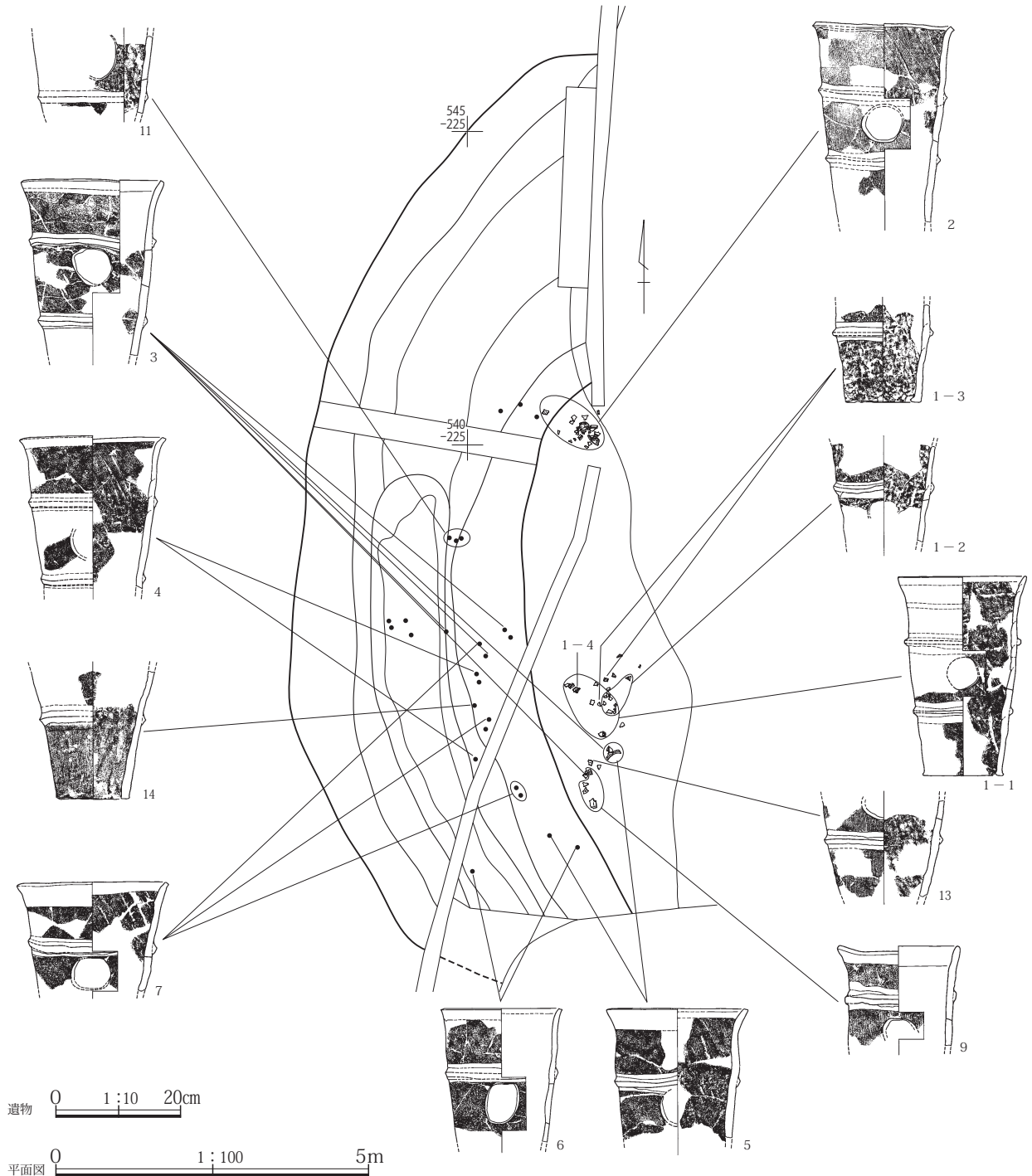
も調整はやや雑な印象を受けるものが多く、1-1の内面は、粘土紐接合痕が消しきれずに残っている。

突帯は全体に低く、はっきりしないものが多い。断面形状は台形のもの、M字状のもの、三角形のものがあるが、しっかりした台形のものではなく、台形に分類したものの大部分は下稜が低く、中には三角形に近くなってしまっているものもみられる。突帯を貼り付けた後には上下に横ナデを施すが、やや雑なものが目につく。

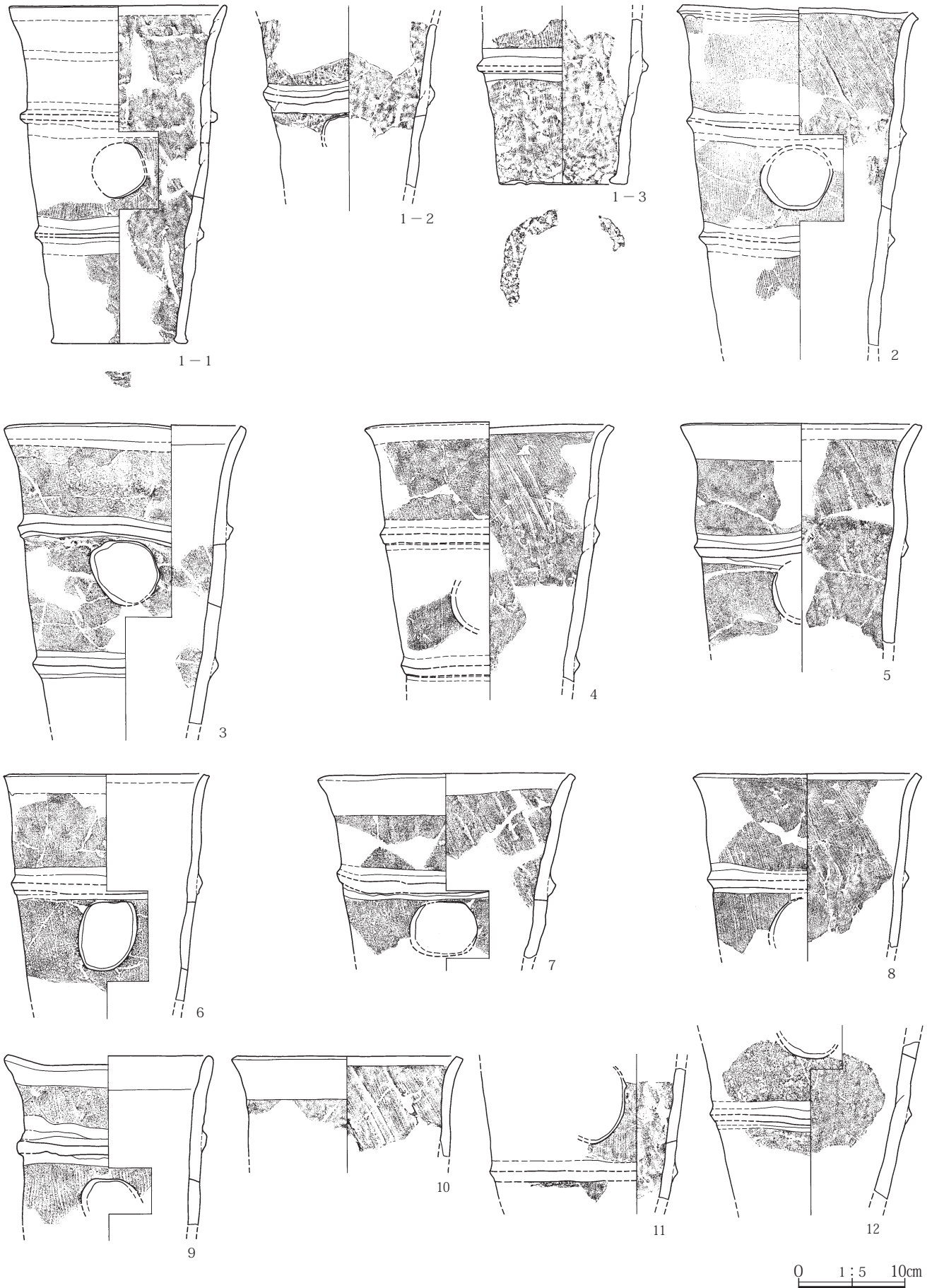
透孔はすべて2段目にあり、基本的に円周の対称的な位置に2ヶ所開けられているが、4のようにやや乱れるものもある。形は正円形が多いが、やや縦長で上部が平らになる形も2点で見られる。

ヘラ記号は3、10、18の3点にみられ、いずれも口縁部付近の外面に横線「一」を一本引いているものであり、他のものはみられない。

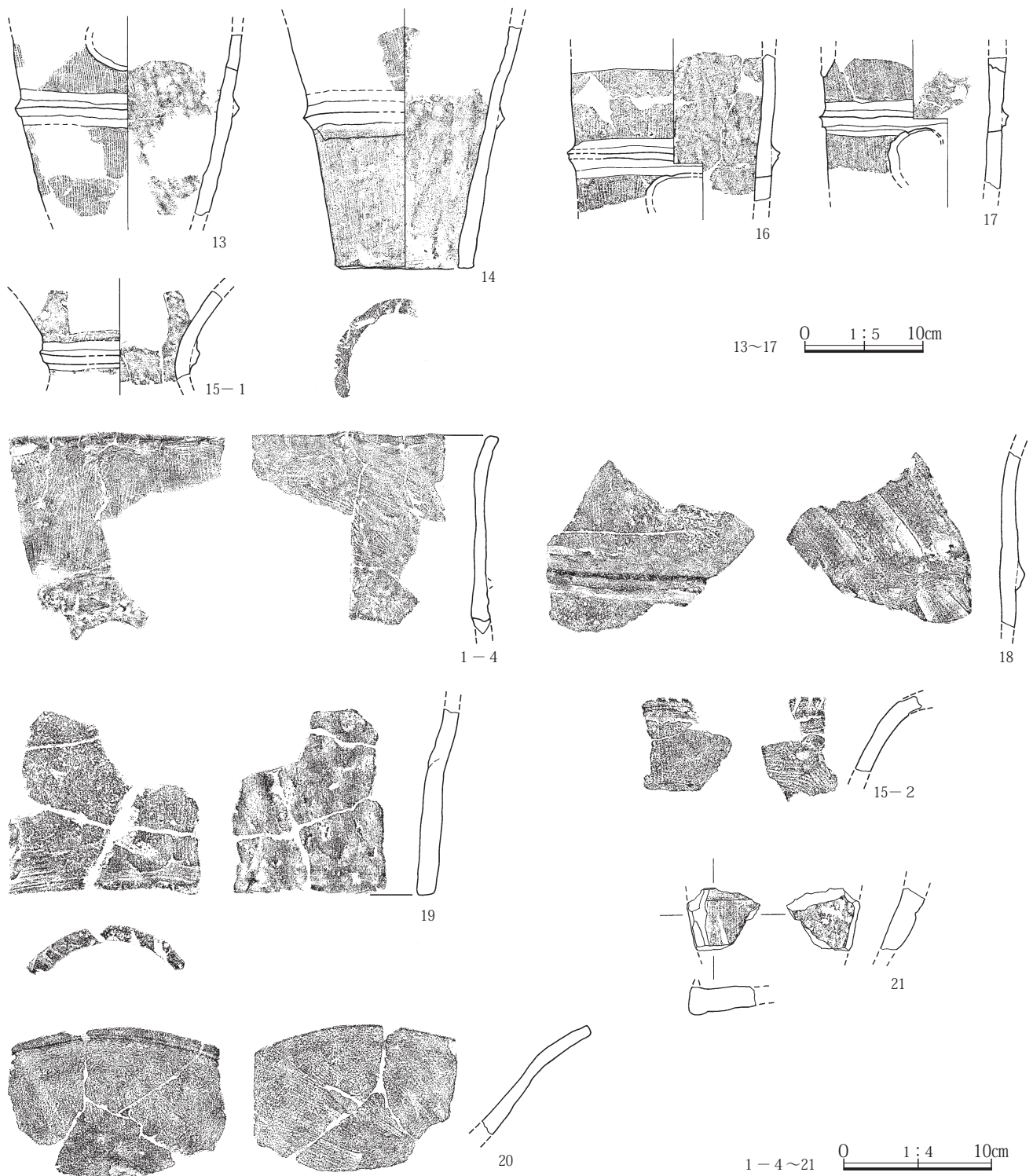
底部調整は顕著ではなく、19には禾本科植物の茎の圧



第9図 12号墳出土遺物分布図



第10図 12号墳出土埴輪(1)



第11図 12号墳出土埴輪(2)

痕が残っている。

朝顔形埴輪は4個体の出土を確認している。いずれも小破片なので、全体の規格を知ることはできない。このうち、16と17とは胴部の破片であるが、径がやや細く、透孔が各段に開けられていることが円筒埴輪と異なるため、朝顔形埴輪の円筒部分と判断したものである。

形象埴輪は1点(21)のみ確認している。小破片なので不確実ではあるが、家形埴輪の屋根の部分ではないかと思われる。家形埴輪の破片はその他に13号墳や遺構外からも出土しているが、その特徴から同一個体と考えられる。

掲載した遺物の他に、小破片の埴輪が221点出土して

いる。そのうち円筒埴輪と思われるものが128点あるが、その中には朝顔形埴輪や形象埴輪の円筒部分が含まれている可能性もある。

小結 一部の調査にとどまったが、周堀内径15～16m、周堀外径約21mの円墳であると推定した。墳丘部から周堀にかけて出土した埴輪は大部分が円筒埴輪だが、朝顔形埴輪が少数含まれている。形象埴輪は家形のみが見つかった。墳丘盛土は削平されて全く残っていなかったが、盛土下にFAがわずかに堆積していることを発掘調査時に確認しているため、FA降下後の築造であると思われる。

3 13号墳(第12～21図、第6～8表、PL. 3～7、15～17)

調査区中央西寄りにある。今回の調査では5-1区、5-2区にまたがっており、2回に分けて調査した。西端部のごく一部が調査区外になるほかは攪乱との重複も少なく、ほぼ全体を調査できた。3号溝、16～18号土坑と重複し、本古墳はそのいずれよりも古いことが確認できている。

古墳の形は、調査できなかつた部分がわずかなので、その方向に前方部などが延びているとは考えられず、円墳であることは確実である。調査区内では歪みの少ない円形を呈している。

大きさは周堀内径で計測して約17m、周堀外径は22～23mである。周堀の上幅は2.5～3.0mで、深さは周堀外側から計測して1.01～1.27mである。周堀の断面形は基本的に逆台形で、底面は凹凸が少なく平坦になっている。斜面は途中で複数回角度を変え、上に行くにしたがって傾斜が緩くなる。特に墳丘側でその傾向が著しく、墳丘部と周堀との境の地山が削られて、ごく緩い斜面になっている部分が多い。周堀の埋土はやや不自然ではあるが人為的埋没とは断定できない。下層の土にロームブロックが多いのは、墳丘盛土が崩れて流れ込んだためであろう。上層には他の古墳と同様、B軽石を多く含む層が堆積している。

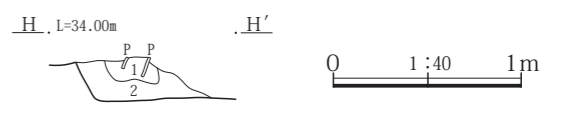
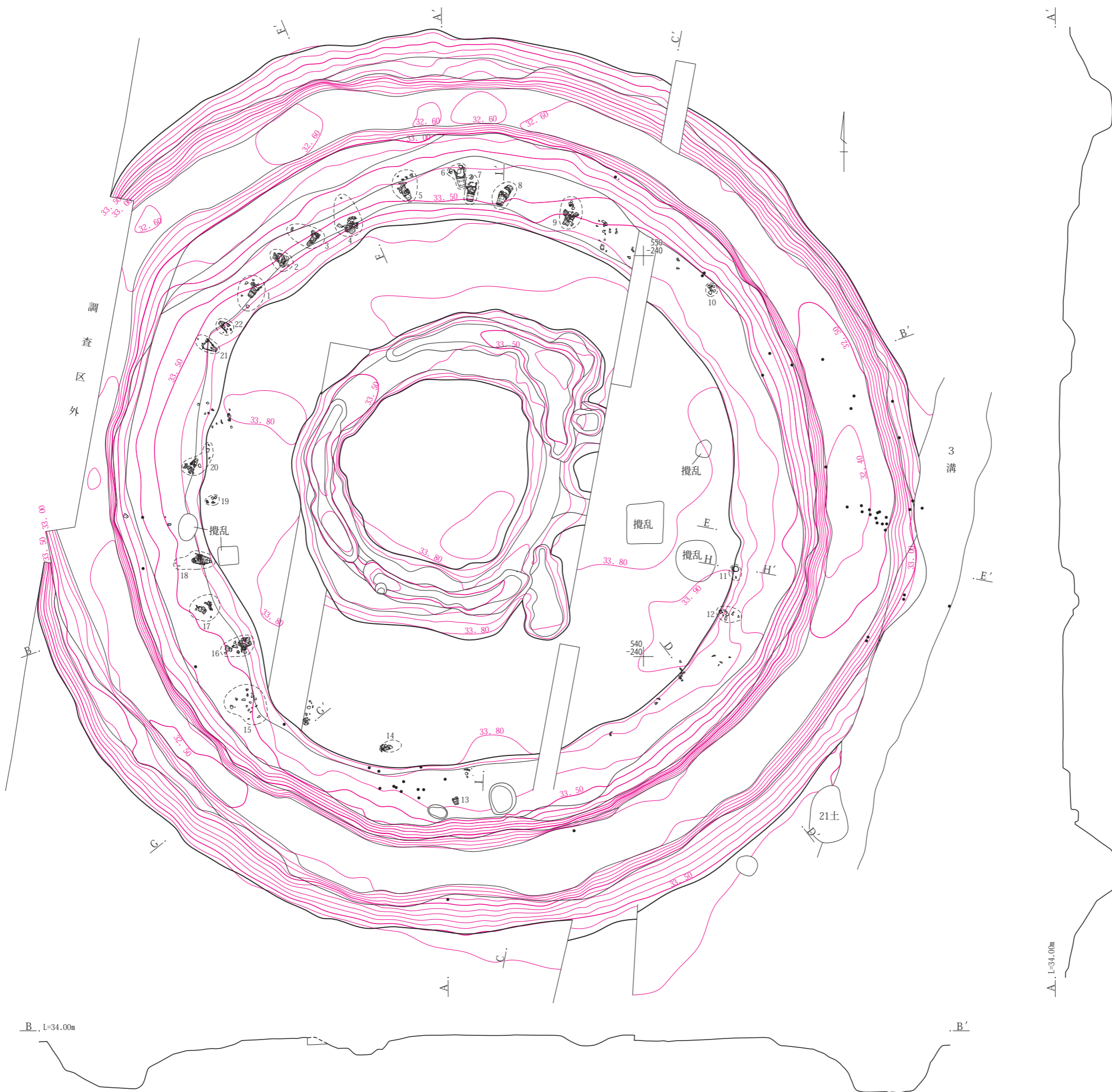
墳丘部には盛土と思われる土層のごく薄く確認できた(第13図、C-C'セクションの26層)。その下層には、途切れ途切れではあるものの、FAが薄く堆積している。盛土の上にはFAの二次堆積が見られる部分もあるが、大部分の場所には直接碎石が載り、さらに上には表土が

載っている。つまり、この古墳は薄い盛土を残すのみで上部は削平され、その上に碎石・表土が載っているのである。この削平は碎石が載せられていることから近現代に行われたと考えられ、病院建設時か養護学校建設時に行われたものであろう。主体部は全く残されていない。

墳丘部の中央には、薄い盛土の下に溝が不整円形に巡っているのが見つかった。その大きさは、溝の外側で計測すると6.65×9.20m、内側で計測すると4.70×5.12mである。溝の上幅は1.02～2.28m、断面も不整形で、底面は凹凸があり、深さは0.26～0.52mである。第13図のI-I'セクションにみるように、この溝は墳丘下の旧地表面に堆積したFAを掘り込んでいる。つまりこの溝はFA降下後、墳丘を構築する前に掘られているのであり、墳丘部の中央という位置関係からも、古墳に伴うものとするのが妥当であろう。その役割は遺構自体の特徴からは明確にすることができない。これについては第4章第2節1(49ページ)で述べる。

出土遺物は多いが、ほとんどは埴輪である。そのうちある程度の大きさに復元できたものの出土位置は、第15図にあげたとおりである。墳丘周縁部に円弧を描くように分布している。しかも、その出土間隔はほぼ等間隔であり、それらを合わせ考えると、これらは円筒埴輪列がほぼその場で倒れたものと思われる。据え付けられた状態のまま出土した埴輪はほとんどないが、そのなかで円筒埴輪11のみは、底部の一部が立ったままの状態出土した。おそらく樹立した状態で、上部のみが削平されてなくなってしまったものであろう。とすれば、これが本来の円筒埴輪列の位置となるが、そこは出土埴輪が描く円弧のほぼ延長線上にあたる。その点からも、出土埴輪のほとんどは、円筒埴輪列がほぼその場で倒れた状態で出土したものと推測することができる。円筒埴輪列の直径は約14.5mである。

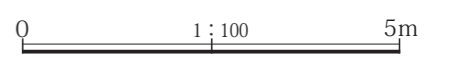
この円筒埴輪列に並んでいた埴輪の数を数えると、埴輪1～9と21・22の範囲で11本となる。この範囲で円周の1/4の長さとなるが、4と5の間と、8と9の間とはやや間隔が広いので、この間にももう1本ずつが立っていた可能性がある。とすれば、円周の1/4の範囲に13本あったことになるので、埴輪列全体では合計で52本があったものと推計できる。直径14.5mとして単純計算すると、 $14.5 \times 3.14 \div 52 \approx 0.88$ となり埴輪は約88cm毎に立



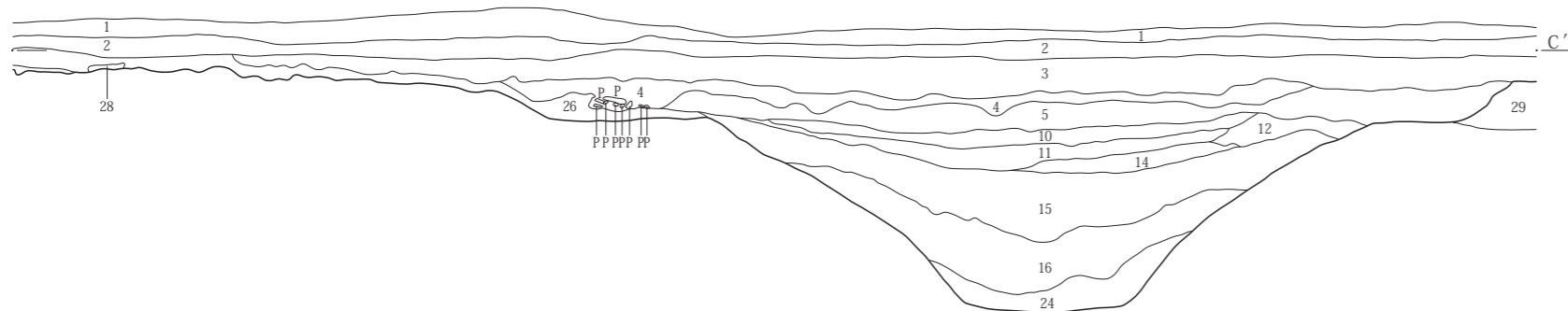
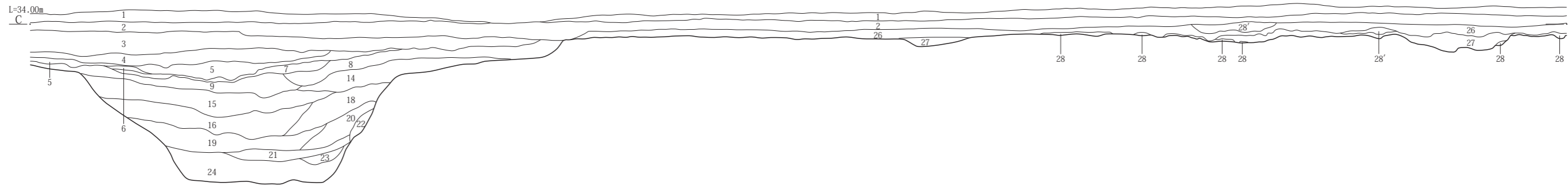
- 13号墳填輪11
1. 褐色土 (7.5YR4/3) ローム粒含む。
 2. 暗褐色土 (7.5YR3/4) ロームブロック含む。しまり良い。

B., L=34.00m

A., L=34.00m



第12図 13号墳平面図、円筒埴輪11据え付け断面図



13号墳 C-C'

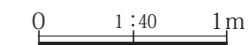
1. 表土
2. 旧表土 FPによる砕石。
3. 褐色土 (7. 5YR4/4) B 軽石混じり。
4. 褐色土 (7. 5YR4/6) B 軽石混じり。
5. 灰褐色土 (7. 5YR4/2) 灰褐色土が鹿の子状に入る。B 軽石混じり。
6. 明褐色土 (7. 5YR5/6) 少量 B 軽石含む。
7. 灰褐色土 (7. 5YR5/2) 灰褐色土が鹿の子状に入る。B 軽石混じり。炭化物含む。
8. 灰褐色土 (7. 5YR4/2) 5層より暗くφ10cmの鹿の子状になる。
9. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒、炭化物含む。褐色土が鹿の子状に入る。B 軽石を含む。
10. 褐灰色土 (7. 5YR4/1) B 軽石層。
11. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒、褐色土が鹿の子状に入る。
12. 明褐色土 (7. 5YR5/6) B 軽石を含まない。
13. 橙色土 (7. 5YR6/8) 褐色土がφ5cmの鹿の子状に入る。
14. 橙色土 (7. 5YR6/6) 13層より暗くφ10cmの鹿の子状になる。
15. 橙色土 (7. 5YR6/6) 褐色土がφ5cmの鹿の子状に入る。

16. 暗褐色土 (7. 5YR3/4) ローム粒混じる。
17. にぶい赤褐色土 (5YR4/4) ローム崩落土。
18. 暗褐色土 (7. 5YR3/4) 16層より暗くφ10cmの鹿の子状になる。
19. にぶい赤褐色土 (5YR4/4) φ10cmの鹿の子状になる。
20. にぶい赤褐色土 (5YR4/3) 19層より明るくφ10cmの鹿の子状になる。
21. 黒褐色土 (7. 5YR3/2) 暗色帯がブロック状に入り、13層より暗い。
22. 暗色帯崩落土
23. 黄褐色土 (10YR5/6) ロームがブロックで崩落している。粘性強い。
24. にぶい赤褐色土 (5YR4/4) ロームがブロック状に入る。粘性強い。
25. 黒褐色土 (7. 5YR3/2) 暗色帯がブロック状に入る。
26. 盛土
27. 暗褐色土 (7. 5YR3/3) FA がブロック状に攪拌されている。
28. FA 層が薄く堆積する。
- 28' FA の二次堆積。
29. ソフトローム 地山。

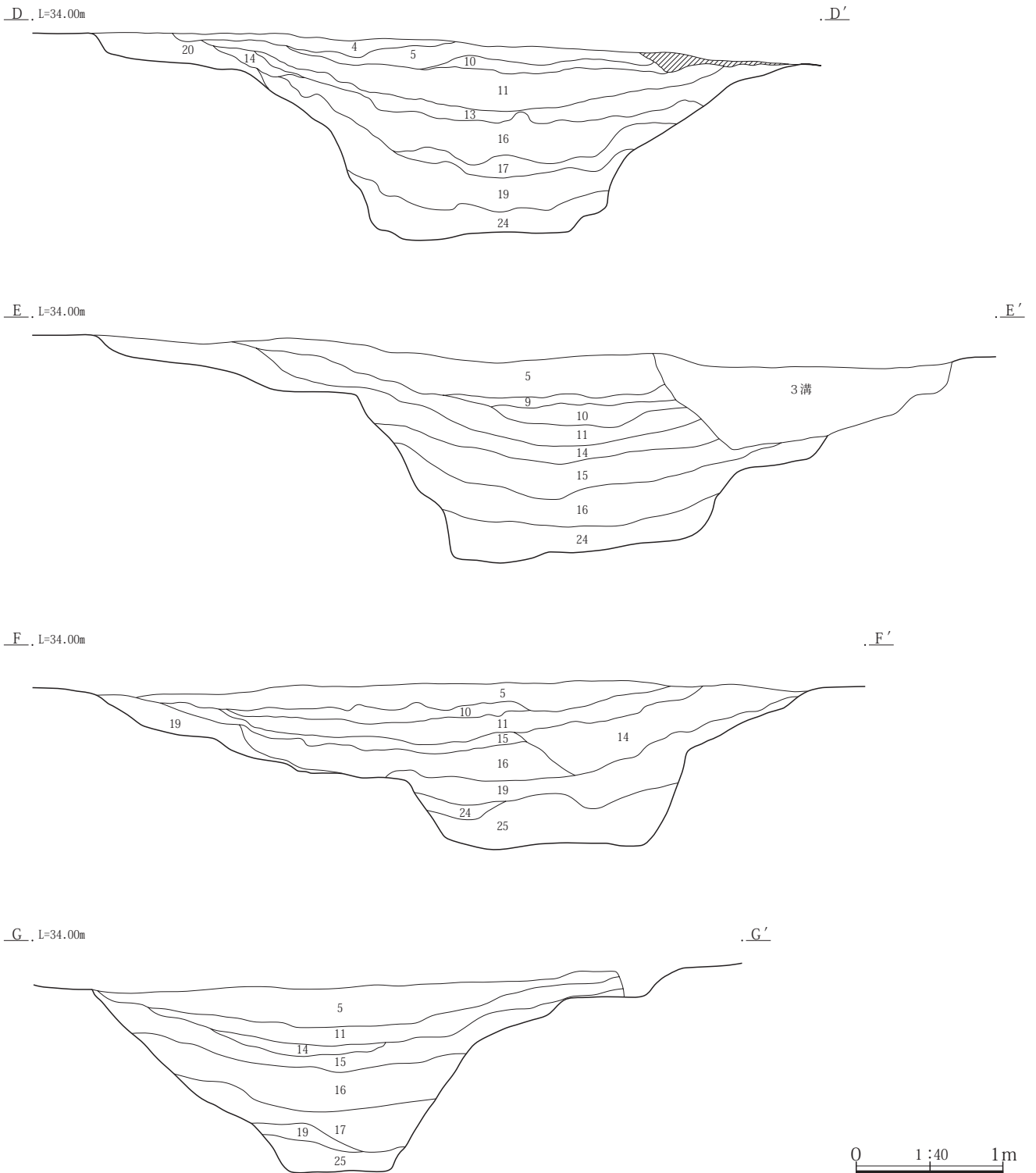


13号墳墳丘下溝 I-I'

1. 明褐色土 (7. 5YR5/8) ロームブロック含む。固くしまっている。
2. 黒褐色土 (7. 5YR3/2) FAブロック、ロームブロック含む。固くしまる。
3. 明褐色土 (7. 5YR5/6) ロームブロック、褐色土含む。固くしまる。
4. 褐色土 (7. 5YR4/3) FA 主体。



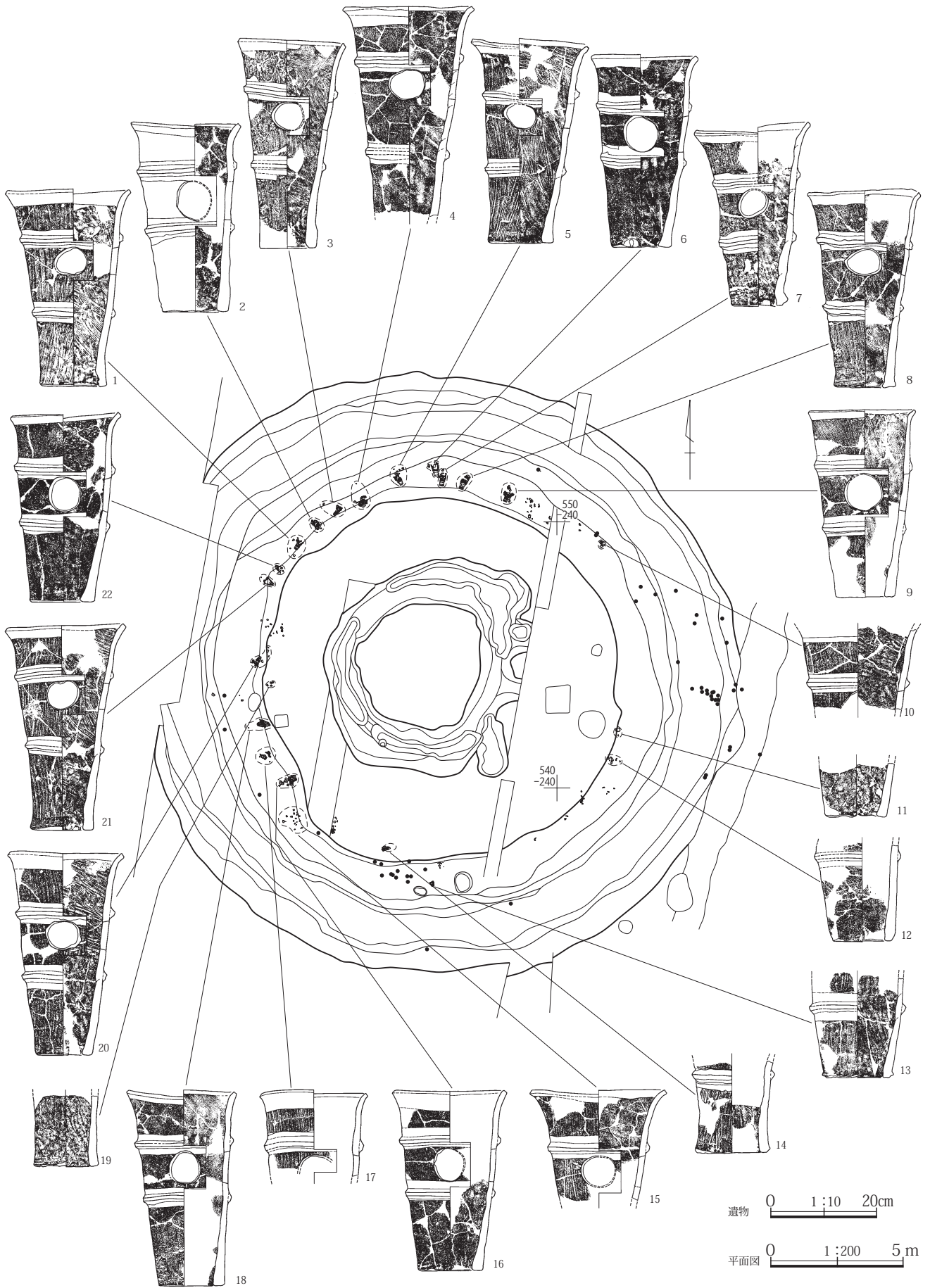
第13図 13号墳断面図 (1)



13号墳D-D'～G-G'（注記はC-C'と共通）

- | | |
|--|--|
| <p>4. 褐色土(7.5YR4/6) B軽石混じり。</p> <p>5. 灰褐色土(7.5YR4/2) 灰褐色土が鹿の子状に入る。B軽石混じり。</p> <p>9. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒、炭化物含む。褐色土が鹿の子状に入る。
B軽石を含む。</p> <p>10. 褐灰色土(7.5YR4/1) B軽石層。</p> <p>11. 黒褐色土(10YR2/2) ローム粒、褐色土が鹿の子状に入る。</p> <p>13. 橙色土(7.5YR6/8) 褐色土がφ5cmの鹿の子状に入る。</p> <p>14. 橙色土(7.5YR6/6) 13層より暗くφ10cmの鹿の子状になる。</p> | <p>15. 橙色土(7.5YR6/6) 褐色土がφ5cmの鹿の子状に入る。</p> <p>16. 暗褐色土(7.5YR3/4) ローム粒混じる。</p> <p>17. にぶい赤褐色土(5YR4/4) ローム崩落土。</p> <p>19. にぶい赤褐色土(5YR4/4) φ10cmの鹿の子状になる。</p> <p>20. にぶい赤褐色土(5YR4/3) 19層より明るくφ10cmの鹿の子状になる。</p> <p>24. にぶい赤褐色土(5YR4/4) ロームがブロック状に入る。粘性強い。</p> <p>25. 黒褐色土(7.5YR3/2) 暗色帯がブロック状に入る。</p> |
|--|--|

第14図 13号墳断面図(2)



第15図 13号墳出土遺物分布図

てられていたことになる。埴輪の口径は20cm程度なので、かなりゆったりとした配置である。

出土したのは円筒埴輪がほとんどで、ある程度の大きさに復元できたものは25本ある。朝顔形埴輪は破片を1点掲載したほか、小破片が2点あるに過ぎない。もちろん、円筒埴輪として掲載したもののうち、胴部から底部にかけての破片のものは朝顔形である可能性を残すが、明らかな朝顔形埴輪の少なさを見れば、その数はきわめて少なかったものと思われる。その他形象埴輪は家形と思われるもの2点、人物と思われるもの1点を掲載した。

前述の通り、ある程度の大きさに復元できた円筒埴輪は25個体分で、そのうち口縁から底部までを残すものは13点である。それらの規格はすべて2条3段構成であり、これから外れる破片は見られないので、本古墳の円筒埴輪はすべて同様の構成であると思われる。

まず法量からみると、器高は13点で計測・推定できたが、33.5～39.1cmであり、ややバラツキが大きい。平均は36.4cmである。口径は、26以下の小破片のものを除くと17点で計測・推定でき、18.8～24.6cmとこれもバラツキが大きい。ただし、22cmを越えるものは3点しかなく、これを除けば18.8～21.5cmに収まる。1・4・15のように口縁が大きくひらく形状は少数である。底径は20点で計測・推定でき、9.3～12.7cmだが、これも12cm以上のものは2点しかなく、これを除けば9.3～11.8cmに収まる。口径・底径からみると、全体に細身のものが多いのがこの古墳の円筒埴輪の特徴である。また、3、6、8、18、21など、基底部の伸長化の傾向が見られるものがあることにも注意が必要である。

成形は粘土板を巻いて基部を作り、その上を紐造りする。その基部の高さは6～14cmで、平均10.4cmである。粘土板の接合部分が確認できたものは13点であり、接合部を正面から見て、右が上になるものが8点、左が上になるものが5点である。右を上とするものが多いが、資料数が少ないことを考えれば有意な差とは言い難い。

外面調整は縦ハケが大部分で、その他ヘラナデと思われるものが9点あった。その後口縁部に横ナデを施している。ハケ目の密度は1cmあたり2本という非常に粗いものから、14本という細かいものまでであるが、細かいものは少ない。

内部調整はやや多様である。ヘラや指で縦か斜めにナ

デたあと、上部に斜めか横のハケ目が施されるものが多いが、ハケ目の残る範囲は口縁部上半だけのものから胴部にまで及ぶものまで様々なものがみられる。外面がヘラナデのものは、基本的に内面もナデであり、ハケ目が残るものは少ない。

突帯は台形かM字がほとんどで、明らかな三角のものはごく少ない。貼り付け後上下を横ナデする。

透孔はすべて2段目にあり、円周の対称的な位置に2ヶ所開けられている。第2突帯のすぐ近くに小さめの孔が開けられる場合と、第1、第2突帯の間に大きめの孔が開けられている場合とがある。形はやや歪んで心葉形のようなものや縦長のものもあるが、いずれも円形といえる範疇である。1の個体では、円の頂点から右回りに穴の切開が行われていることが観察できる。

ヘラ記号は8点で見られ、そのうち1点(21)が「≡」、4点(3、5、23、33)が「=」、3点(10、20、31)が「—」で、胴部の外面に刻まれている。ただし同じヘラ記号ごとに埴輪の諸特徴が一致するというような、際だった傾向は認められなかった。

底部調整はナデのものもある(19)が、ほとんどが無調整で、そのため粘土板の重なりが観察できるものが多い。植物の茎や棒状のものの圧痕が残るものもある。

朝顔形埴輪は破片しかない。34はそのうち朝顔部の破片で突帯が見られる。

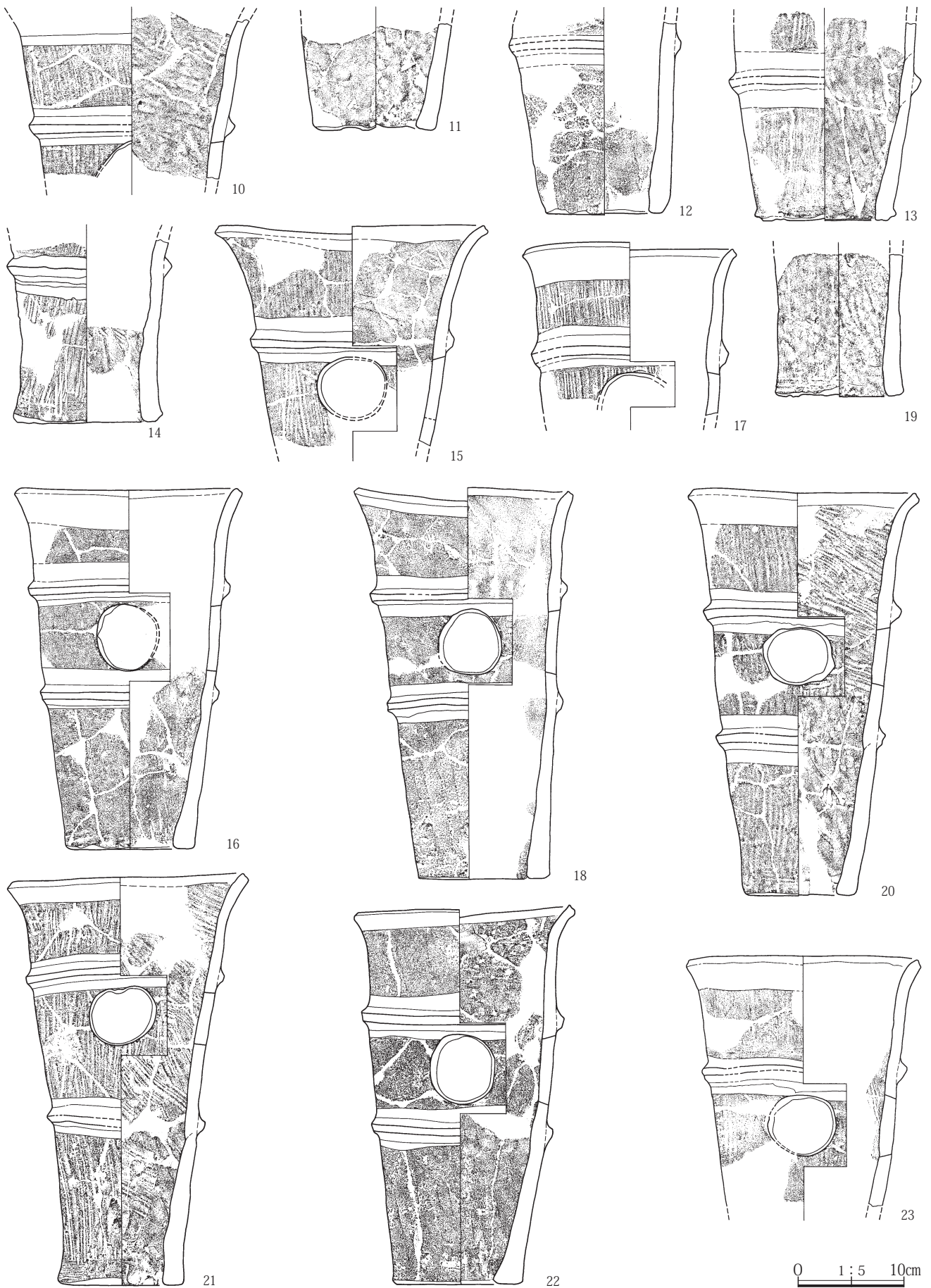
形象埴輪は3点掲載した。35と36は家形埴輪と思われる。小破片なので詳細は不明だが、壁の一部と考えられる。これは12号墳で先述したように、12号墳、遺構外から出土した家形埴輪と同一個体である可能性が高い。37は人物埴輪で、女子の髻の一部とみられる破片である。

その他に埴輪の小破片が2,910点出土し、そのうち円筒埴輪は1,071点である。もちろん円筒埴輪と判断したものの中に朝顔形埴輪が混じっている可能性は残る。土器の小破片は、土師器杯・椀類が13点、甕・壺類が2点、須恵器杯・椀類2点、甕・壺類1点出土している。その他の遺物として瓦塔片1点が出土したが、古墳とは時代が明らかに異なるので遺構外遺物として扱い、42ページで取り上げた。

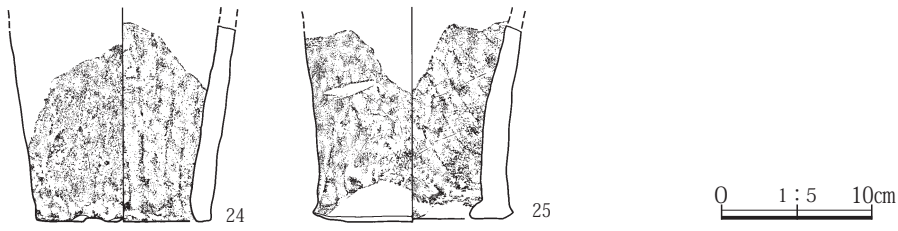
小結 周堀内径約17m、周堀外径22～23mの円墳で、ほぼ全体が調査できた。墳丘盛土の下にFAが見られたことから、FA降下後、6世紀前半に築造された古墳である。



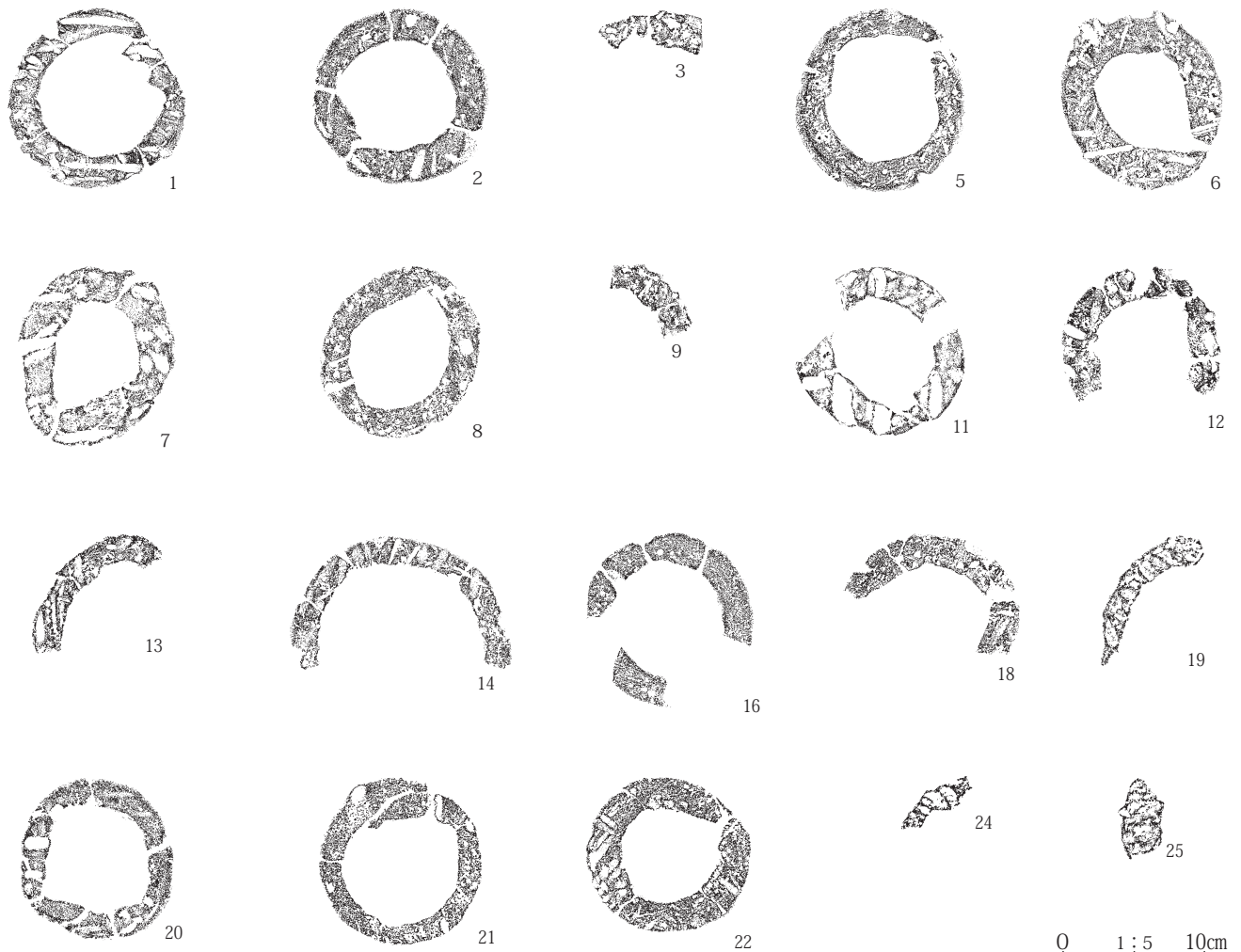
第16図 13号墳出土埴輪(1)



第17图 13号墳出土埴輪(2)



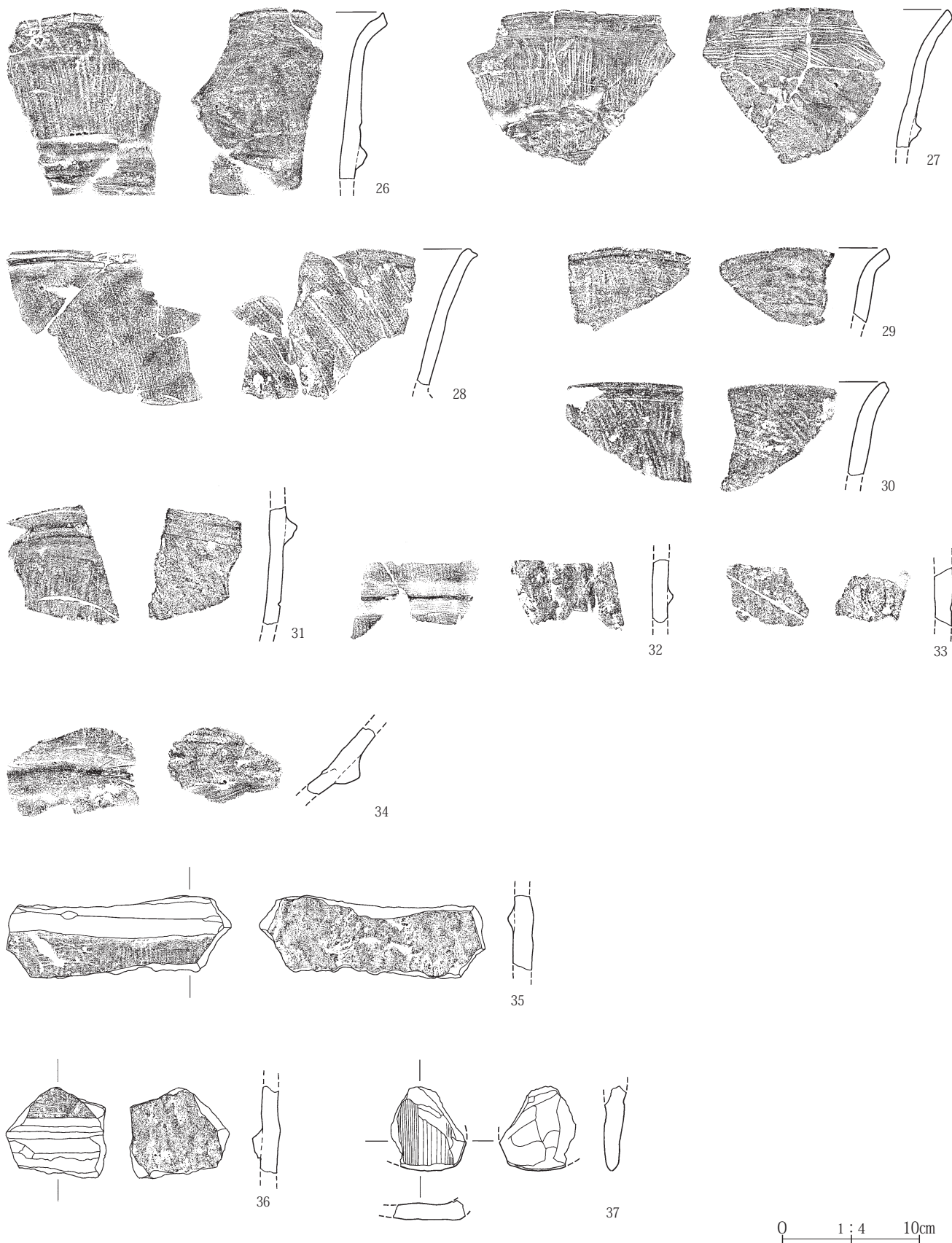
第18図 13号墳出土埴輪(3)



第19図 13号墳出土埴輪・底面



第20図 13号墳出土埴輪・へら記号



第21図 13号墳出土埴輪(4)

第3章 調査の成果

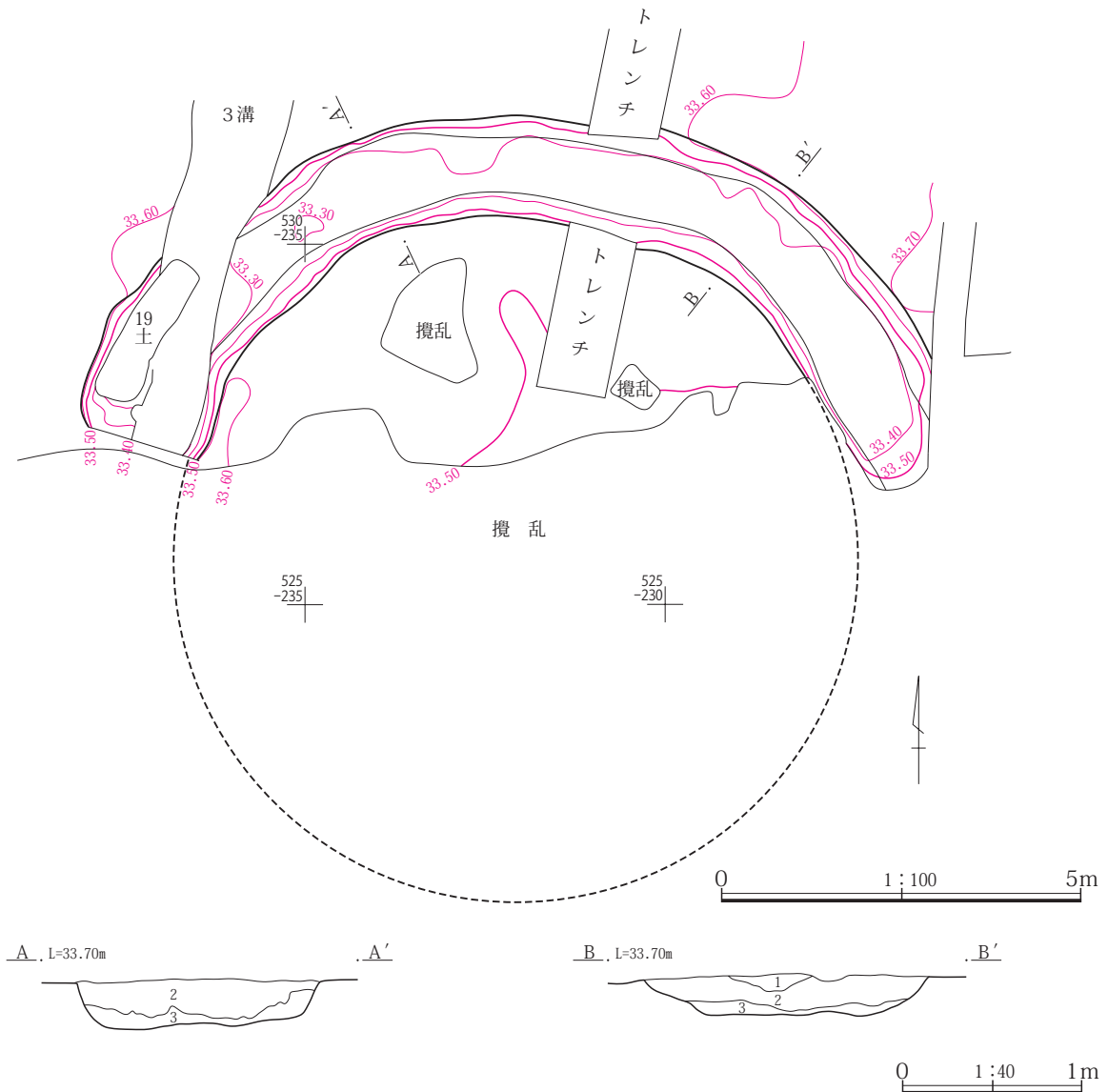
墳丘部の中央の盛土下に、不整形形の溝が巡っているのが注目される。墳丘部の周縁には円筒埴輪列が巡っていたことが確認され、多くの円筒埴輪が出土した。これらの円筒埴輪はFA降下後に時期を限定できるので、埴輪の編年研究の資料としても重要である。

4 14号墳(第22図、PL. 8-1~3)

5-1区中央南寄りにある。調査当初は円弧を描く溝

と考え、4号溝と名付けた。しかし、調査を進めていくにつれ、その形状から古墳である可能性が高いと判断されたため、14号墳と名称を変更することとし、4号溝は欠番とした。西側に3号溝、19号土坑が重複し、本古墳が古いことは断面で確認した。

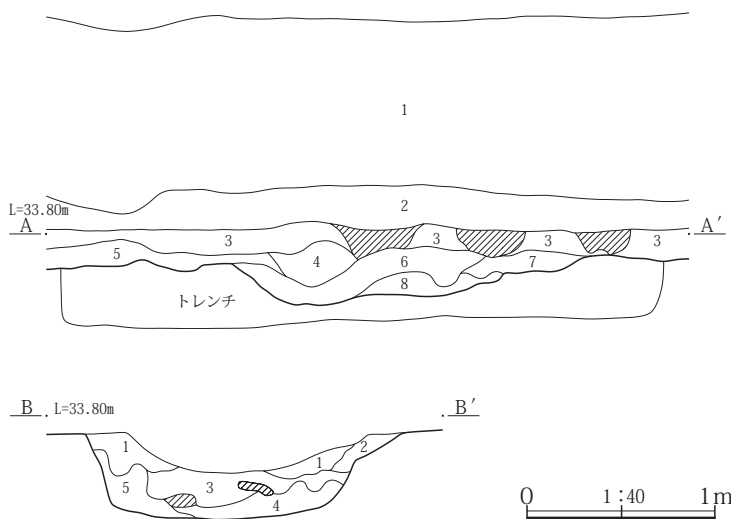
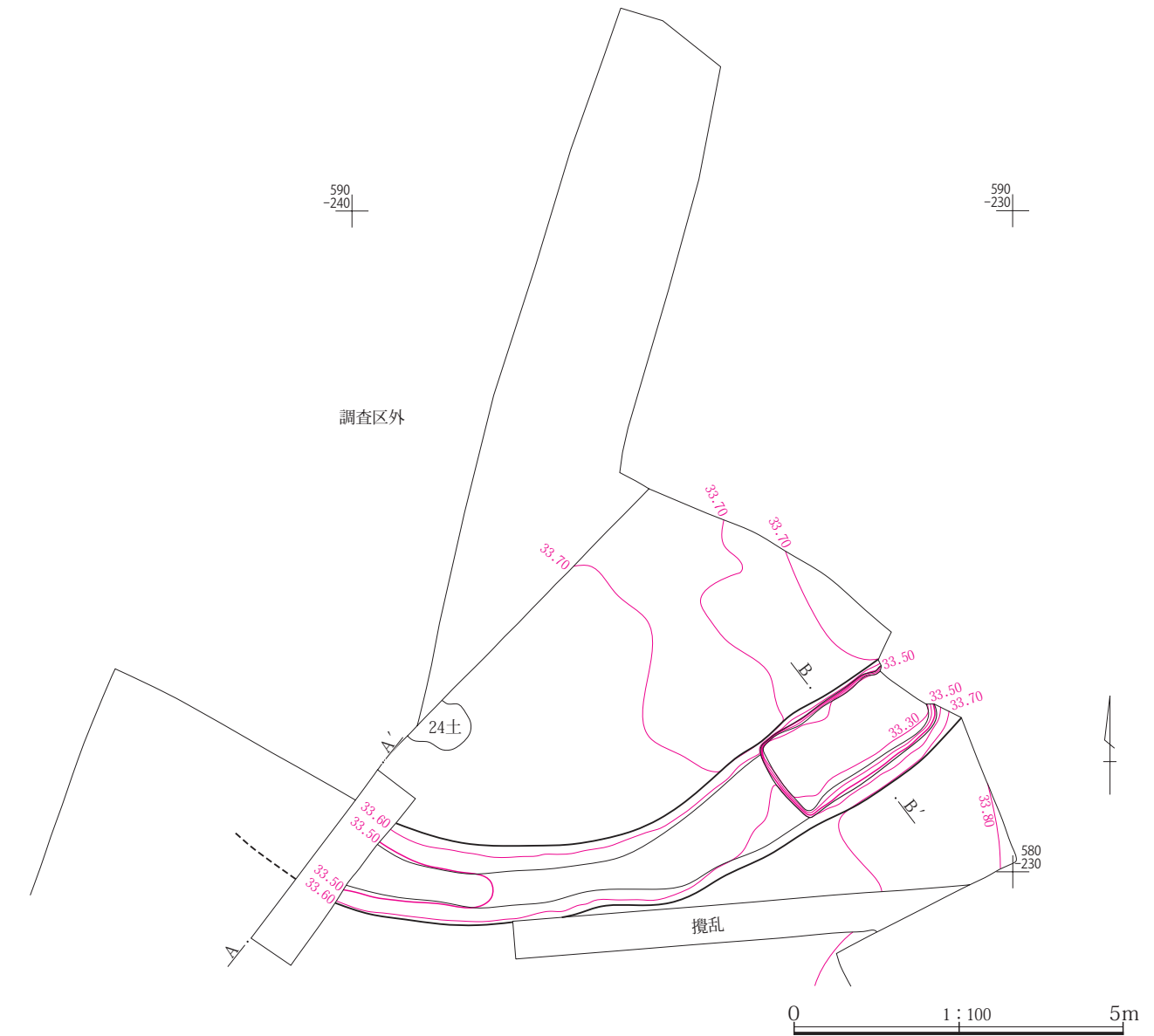
5-1区南部には攪乱が数多く見られ、本古墳も南側の半分以上が破壊されている。全体の形状は第22図の通りであり、北半分の周堀が残されている状態であった。



14号墳

1. 黒褐色土(10YR3/2) B 軽石少量含む。しまり強い。
2. 暗褐色土(10YR3/3) φ10cmの褐色土ブロック30%含む。粘性、しまり強い。
3. 褐色土(10YR4/4) φ5cmのロームブロック10%含む。粘性、しまり弱い。

第22図 14号墳平断面図



- 15号墳A-A'
1. 表土
 2. 暗褐色土(7.5YR3/4) B軽石混じり。旧表土。
 3. 褐色土(7.5YR4/4) ロームブロック含む。
 4. 明褐色土(7.5YR5/8) ローム漸移層にロームがブロック状に入る。
 5. 明褐色土(7.5YR5/6)
 6. 橙色土(7.5YR7/6) ロームがブロック状に入る。固くしまっている。以下15号墳周堀。
 7. 明黄褐色土(10YR6/8) ロームと黒色土の混土。
 8. 明黄褐色土(10YR7/8) ロームが細かく入る。
- 15号墳B-B'
1. 灰褐色土(5YR6/2) FAブロックが入る。
 2. にぶい橙色土(7.5YR7/4) FA粒、ローム粒の混土。
 3. 黒褐色土(7.5YR3/2) ローム粒、軽石含む。
 4. 橙色土(7.5YR6/8) ローム崩落土。
 5. 明褐色土(7.5YR5/8) 褐色土とロームブロックの混合。

第23図 15号墳平断面図

周堀内径は第22図に復元したとおりだとすると9.5mである。周堀の幅は1.33～1.90mであり南側で幅がやや広がっているが、周堀外径は12.3～13.2mと推定される。堀は深さ0.19～0.27mとごく浅く、断面形状は底面の広い逆台形である。最上部にB軽石が含まれているが、FAは確認できなかった。小規模な古墳であり、調査区全域が削平を受けているが、周堀は築造段階から浅かったと思われる。墳丘盛土は全く残っていない。主体部の痕跡も見られなかった。遺物の出土はない。

小結 周堀の半分以下の部分しか残っていないが、周堀内径9.5mの円墳であると思われる。遺物が出土していないので、築造時期は特定できない。

5 15号墳(第23図、PL. 8-4・5)

5-1区北端にある。古墳として調査したが、周堀としてはごくわずかな部分である。表面を削平されているため周堀底部しか残っておらず、確認面からはごく浅い。5-2区では不明瞭になっていた。方向がやや歪んでいるので、古墳ではない可能性も考慮する必要があるが、遺物が出土していないので、その点について確定することはできない。

確認できた部分では周堀は正円を描かず、楕円形に近い形に歪んでいるので、直径などを復元するのは困難であるが、周堀内径14～15m、周堀外径18mの円墳であると推定される。とすれば、12号墳よりもやや小ぶりの大きさとなる。墳丘は完全に削平され盛土は全く残っておらず、主体部の痕跡なども残されていなかった。

周堀の上幅規模は、残されている部分では1.00～1.65mである。東端部は長さ2.60m、幅1.35mの長方形の土坑状に深くなっている。深さは、土坑状の部分で0.44m、それ以外の部分では0.13～0.19mと浅い。断面形状は土坑状の部分で逆台形、それ以外の部分では浅くやや不整な逆台形である。埋土にはFAのブロック、粒子が含まれている。

遺物は全く出土しなかった。

小結 不整な形状なのでやや疑問は残るが、周堀内径14～15m、周堀外径18mの円墳であると考えられる。周堀埋土にFAを含むので、古墳の構築時期はFA降下前に溯ると思われる。

第3節 溝

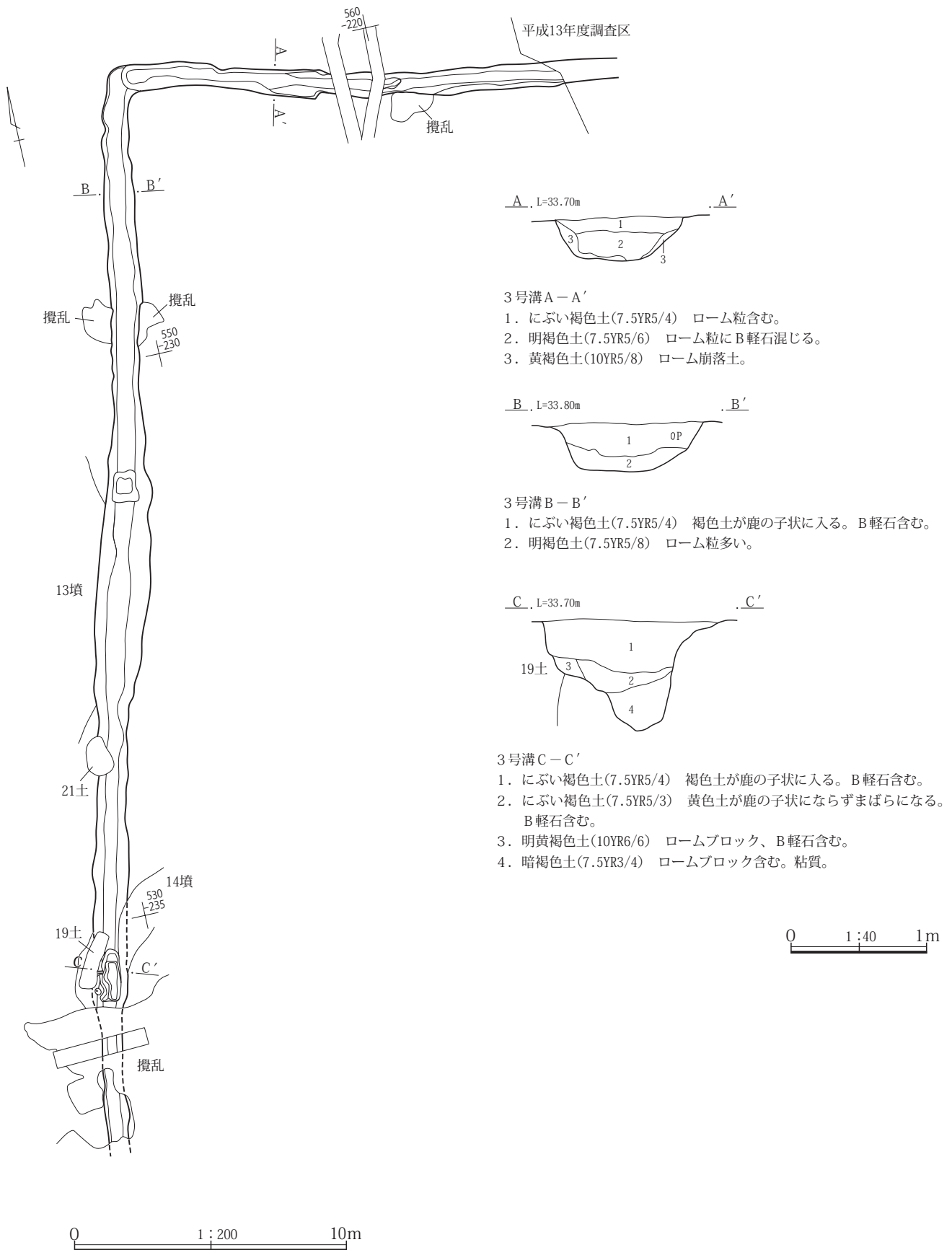
今回の調査では、溝は3、5、6号の3条を調査した。そのうち3号溝は平成13年度の調査の延長部分である。また、4号溝は調査の過程で古墳である可能性が強くなったため、14号墳と名称を変更したものである。「4号」溝はその後混乱を避けるため欠番とした。

1 3号溝(第24・25図、第8表、PL. 9-1～3, 17)

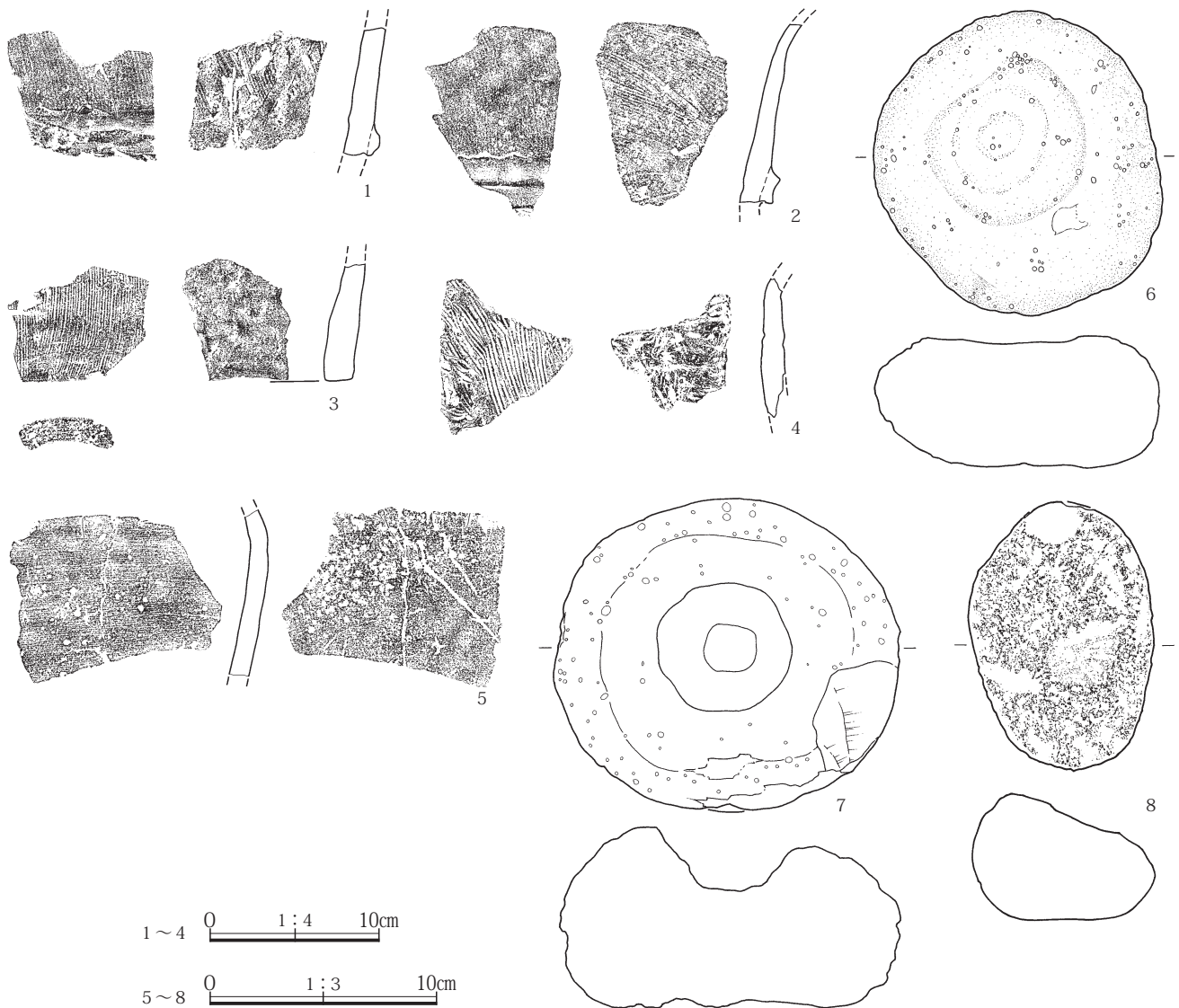
5-1区の東半部にあり、L字形に曲がる溝である。13号墳、14号墳、19号土坑、21号土坑と重複し、そのいずれよりも新しい。

東端部は調査区外となるが、そこは前回(平成13年度)調査した部分である。前回の調査では、N-80°-Wの方向で直線的にのび、東半部で9号墳と重複するところまで確認したが、そのさらに東側は養護学校の校舎建設によって破壊されていた。古墳との新旧関係は、9号墳よりも本溝が新しい。この9号墳に重複する部分では南に向かって曲線的に曲がっていたが、曲線的なのはこの部分のみで、その他の部分では今回の調査区も含めて、ほぼ直線的に延びている。南端部は攪乱によって破壊されるが、本来はさらに南へとのびていたものと思われる。以上のように、本溝の両端は攪乱によって途切れており、全体の形状は不明である。

L字形の北側の、東西に走向する部分は、今回は長さ17.0mを調査した。前回調査した分を含めれば、その長さは45.3mになる。南北に走向する部分は、39.5mを調査できた。東西部分の走行方向は東半部でN-82°-W、西半部はやや北に向きを変え、N-74°-Wとなり、幅は0.62～1.05mで、深さは0.17～0.50mである。南北部分の走行方向はN-11°～15°-Eでわずかに蛇行し、幅は南端部の攪乱に削平されている部分を除いて0.84～1.94m、深さは0.07～0.56mである。南端近くの土坑状に掘り込まれている部分では深さが0.90mもあるが、これほど深いのは例外的であり、あるいは別の遺構の重複であるかもしれない。底面の標高は、L字形の屈曲部の部分が最も高く33.47m。東端は33.08mに下がって比高は0.39m、南端も33.23mに下がって比高は0.24mである。ただし、底面には凹凸があり、水が流れること



第24図 3号溝平断面図



第25図 3号溝出土遺物

があったとしても、この比高の通りに流れるとは思えない。溝の断面は逆台形の部分が多いが、やや不整形のところもある。流水の痕跡は土層断面でも見られなかった。埋土にはB軽石を含んでいる。

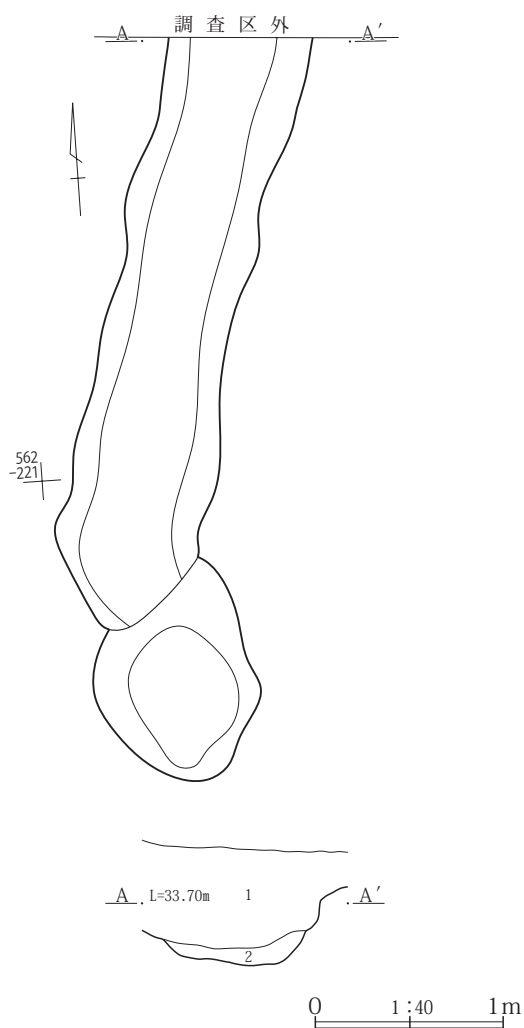
出土遺物は少ない。掲載したのは円筒埴輪4点、土師器甕1点、用途がよく分からない石製品3点であり、その他、小破片として、埴輪56点(うち円筒埴輪22点)、土師器甕2点、時期不明土器1点が出土している。

小結 明確な共伴遺物はないが、埋土にB軽石を含むことから中世以降の溝であると思われる。前回の調査では東西部分の東側で曲線的に曲がっているが、その他の部分は直線的でL字形に曲がっており、また、埋土に水が流れた形跡もないので、何らかの区画溝と考えるのが自然であろう。

2 5号溝(第26図、PL. 9-4)

5-1区の北東隅にある。北側が調査区外となり、調査区内に掛かるのはわずかな部分である。他の遺構との重複はない。

調査した長さは4.0mであるが、南端部は土坑状であり、別の遺構である可能性もある。それ以外の大部分はほぼ直線的で、走行方向はN-18°-Eである。幅は0.64~0.76m、深さは南端の土坑状の部分が0.37mであり、その他の部分は0.07~0.17mと浅い。底面の標高は、北端で33.37m、溝状部分の南端で33.35m、土坑状部分で33.18mである。埋土はソフトロームの崩落土であり、その上にB軽石を含む層が覆っている。出土遺物はなく、時期・性格とも不明である。



5号溝

1. 褐灰色土(7.5YR6/1) B軽石多く含む。砂質。この上に碎石が載る。
2. 橙色土(7.5YR6/6) ロームブロック含む。ソフトロームの崩落土。

第26図 5号溝平面断面図

3 6号溝(第27・28図、第8表、PL. 9-5, 10-1~4, 17)

5-1・2区の南端にある大規模な東西溝である。

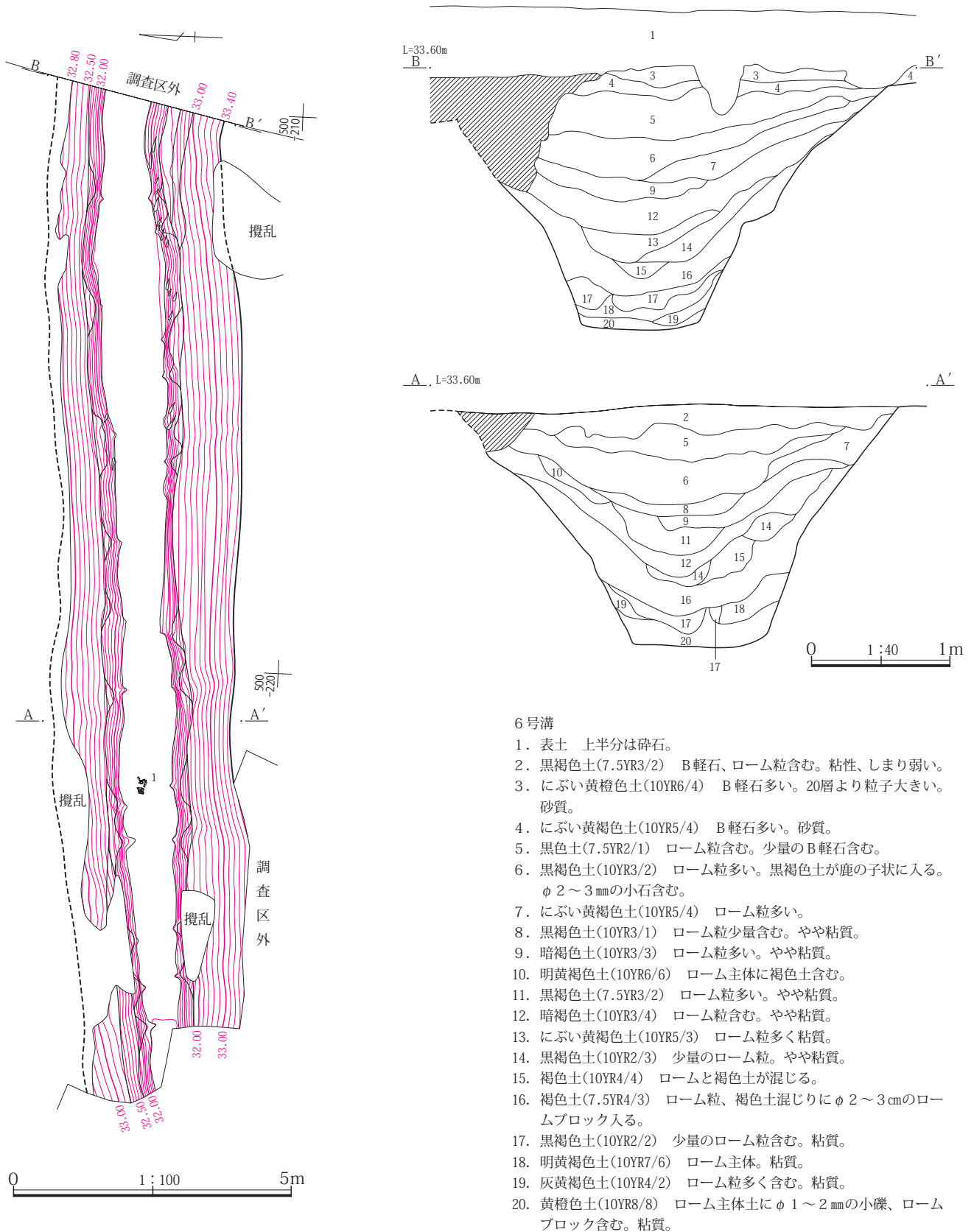
この部分は調査区が狭く、調査できたのは長さわずか18.4m分だけである。調査区内ではほぼ直線的にのび、両端は調査区外へ続いている。確認面における上幅は、北側の全体に浅い攪乱が入っているため不確定ではあるが、3.0~3.4m程度と推定され、深さは東端の断面(B-B')で計測して1.90mである。底面は幅0.50~1.27cmの平坦面をなし、標高は31.68~31.78mでほとんど傾斜がない。走行方向はN-85°-Eである。

溝の断面は逆台形で、壁面は底面から0.6~0.8mの高さで屈曲し、そこから上は傾斜がやや緩やかになる。埋土の最上層付近にはB軽石を含む層が堆積しているが、FAを確認することはできなかった。土層を見ると、

16層と15層の間が不自然な堆積なので、この部分は掘り直しが行われたものと思われる。同様に、12層と11層の間でも掘り直しがあったかも知れない。これらの掘り直しの前・後を含め、埋土にはやや粘質な部分は見られるが、明瞭な砂層、粘土層などはないので、流水があったという確実な証拠は掴めなかった。

溝の壁面には、屈曲部より下部に縦方向の突出部が残されている。この突出部は0.6~2.0m程度の間隔をあけてみられるもので、小さな三角形の稜をなして非常に明瞭である。第27図の平面図に見られるように、溝の底面はこれによって、さまざまな間隔をあけてくびれたようになっている。この突出部の成因を確定することは難しいが、南北の壁の相対する位置にある場合が多いことから、この溝の掘削に関わるものではないかと思われる。つまり、溝の底部近くを掘削した時には、長方形に近い形の穴を東西に連続して掘り、それをつなげて溝とするという工法をとったと考えられ、その際、穴と穴とを接合させた部分の壁面を整形しなかったため、その接合部が三角形の突出部として残ったのだと考えられるのである。突出部の間隔は前述のように0.6~2.0m程度なので、それぞれの穴の長さもその程度と思われるが、不明瞭になった突出部もあったと思われるので、穴の長さは2.0mよりも狭かったものと考えられる。おそらく、底部の掘削が多数によって一気に実施されたため、このような痕跡が残されたものと思われるが、逆にこのような痕跡が残されているということは、勢いのある流水はなかったことの証拠になるであろう。流水があればこのような突出部は削られてしまっただろうからである。

遺物は土師器甕1点以外には出土しなかった。1は4世紀前半頃のS字状口縁台付甕である。底面から0.64m浮いた高さから出土しているので、この溝に伴うものかやや疑問があるが、この時期の遺物は前回の調査を含めても遺跡内からほとんど出土しないし、また、他に出土遺物が全くないことから見ても、この遺物が溝の時期を示すものである可能性は高い。前述のようにこの溝は2回程度の掘り直しがあつたらしい。1は出土した高さから見ると1回目の掘り直し後の溝の底部近く(12層か)から出土したようである。とすれば、溝の掘削はそれを溯る時期である可能性があるが、この年代は遺物1点のみからの推定なので、確実性が低いことは認めなければな



第27図 6号溝平断面図

らない。さらに、溝の埋土中にFAの堆積が見られないのは、FA降下後にも掘り直しが行われたためと考える余地がある。以上の推定が正しいとすれば、この溝の存続期間は古墳時代前期から6世紀前半にまでの長期間に及ぶことになる。なお、がんセンター南側は住宅団地建設によって地表面が平坦に造成されており、地表面から溝の延長部分を観察することはできない。

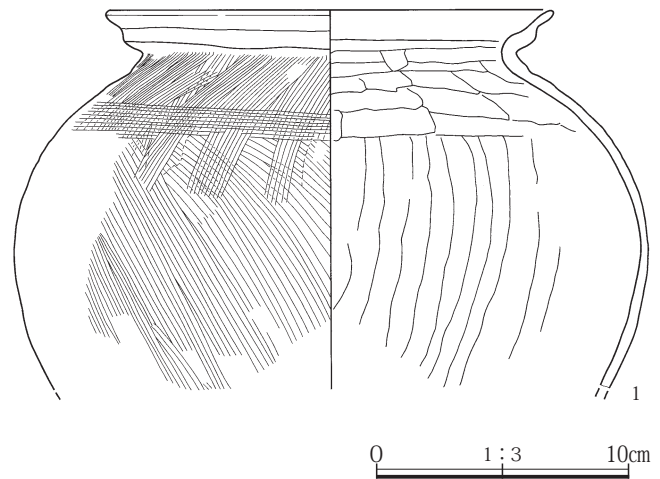
溝の性格については、溝の存続期間が確定できないこともあって、確実なことは決めがたいが、流水があった証拠は得られなかったので、現状では何らかの区画溝ではないかと考えるのが妥当であろう。古墳時代前期に溯る遺構はこれまで全く見られなかったもので、このような直線的な区画溝の存在は、本遺跡の性格を考える上で重要であるが、今回はわずかな範囲の調査なので、どの範囲を区画しようとしているのかは不明である。以上のように、この溝については多くの問題がある。今後周辺地域でこの溝の延長部が調査された場合にさらに検証が必要であろう。

第4節 土坑・集石

今回の調査では土坑は12基調査した。それらは16～28号土坑と名付けたが、そのうち26号土坑は調査の過程で風倒木であることが確認されたので欠番とした。

集石は1基が発見されている。

土坑は調査区のほぼ全域に分布する。それぞれの位置、形状、大きさなどは第4表にまとめたとおりである。形態には各種のものがあり、傾向を示すことは困難であ



第28図 6号溝出土遺物

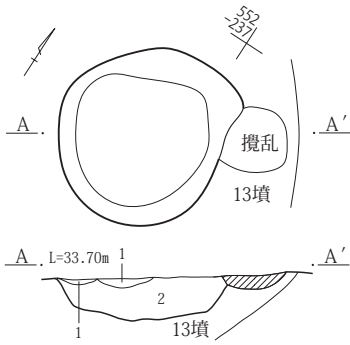
る。詳細な時期を知ることはできないが、16～18号土坑は13号墳と、19号土坑は14号墳と重複し、いずれも古墳よりも新しい。そのうち13号墳よりも新しい16～18号土坑は、埋土にB軽石を含むので中世以降のものと思われる。18号土坑からは五輪塔の空風輪が出土している。埋土にB軽石を含む土坑には、ほかに23～25、27、28号土坑があり、これらも中世以降のものである。このようにB軽石を含むことから中世以降と思われる土坑が8基あり、そのうちの1基からは実際に中世以降の遺物(五輪塔)が出土している。19号土坑は14号墳よりも新しいので、少なくとも古墳時代以降のものである。その他の3基は時期を推定することは難しい。いずれも出土遺物がなく、21号土坑は3号溝と重複するが新旧関係を把握することはできなかったし、20、22号土坑の2基は他の遺構との重複もないからである。

土坑の性格も出土遺物がほとんどないので、特定は困難である。18号土坑は五輪塔が出土したので、墓坑であ

第4表 土坑・集石一覧表

番号	所在グリッド	形状	主軸方位	大きさ(m)		備考 ()内は小破片のため未掲載の遺物数
				長さ×幅×高さ		
16	550-235	不整円形	—	1.02×0.90×0.25		13墳より新。
17	530-240	不整円形	—	[1.02]×1.30×0.41		13墳より新。
18	540-230	長方形	N-59°-E	2.37×1.03×0.43		13墳・3溝より新。五輪塔・空風輪。(円筒埴輪5、板碑片1)
19	525-235	長方形	N-33°-E	2.20×0.62×1.18		3溝より古、14墳より新。
20	555-235	長方形	N-74°-E	2.28×0.90×0.40		
21	535-230	不整形	N-12°-E	1.45×0.98×0.41		3溝と重複、新旧不明。
22	570-230	長方形	N-81°-W	1.23×0.92×0.33		
23	575-230	楕円形	N-37°-W	0.80×0.62×0.26		
24	580-235	不整形	N-77°-W	[0.89]×0.72×0.25		
25	575-240	長方形	N-88°-E	2.18×0.58×0.23		
27	510-235	不整形	N-37°-W	2.72×1.28×0.18		(円筒埴輪1)
28	530-230	楕円形	N-13°-E	0.75×0.67×0.13		(円筒埴輪1) 調査時10号ピット。
1集	555-240	不整形	N-10°-E	0.69×0.46×0.14		(円筒埴輪7)

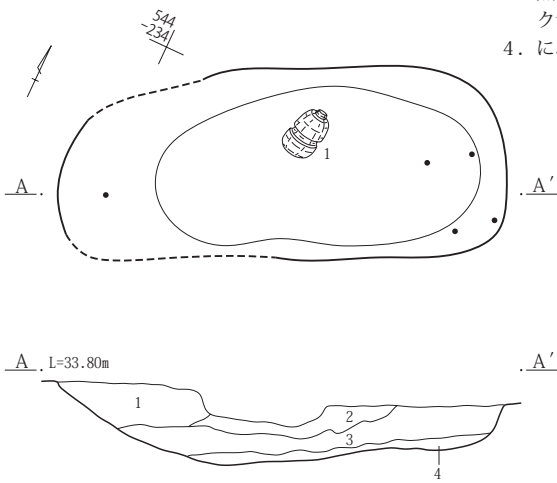
16号土坑



16号土坑

1. 明黄褐色土(10YR7/6) ローム粒含む。
2. にぶい黄褐色土(10YR5/4) 小礫含む。しまり悪くざらつく。

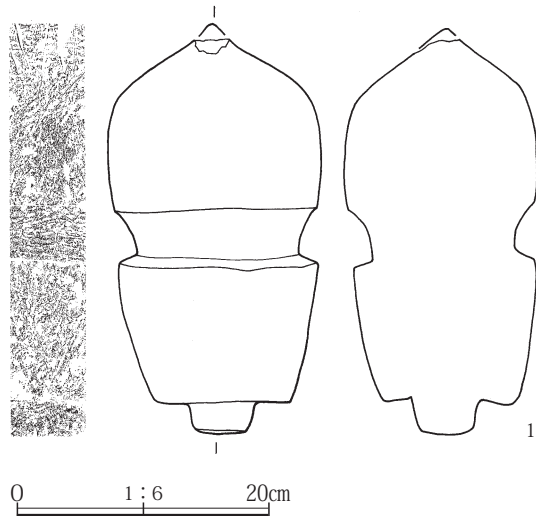
18号土坑



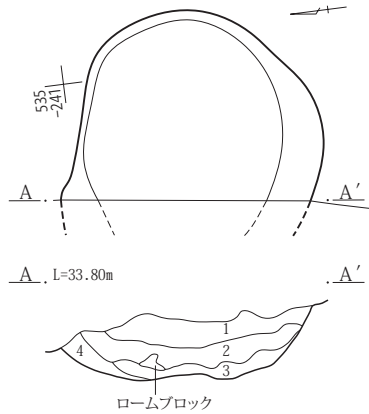
18号土坑

1. 褐色土(7.5YR4/3) 2層より黄色強い、しまり悪い。
2. 暗褐色土(7.5YR3/3) 黄色土が鹿の子状に入る。B軽石混入。ざらつく。
3. 明褐色土(7.5YR5/6) ロームがブロック状に入る。
4. 黒褐色土(7.5YR2/2) 若干のローム粒含む。

18号土坑出土遺物



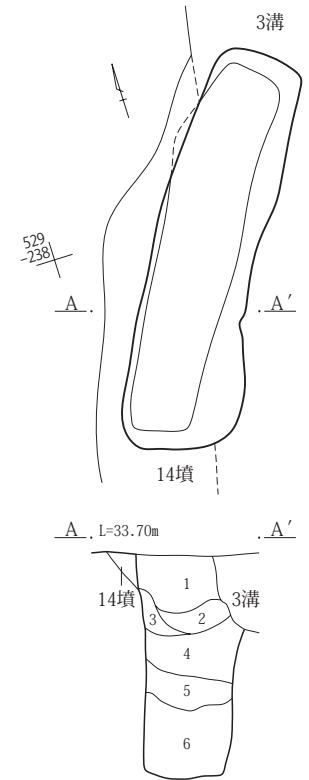
17号土坑



17号土坑

1. 黒褐色土(10YR3/1) 少量のB軽石含む。
2. 灰褐色土(7.5YR4/2) B軽石含む。
3. 黒褐色土(10YR2/2) 炭化物、ロームブロック含む。
4. にぶい褐色土(7.5YR5/4) 橙色土を含む。

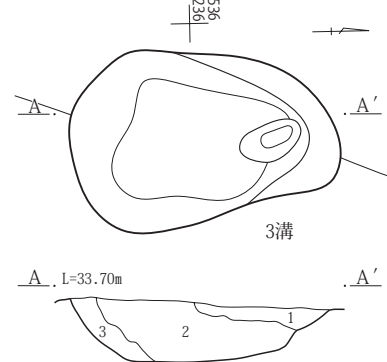
19号土坑



19号土坑

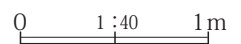
1. 明褐色土(7.5YR5/8) ローム多く含む。柔らかく鹿の子状に褐色土が入る。
2. 褐色土(7.5YR4/4) 褐色土が鹿の子状に入る。
3. 褐色土(7.5YR4/3) 2層より暗い。
4. 褐色土(7.5YR4/3) ロームがブロック状に入る。粘性強い。
5. 暗褐色土(10YR3/4) 暗色帯がブロック状に入る。粘性強い。
6. 黒褐色土(10YR2/2) 暗色帯がブロック状に入る。粘性強い。

21号土坑



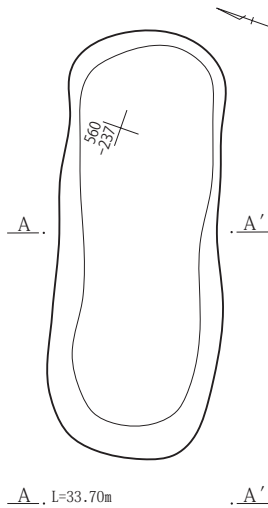
21号土坑

1. 褐色土(10YR4/4) 黄褐色土φ3~5cmブロック含む。
2. 黒褐色土(10YR3/2) にぶい黄褐色土φ10cmブロック30%含む。
3. にぶい黄褐色土(10YR4/3) 黒褐色土含む。黄色土ブロック含む。



第29図 16～19・21号土坑平断面図、18号土坑出土遺物

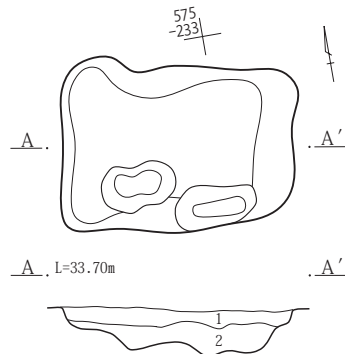
20号土坑



20号土坑

1. 灰褐色土(7.5YR4/2) ロームブロック含む。人為的埋没。
2. 明黄褐色土(10YR7/6) ロームがブロック状に入る。

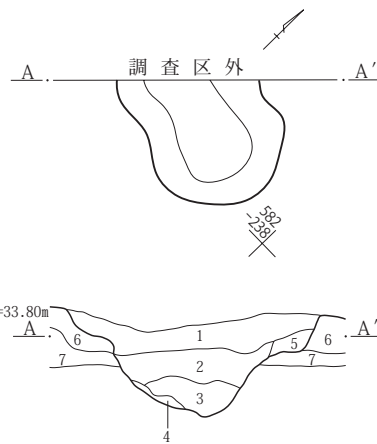
22号土坑



22号土坑

1. 暗褐色土(7.5YR3/3) ロームブロック含む。しまり悪く、柔らか。

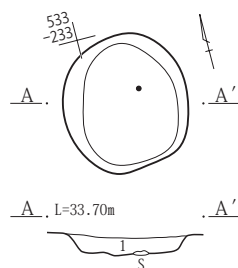
24号土坑



24号土坑

1. 褐色土(7.5YR4/4) ロームブロック含む。この上に碎石が載る。
2. にぶい褐色土(7.5YR6/3) B軽石混じり。
3. 橙色土(7.5YR6/8) ローム崩落土に褐色土混じる。
4. 橙色土(7.5YR6/8) ローム崩落土。
5. にぶい黄褐色土(10YR6/3) B軽石を多く含む。
6. 褐色土(7.5YR4/3) B軽石、ローム粒含む。
7. ソフトローム 地山。

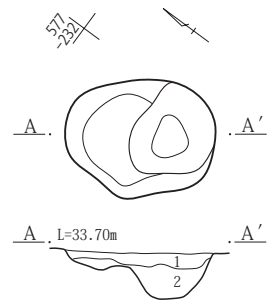
28号土坑



28号土坑

1. 褐灰色土(7.5YR4/1) 砂質土、B軽石少量含む。粘性強い。

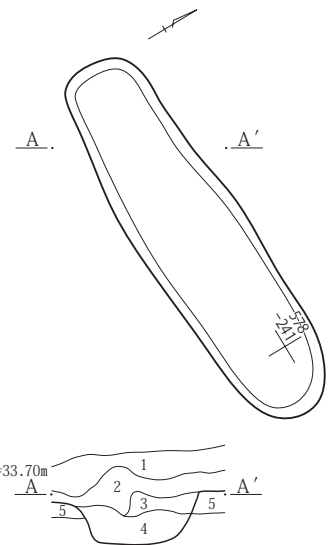
23号土坑



23号土坑

1. 暗褐色土(7.5YR3/3) B軽石含む。
2. 明褐色土(7.5YR5/6) ロームブロック含む。しまり悪く、柔らか。

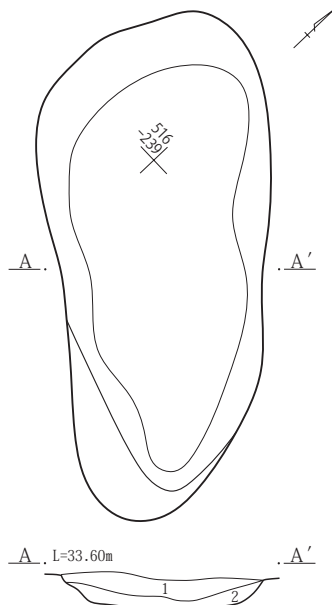
25号土坑



25号土坑

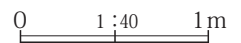
1. にぶい褐色土(7.5YR5/4) B軽石混じり、旧表土。この上に碎石が載る。
2. 褐色土(7.5YR4/4) ロームブロック含む。
3. 橙色土(7.5YR6/6) ロームブロック多く含む。
4. 橙色土(7.5YR6/8) ローム崩落土。
5. ソフトローム 地山。

27号土坑



27号土坑

1. 暗褐色土(7.5YR3/3) B軽石、ロームブロック含む。
2. 褐色土(7.5YR4/4) ローム粒多い。



第30図 20・22～25・27・28号土坑平断面図

る可能性があるが、骨や焼土などは出土していない点と、五輪塔の空風輪だけが出土して他の部分が未発見である点などから、積極的に墓坑と断定することはできない。27号土坑は18号土坑とほぼ同形同大なので、同じような用途が考えられる。19号土坑は細長い土坑で、ほぼ垂直に深く掘り込まれているため、明確な意図を持って掘られたものと思われるが、遺物が出土せず性格を特定できない。その他の土坑は不整形あるいは不整円形のものが多く、やはり明確な伴出遺物がないので性格を明らかにすることはできなかった。

集石は13号墳の北側にある。確認面に5～15cm大の小礫が集まっていたため、何らかの遺構と調べて調査した。礫の下には浅い不整円形の掘り込みが見られる。遺物は円筒埴輪と思われる埴輪の小破片が7片出土しただけで、時期・用途を特定できるような遺物は出土しなかった。周囲に同様なものは見られなかったため、礎石の根石とは考えられず、その性格は不明である。

第5節 遺構外出土の遺物

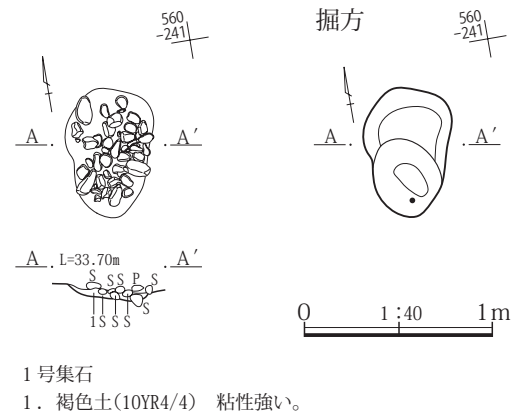
ここでは遺構外出土の遺物のうち、縄文時代のものを除いた、古墳時代以降のものを取り上げる。縄文時代の遺物は次節でまとめて取り上げることにする。

遺構外から出土した遺物は数多い(第32・33図)。1～12は埴輪である。1～6は円筒埴輪であり、7～9は朝顔形埴輪である。10～12は形象埴輪であり、10は家形、11は馬形埴輪の鈴、12は馬形埴輪の脚だと思われる。

1～6の円筒埴輪のうち、1と2は朝顔形の可能性もある。それぞれの特徴は12、13号古墳出土のものとはほぼ共通しており、あまり時期差は認められないが、3は器肉が厚く突帯も高くはっきりしているため、やや異なるものである。

10の家形埴輪は、先述のように12、13号墳出土のものと同じ個体である可能性が高い。12はごく小さな破片だが、円筒形の底部の部分で、弧状の切り込みが入っていることから、馬形埴輪の蹄の部分であると判断したものである。

これらの出土地点は、2、8、10が13号墳の周辺であり、その他の破片は調査区南西隅に掘られていたゴミ穴から出土した。



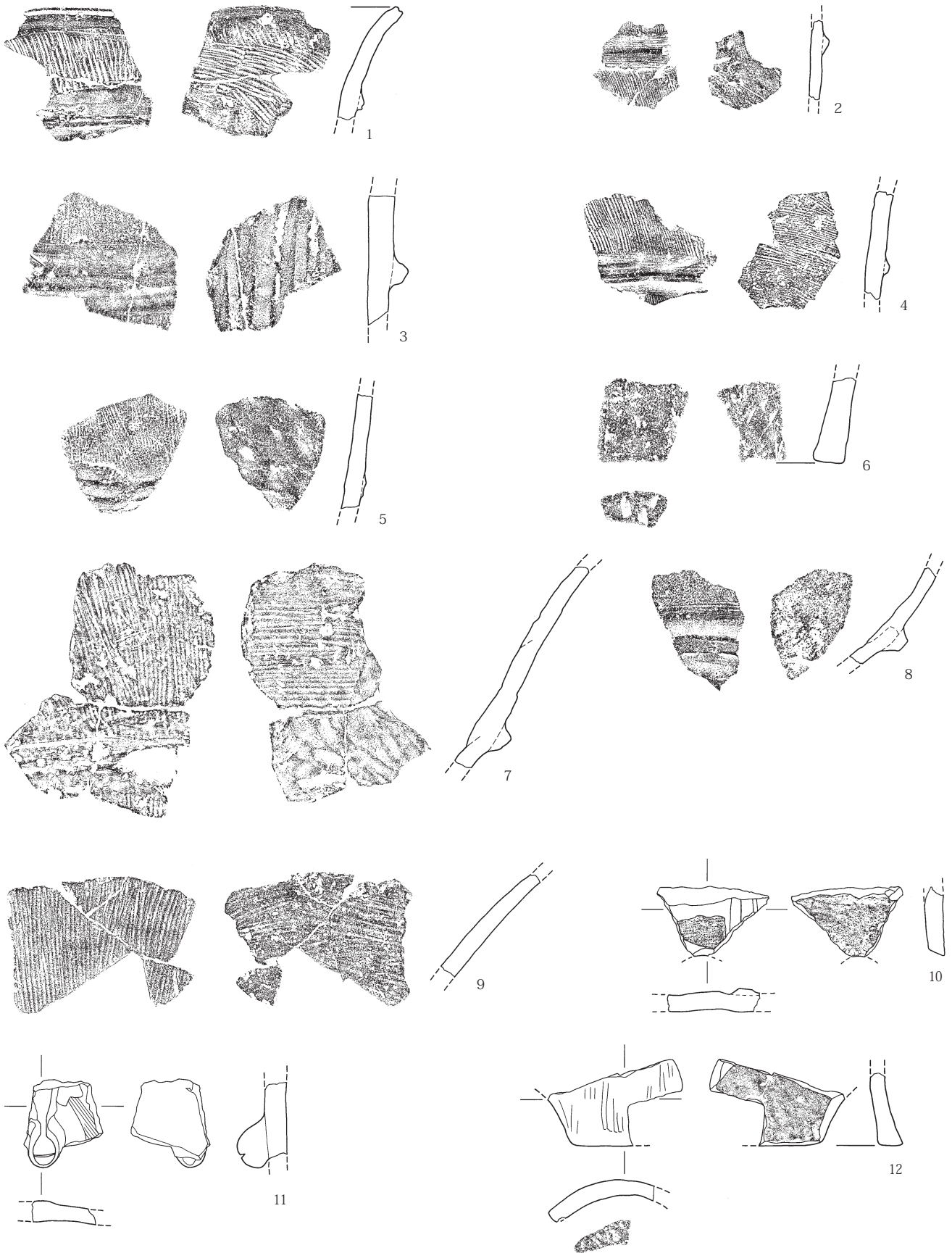
第31図 1号集石平断面図

13と14は瓦塔の破片である。13は13号墳の周堀から、14は13号墳の北側から出土した。いずれも屋蓋部の小破片であるため、瓦塔ではなく、瓦堂である可能性は残る。丸瓦の幅がわずかに異なるが、その他の特徴は共通しているので同一個体であろう。全体に厚手の作りで、瓦は半裁竹管状の工具で丸瓦のみを表し、約2.5cm間隔の多節で表現する。隅降棟は欠損している。軒先は平坦に切られている。隅木・垂木などは先の鋭い工具で切り出す。軒は二軒で、14の破片では2.7cmの間隔をあけて幅2.2cmの垂木を表現している。13の隅部の破片では、隅木を挟んで左右の垂木の形状が異なる。彩色の痕跡はみられない。これらの瓦塔は調査区外のどこから持ち込まれたものと考えられるが、本古墳群近傍には瓦塔が出土する遺跡は知られておらず、本来あった遺跡は不明である。

15は13号墳周堀の最上層から出土した石製品だが、用途は不明である。

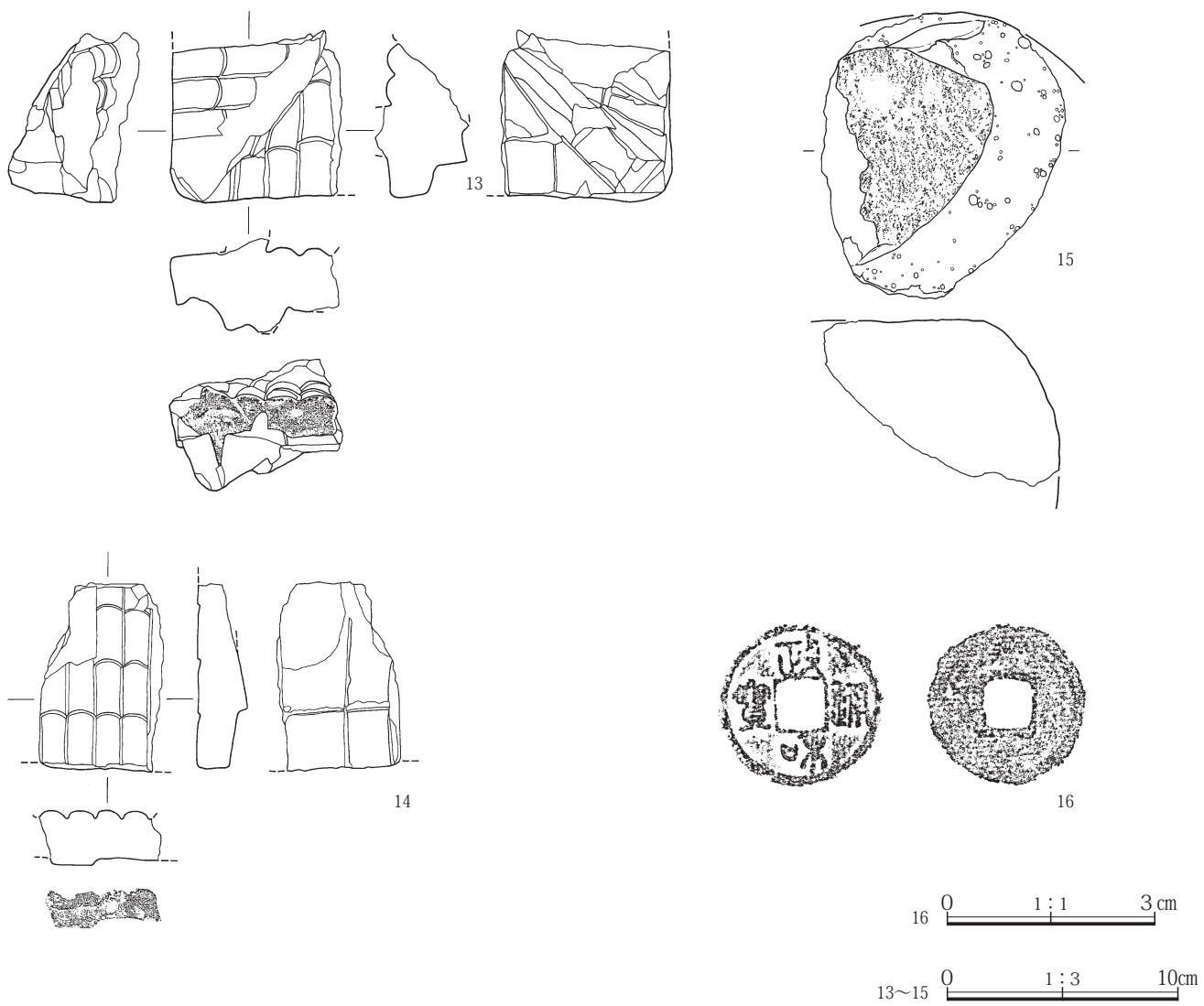
16は政和通寶(北宋・1111年初鑄)であり、13号墳から出土した。

この他に小破片として、埴輪片が合計183点(うち、円筒埴輪と思われるもの108点、形象埴輪1点、不明74点)、古代の土師器甕・壺類20点、須恵器杯・椀類2点、同甕・壺類3点、近世在地系焙烙・鍋類1点、時期不明土製品1点が出土しているが、これらのうちの大部分は調査区南西隅に掘られていたゴミ穴から出土しており、遺跡周辺から集められたものであろう。



0 1:4 10cm

第32図 遺構外出土の遺物(1)



第33図 遺構外出土の遺物(2)

第6節 縄文時代の遺構と遺物

1 縄文土器集中部(第34・35図、第10表、PL. 12-5・6, 19)

5-2区南部で縄文土器が集中して出土するところがあり、そこを「縄文土器集中部」と名付けて調査した。

位置は13号墳の約20m南、510-245グリッドと515-245グリッドにまたがった場所である。東西2m、南北1mの範囲に縄文土器が散らばるように分布していたが、この付近は攪乱が多いので、より東側に分布がのびる可能性も考えられる。

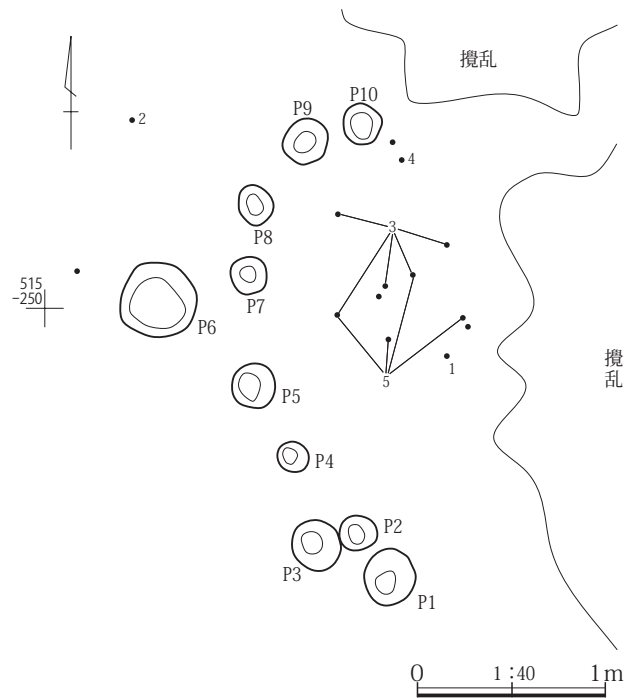
この縄文土器集中部には、10基のピットが円弧状、ないしはL字状に並んでいるのが発見された。各ピットの大きさは以下の通りである(長径×短径×深さ、単位はcm)。

P 1	30×27×14	P 6	41×39×12
P 2	20×18×10	P 7	20×19×9
P 3	27×25×10	P 8	21×18×10
P 4	17×16×8	P 9	24×22×14
P 5	24×23×9	P 10	22×21×12

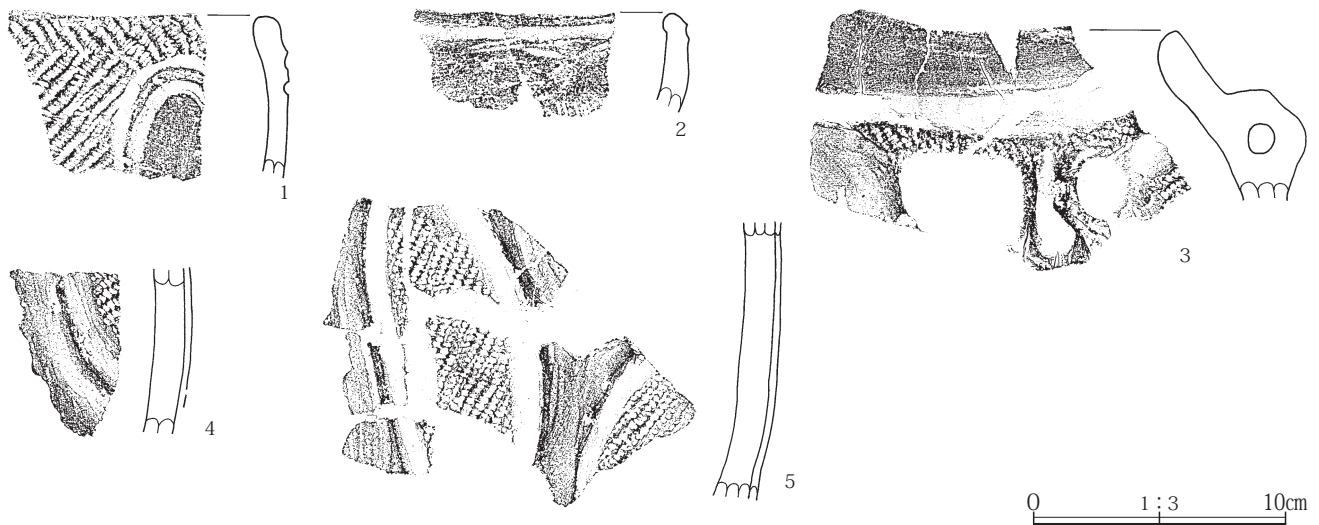
深さが8～14cmと浅いので、その点で疑問があるが、ピットの配置からみて、これらが住居の柱穴である可能性は皆無ではないと思われる。その際は、ピットが浅いのは後世の削平のためと考えられよう。ただし、ここに竪穴住居が存在したのだとしても、柱穴の配置が弧状あ

るいはL字状に配置されているように見えるだけなので、それがどのような形態・大きさのものであったのかは明らかにしたい。

出土した土器は小破片となっていたが、ここではそのうち5点を掲載する。いずれも加曽利E3式のものである。1～3のように、口縁形態に異なったものがあるので、これらは1個体のものではなく、複数個体のもので混在していることが分かる。その他に小破片として5点が出土している。



第34図 縄文土器集中部平面図



第35図 縄文土器集中部出土土器

2 遺構外出土の縄文時代の遺物(第36図、第10表、PL.19)

ここでは、遺構外、あるいは時期の明らかに異なる遺構から出土した縄文時代の遺物を、まとめて「遺構外」として扱って取り上げる。掲載するのは7点の土器と、3点の石器・石製品である。

土器は1～5は加曽利E 3式、6・7は加曽利B式のものである。

8と9は石鏃で、8はチャート、9は黒曜石である。10は磨石で粗粒輝石安山岩である。この他に剥片が4点出土し、石材は黒色安山岩、チャート、細粒輝石安山岩、砂岩が各1点ずつである。

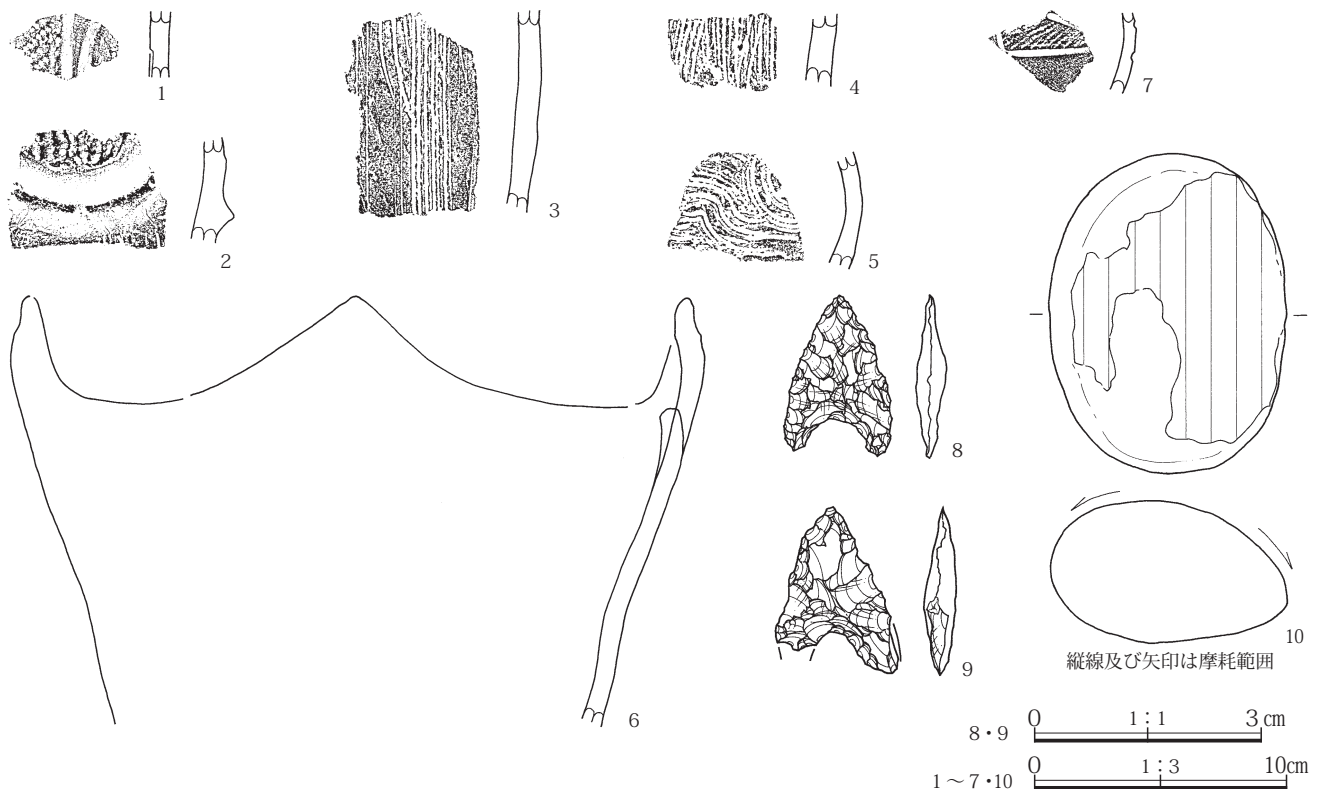
前回の調査でも、やはり縄文時代の遺構と遺物がみつかっている。遺構では、4基の土坑を同時代の陥し穴と考へて報告している。また、遺構外から出土した遺物として、加曽利E 4式の土器を3点のほか、石鏃5点、打製石斧2点を報告している。今回報告する遺物と前後する時期のものであり、さほど濃密ではないが、縄文中・後期の遺構・遺物が古墳群内に存在していることは確実である。

第7節 旧石器時代の調査

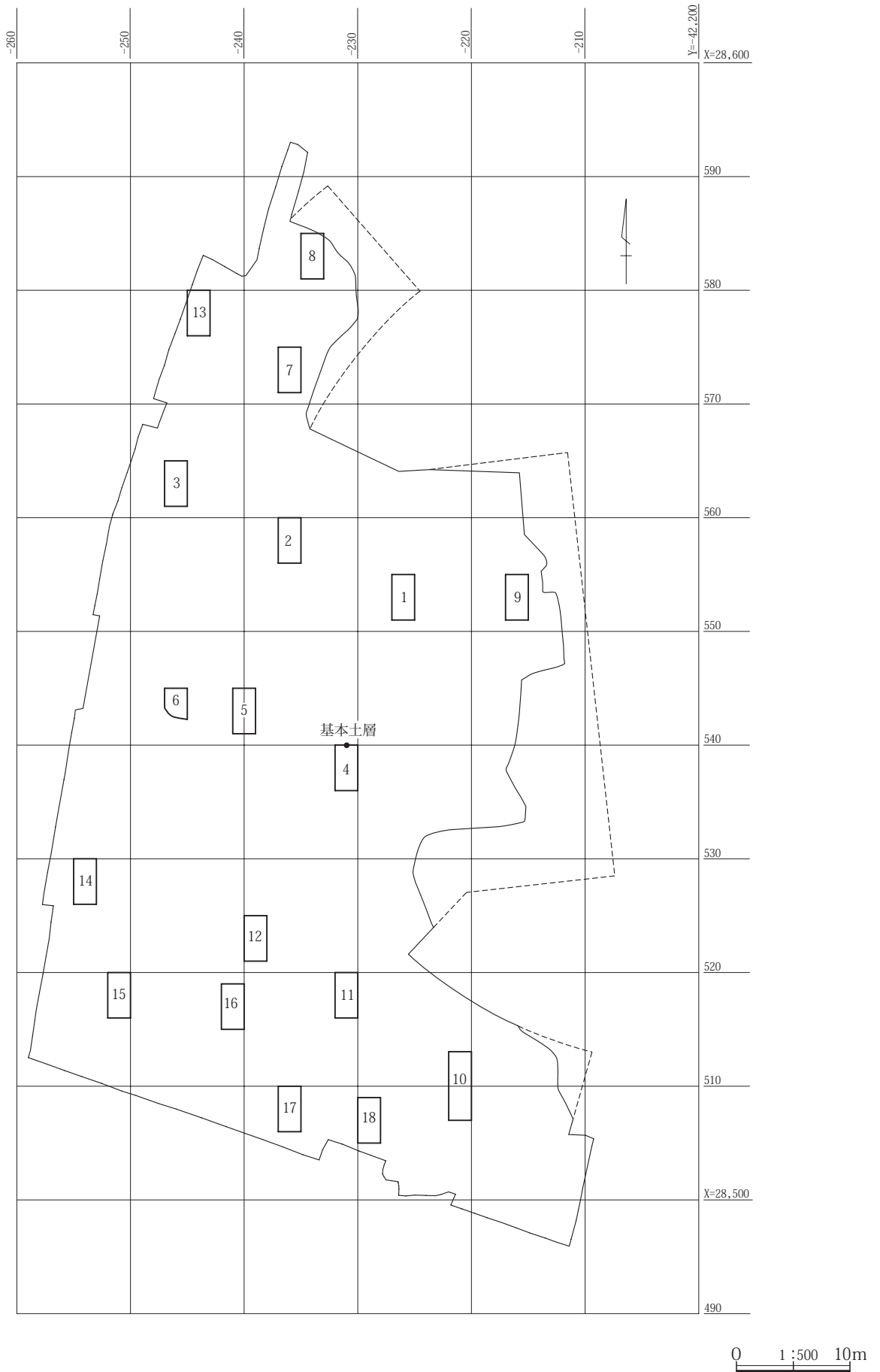
以上の遺構の調査が終了した後、旧石器時代の調査を行った。旧石器時代の遺物は前回の調査では比較的多く見つかっており、今回も発見される可能性は高いものと思われていた。

調査は基本的に2×4mの調査坑を第37図のように配置して実施した。配置の一部が規則的になっていないのは、遺構や攪乱を避けたためであり、調査区中央部の調査坑がやや少ないのは、周堀の深い古墳がここに存在するためと、東端部に大きな攪乱が入っていたためである。設定した調査坑は18ヶ所であり、その面積は合計144㎡で、これは調査区全面積の4%にあたる。

調査では基盤となる灰色砂層に到達するまでジョレンで掘り下げたが、遺構・遺物とも発見されなかった。



第36図 遺構外出土の縄文時代の遺物



第 37 図 旧石器時代調査坑配置図

第4章 総括

第3章で述べたように、今回の調査では古墳5基、溝3条、土坑12基、集石1ヶ所、縄文土器の集中部1ヶ所を調査した。出土した遺物は大部分が埴輪であり、それ以外の遺物は少なかった。前回の調査では比較的多くの旧石器が出土したが、今回は全く出土していない。ここでは出土した埴輪と古墳についてまとめることで調査の総括としたい。

第1節 出土埴輪について

出土した遺物は一部を除いて埴輪であり、そのうちのほとんどは円筒埴輪である。出土古墳は12号墳と13号墳に限られ、その他の遺構からの出土は少ない。土坑・溝からの出土品は後世の流れ込みであろう。出土埴輪の特徴は第3章で詳述したが、以下、12、13号墳から出土した円筒埴輪についてまとめることにする。

12号墳は周堀の1/4程度と墳丘部の一部だけが調査できただけなので、出土した埴輪の数も多くはない。全体が分かる円筒埴輪は1点だけなので、特徴を明確に把握することは困難である。

規格はすべて2条3段構成である。高さは1個体(第10図1-1)でしか分からないが31.5cm。口径は18.0～22.0cm、底径は10.6～12.8cmである。成形、調整はやや粗雑であり、歪んでいるものもある。外面調整は基本的に縦ハケで、口縁には横方向のナデを施す。縦ハケではなく、ヘラナデ、ヘラ削りのものが1点ずつある。内面調整は指やヘラによる縦ナデで、口縁部付近にはハケ目を残すものが多い。突帯は全体に低くはっきりしないものが多い。断面形状は台形、M字状、三角形のものがあるが、台形は下の稜が低いものがほとんどで、中には三角形に近くなってしまうものもある。透孔は胴部の第2突帯近くに開けられる場合が多い。形は円形が多く、一部縦長で上面が平らな、半円を意識したようなものがある。ヘラ記号は3点だけにみられ、いずれも口縁部の外面に横一本線「一」が刻まれている。

13号墳はほぼ全体を調査でき、また、円筒埴輪列が倒れた状態で出土したため、比較的多くの数が出土した。

この古墳の円筒埴輪も規格はすべて2条3段である。大きさにはややばらつきがあるが、高さ33.5～39.1cm、口径18.8～24.6cm、底径9.3～12.7cmであり、12号墳のものよりもやや大きく、全体に細身のものが多い。基底部の伸長化の傾向を示すものがみられることが注意を引く。また、成形、調整は粗雑なものが目につく。外面調整はやはり縦ハケのものが多いが、ヘラナデと思われるものも9点ある。ハケ目の密度には1cm当たり2～14本と多様性がみられる。口縁部には横方向のナデを施す。底部の調整は行われていない。内面調整は基本的には縦か斜めに撫でたあと、上の部分に斜めか横のハケ目を施すが、外面がヘラナデのものは内面もナデだけである場合が多い。突帯の断面形状は台形かM字状がほとんどで、三角形はわずかである。透孔はすべて胴部にあり、ほぼ円形といってよい形で、第2突帯近くに小径の穴が開けられるものと、上下の突帯の間に大径の穴が開けられる場合とがある。ヘラ記号は8点に見られ、いずれも胴部の外面に刻まれ、横線を1～3本引いている。

12号墳と13号墳はいずれも墳丘盛土下にFAの堆積がみられるので、FA降下後に構築されたことが明らかであり、ともに6世紀初頭～前半に位置づけられるものである。このように年代幅が限定できることは、埴輪の編年研究を行う上で重要である。両者の埴輪は、新しい傾向の特徴と古い傾向の特徴が混在していて、時期的な特徴をよく表した良好な資料である。また、特に12号墳出土品が少ないために断定はできないものの、法量や基底部の伸長化のみられる個体の有無などにみられるように、特徴がやや異なっている。この違いが時期差によるものなのか、製品の多様性の中で理解できるものなのかはさらなる検討が必要であるが、今後編年の細分を行う上で貴重な資料になるものである。

また、次項で述べるように、前回の調査でもFA降下前後の古墳が見つかっている。そのうち円筒埴輪がある程度出土した古墳としては、FA降下前の1号墳、2号墳、FA降下後の6号墳、8号墳がある。これらの古墳から出土した円筒埴輪との比較検討も、編年研究の重要なデータを提供するはずであり、今後の研究が期待される。

第2節 古墳調査の成果と意義

1 古墳墳丘下の溝

13号墳では墳丘盛土の下に、周堀と同心円状の溝が見つかった。溝の形状はかなり不整形で、上幅は1.02～2.28m、深さは0.26～0.52mである。溝は墳丘下の旧地表面に堆積したFAを掘り込んでおり、古墳周堀とほぼ同心円をなすことから、13号墳に伴うものと考えられる。不整形であり、そのため、掘られた状態で何らかの用途に利用されたものとは考えがたく、直後に埋められることを前提にして掘られたものであると思われる。とすれば、その役割が目されるが、それを確定することは難しい。

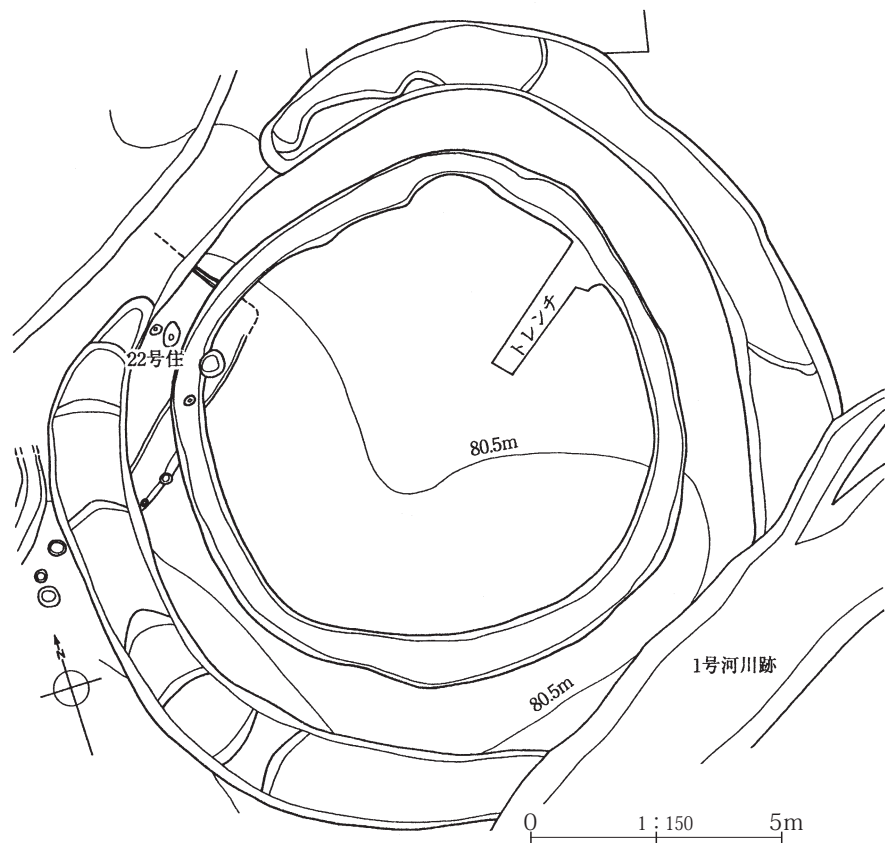
この古墳と同様に、墳丘の盛土下に周堀と同心円状の溝が見つかった例としては、高崎情報団地遺跡15号墳がある(第38図、高崎市遺跡調査会『高崎情報団地遺跡』1997)。5世紀後半と推定される円墳(周堀内径で12.0～13.3m)であり、その墳丘部に図のような溝が巡っているのが確認されている。溝の幅は最大1.04mで深さは0.3mであり、周堀から0.8～1.5m内側を全周している。周堀埋土中にはFAの堆積が認められたが、この溝には見られない。報告書によれば、「2重の周溝が存在するが、これは墳丘構築工程によるものと思われる。まず内側の「周溝」を掘って中央部に盛土し、次に外側の周溝を掘って最終的な墳丘を完成させたのであろう。したがって、内側「周溝」は墳丘下に存在していたものと考えられる」とのことであり、墳丘の盛土作業の途中で掘られたものと考えられている。ただし調査時には墳丘盛土が残っていたわけではなく、以上の理解が層位的に裏付けられているのではない

ようである。

周堀のすぐ内側に溝が掘られている例としては、他に少林山台遺跡17号墳がある(財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団『少林山台遺跡』1993)。17号墳は6世紀後半の円墳で、報告書ではその溝を「いわゆる埋没溝」と呼んでいる。墳丘と周堀との間のテラス面の下に掘られているものだが、この古墳は保存となったので、溝の内側の葺石は外されなかった。そのため、全体の断面形状は不明で、墳丘を環状に巡っていたか否かも不明である。また報告書ではその役割については言及されていない。

以上の2例は、いずれも周堀のすぐ内側に掘られていることで共通しており、高林西原13号墳の例とは異なっている。そのため、この2古墳の溝と13号墳の溝と同じ役割であるとは思えない。この2例は13号墳とは別と考えた方がよいと思われる。

13号墳では溝が古墳の中心近くに掘られているが、この部分は墳丘の盛土作業を開始すればすぐに埋もれてしまう部分であり、高崎情報団地遺跡15号墳で想定された



第38図 高崎情報団地遺跡15号墳平面図

(高崎市遺跡調査会『高崎情報団地遺跡』(1997)より。一部改変。)

第4章 総括

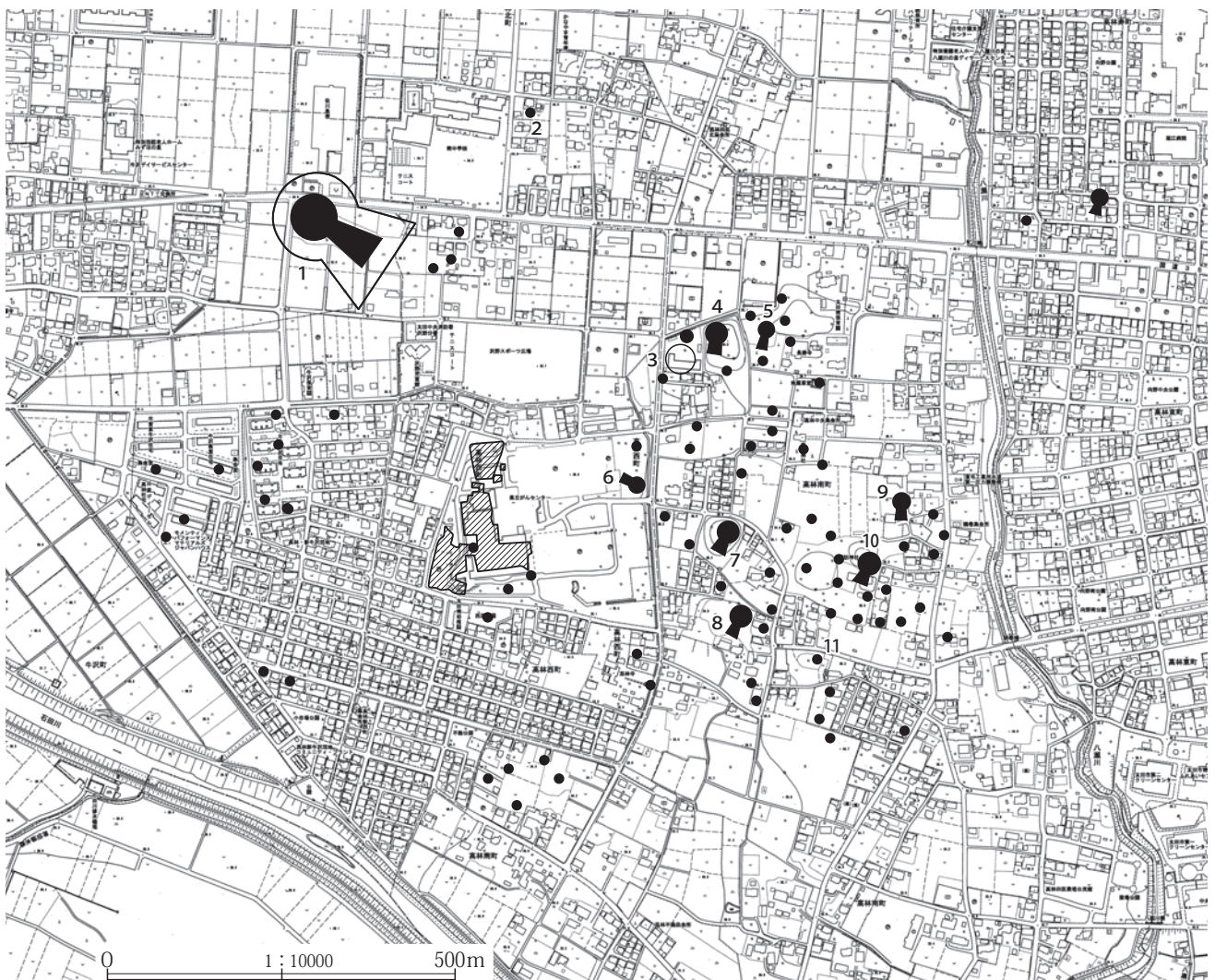
ような、墳丘盛土作業に関わるものとは思えない。あるいは主体部の構築に関わるものではないかとも推定できるが、本古墳では削平のために主体部の痕跡が全く残っておらず、それについては確認ができない。以上のように、この溝の役割を考える痕跡はほとんどなく、また、類例も乏しい遺構なので、現状ではその役割を明らかにすることは困難であると言わざるを得ない。今後良好な遺存状態の類例が見つかることが期待される。

2 古墳調査の意義

平成12年からのがんセンター敷地内の調査区と、周辺の古墳の位置は第39図にみるとおりである。高林台地上

に多くの古墳が分布しているのが分かる。この図の範囲の古墳は、前期古墳である朝子塚古墳を除いて、ほぼ全部が5世紀後半～7世紀代にかけて造営されたものとみられている。

台地上の古墳は、第5図「周辺の遺跡」で示したように、4つの古墳群に分けられている。第39図では、がんセンター敷地とその南側隣接地に古墳のドットが落とされている範囲が高林西原古墳群であり、南北道路を挟んだ東側一帯の古墳が密集した範囲は高林鶴巻古墳群である。しかし、図で見るとこの二つの古墳群を分ける理由が見当たらないので、両者は一連のものとするのが妥当であろう。『太田市史』（太田市 1996）第4章第3節4「前



第39図 高林西原古墳群周辺の古墳

(この図の作成にあたっては、太田市長の承認を得て、同市発行の2,500分の1地形図(平成23年測図)を使用した。古墳の位置は東毛病院宿舎遺跡調査会『西原古墳群』(1993)によった。)

- | | | | | |
|------------|------------|------------|-----------|----------|
| 1 朝子塚古墳 | 2 沢野村102号墳 | 3 西原古墳群調査区 | 4 沢野村86号墳 | 5 愛宕山古墳 |
| 6 沢野村77号墳 | 7 沢野村74号墳 | 8 中原古墳 | 9 沢野村47号墳 | 10 諏訪山古墳 |
| 11 沢野村63号墳 | | | | |

方後円墳の終焉と群集墳の発達」(執筆は梅沢重昭氏)も「高林西原・鶴巻古墳群」と、一連のものとして扱っている(296ページ)。さらに南側、不動公園の周辺のドットは高林不動古墳群と呼ばれ、西側に見られるドットは小谷場古墳群と呼ばれている。このように台地上の古墳は3ないし4つの古墳群に分けて考えられているが、がんセンター内の調査や平成5(1993)年に行われた東毛病院宿舎建設の調査(「西原古墳群」という遺跡名称で調査された。第39図の3の丸印の場所)で明らかとなったとおり、この地域には地表面からは分からなくなってしまう古墳が数多く存在している。それを考えれば、このように古墳群を細分することが果たして妥当なのかという疑問が生じてくる。現状では高林西原古墳群と高林不動古墳群、小谷場古墳群との間には、古墳のない地帯が存在するように見えるが、これはあくまでも現状であり、ここにも墳丘が削平された未知の古墳が隠れている可能性は十分考えられるからである。高林台地上の古墳群の動向を検討する場合、このような疑問があることを常に念頭に置いておくべきであろう。

がんセンター内の調査区は、現在高林西原古墳群と呼ばれている古墳群の西端近くに位置する。ここでは第39図に示したような狭い範囲に、15基もの古墳が築造されていることが明らかとなった。周辺の古墳分布の現状と比べても驚くべき密集度である。このような密集度が台地上全体で同様であったとは思えないが、古墳群形成当時には、現在知られている古墳の数倍の数の古墳が存在したことであろう。

15基の古墳は、前回の報告書同様、FAの堆積状態で4種類に分けることができる。

- A FAが周堀内に堆積しているもの
 - 1号墳、2号墳、11号墳、15号墳
 - B FAが墳丘下の旧地表面に堆積しているもの
 - 6号墳、8号墳、9号墳、12号墳、13号墳
 - C 周堀内にFAの堆積はみられず、墳丘部は削平か調査区外になるために不明のもの
 - 3号墳、5号墳、7号墳
 - D 削平のために周堀が浅くなっており、周堀・墳丘下ともにFAの堆積が確認できないもの
 - 4号墳、10号墳、14号墳
- AはFA降下前に古墳が造られていたことになり、調査

古墳の中では古い一群となる。FAは周堀埋土の下層に堆積しているので、築造時期は降下時点をさほど遡らないものと思われる。これに対してBは、旧地表面に堆積したFAが完全には攪乱されないうちに古墳墳丘の盛土が行われているので、降下後あまり時間をおかないうちに築造されたものであろう。ただし、その残存度には差がみられるので、ある程度の時間幅が見込まれることは間違いない。Cは周堀内にFAの堆積がみられないことから、降下後に築造されたものと思われるが、Bのように墳丘下に堆積していることが確認できないので、断定する確証が得られない。DはFAの堆積がみられず、出土遺物もほとんどないので、時期を確定することができないものである。このようにDの3基を除いた12基は、いずれもFA降下前後の築造と推定できるもので、FA降下が6世紀初頭だとすれば、5世紀末から6世紀前半にかけて造られたものと思われる。

前掲『太田市史』では、高林西原・鶴巻古墳群は、諏訪山古墳(全長72m)や中原古墳(全長56m)のような大型の帆立貝形古墳が5世紀後半から6世紀前半にかけて築造され、それを中核として付随するように古墳群が形成された傾向が指摘されている。がんセンター内で調査した15基はいずれも円墳と推定され、その規模は最大の5号墳でも周堀内径26mなので、古墳群の中では中規模以下の古墳であることになる。とすればこれらの古墳は帆立貝形古墳を築造した地域首長層よりも下位の人々の墳墓であることは明らかである。首長層の造墓活動に付随して自らの墳墓をその近傍に築造したのであろう。ただし、8号墳の竪穴状小石槨を除いて主体部が残っておらず、副葬品も全く出土しなかったため、被葬者像をこれ以上明らかにすることは難しい。

円墳群の形成は6世紀代に入ってからと推定されていたので、1号墳をはじめとしたAのグループはその中では初期のものであり、がんセンター内の調査区は古墳群の中では比較的早く築造が始まった地区だと言えよう。ここではその後6世紀前半まで古墳が近接して造られ続け、その結果このような高密度になったものと思われるのである。

以上のように本調査区の古墳は、古墳群の全体像やその形成の過程を知る上で重要な意味をもっていると言える。

遺物観察表凡例

遺物観察表(第5表～第10表)では略号などを多く用いた。以下にその凡例を掲げるが、一般的な項目については省略している。本遺跡の出土遺物は埴輪がほとんどなので、凡例も埴輪とその他の遺物に分けることにする。

[埴輪]

種別 普通の円筒埴輪は「円筒」、朝顔形埴輪は「朝顔」と記述。形象埴輪の場合は、「形象」と記述したあとに、その種類(家、人物、馬など)を記述する。

計測値 器高、口径、底径を計測。単位はcm。

ハケ目 幅10mm当たりのハケ目の本数。

突帯 断面形状を、台形、M字状、三角形の3種類に分けて記述。特記すべき特徴は、この欄かあるいは「特徴」の欄に記述した。

透孔 透孔の形状を記述。特記すべき特徴は、この欄かあるいは「特徴」の欄に記述した。

特徴 整形、器形の特徴を中心に記述。注意すべき用語は下記の通り。

突帯 下から第1突帯、第2突帯と呼ぶ。

基底部・胴部・口縁部 突帯に区切られた部分と呼ぶ場合、下からこのように呼ぶ。

基部 円筒埴輪最下部の、粘土板を輪にして成形した部分を基部と呼ぶ。上端が観察できる場合は、底面からの高さを計測して記述。接合部の粘土板の重なりは、接合部を正面から見て左右どちらの粘土が上になっているかを記述した。

ナデなどの方向 「縦」、「横」、「斜」に分け、斜めについては縦に近いものを「斜縦」、横に近いものを「斜横」と区別している。

備考 その他の特記事項を記述。ヘラ記号がある場合はこの欄に記述した。

[その他の遺物]

計測値 計測する場所は遺物種によって異なる。土師器・須恵器は口径、底径、器高を、石器・石製品は長さ、幅、厚さ、重さを計測するのを基本とする。金属器は銅銭のみなので、直径、厚さ、重さを計測した。()は残存値を表わす。単位はcmとg。縄文土器の場合は小破片のみのため計測していない。

胎土/焼成/色調 土師器・須恵器と土製品とにこの欄を設け、縄文土器は胎土の欄のみを設けた。石器・石製品はこの欄の代わりに石材の欄を設けた。

第5表 遺物観察表(1)

12号墳出土埴輪

挿図番号 図版番号	No.	種別	残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	ハケ目	突帯	透孔	特徴	備考
第10図 PL.13	1-1	円筒	1/3	高31.5 口20.0 底12.8	粗砂粒・細砂粒・白色 鉍物粒/良好/に ぶい橙	4	台形	円形	外面は縦ハケ。口縁部最上位は斜方位ハケ目。口唇部に横ナデ。口縁部、基底部の一部に指ナデを重ねる。突帯は上・下稜ともやや丸みを帯びる。基部の高さは6.5cm。内面は4回に分け縦ナデを施すが、粘土紐接合痕は消し切れていない。一部にヘラナデ、ハケ目が見られる。	
第10図 PL.13	1-2	円筒	口縁部～ 胴部片	高口 底	細砂粒・白色軽石/ 良好/橙	7	台形	円形	突帯の貼付は粗雑で波打つ。透孔は第2突帯寄りで小径。外面は縦ハケ。内面は縦にヘラナデ。	
第10図 PL.13	1-3	円筒	胴部～基 底部1/3	高口 底11.6	細砂粒/普通・良 好/橙	5	台形		突帯の貼付は粗雑。基部の高さは8cm。底部は一部が内側に肥厚。外面は縦ハケ。一部にナデが重なるが、底部調整ではない。内面は縦に指ナデ。	
第11図 PL.14	1-4	円筒	口縁部～ 胴部片	高口 底18.8	粗砂粒/普通/橙	7	剥離	円形	第2突帯は剥離している。外面は縦ハケ。口唇部に横ナデ。透孔は突帯寄り。内面斜位のハケ目を基本にこの上にヘラナデ、指ナデが重なる。	
第10図 PL.13	2	円筒	基底部下 半欠	高口 底21.4	粗砂粒・黒色鉍物 粒/不良・還元気 味/にぶい黄橙	6	三角	円形か	成・整形は丁寧。外面は縦ハケ。突帯は周縁部に横ナデ。内面口縁部は斜縦のハケ、胴部上半はハケ目、ナデの部分を残す。以下はナデ。	
第10図 PL.13	3	円筒	口縁部～ 基底部下 半1/2	高口 底21.4	粗砂粒・白色鉍物 粒/普通/橙	3～4	台形	不整形	透孔は不整形で半円形の名残を思わせる。外面は縦ハケ。突帯は貼付後周縁部を横ナデ。内面は磨滅が著しいが、口縁部に斜縦のハケ、以下は斜縦のナデを施したものと考えられる。	内外面とも磨滅。口縁部外面に「一」のヘラ記号。
第10図 PL.13	4	円筒	口縁部～ 胴部1/4	高口 底22.0	細砂粒/良好/にぶ い黄橙	6	M字 低い	円形	外面は縦ハケ。口縁部は横ナデ。胴部の高さが他に比して大きい。突帯の突出度は低い。器面をヘラ状工具で撫でる。透孔の一部が残存。一対の位置関係は乱れており、一方は第2突帯寄り、もう一方は第1突帯寄りにある。内面口縁部は斜縦のハケ目。胴部は斜縦の指ナデ。	
第10図 PL.13	5	円筒	口縁部～ 胴部1/3	高口 底21.2	粗砂粒・白色・黒 色鉍物粒/普通/浅 黄橙	7	M字	円形	形状はやや歪む。第2突帯部分で外方に少し張り出すか。外面は縦ハケと考えられるが、ハケ目の識別は困難。口唇部には横ナデ。透孔の一部が残存。内面口縁部は斜縦のハケ目。胴部はナデと考えられる。	内外面ともやや磨滅。
第10図 PL.13	6	円筒	口縁部～ 基底部上 半	高口 底18.0	粗砂粒・白色鉍物 粒/普通/にぶい橙	3～4	台形 下稜低 い	縦長の 半円形 か	透孔は縦長、上位は直線を指向するようにも見える。半円形を意識しているか。外面は縦ハケ。突帯の下稜は著しく低く、貼付後、周縁部を横ナデ。内面口縁部は斜縦のハケ目。胴部はナデ。	内外面とも磨滅。
第10図 PL.13	7	円筒	口縁部～ 胴部2/3	高口 底22.8	粗砂粒・黒色鉍物 粒/普通/にぶい橙		台形		口縁部先端は幅広い横ナデ。外面は器面磨滅のためハケ目不明。ヘラナデか。突帯は貼付後周縁部を横ナデ。断続ナデ技法が採用されているか。内面口縁部はヘラナデか。胴部もヘラナデと考えられる。	内外面とも磨滅。
第10図 PL.13	8	円筒	口縁部～ 胴部片	高口 底20.3	粗砂粒・黒色鉍物 粒/良好/明黄褐	5	三角	円形	外面は縦ハケ。口唇部は横ナデ。突帯の成形に断絶ナデ技法が用いられているか。器面をヘラ状工具で撫でている。胴部に円形の透孔の一部が残存する。内面口縁部は斜縦のハケ目。胴部は縦の指ナデ。	
第10図 PL.13	9	円筒	口縁部～ 胴部1/2	高口 底18.9	粗砂粒・白色・黒色 鉍物粒/やや不良、 わずかに還元気味 /にぶい黄橙	4	台形 一定し ない		全体に作りが粗雑。口縁部は先端に明瞭な面を有さない。外面は縦ハケ。部分的にナデを重ねる部分も見られる。突帯は断面台形を基本とするが一定でない。内面は一部にハケ目が見られるが大半がヘラナデ。	
第10図 PL.13	10	円筒	口縁部上 半2/3	高口 底20.6	細砂粒/普通/にぶ い橙	5～6			外面は縦ハケ後、先端を幅広く横ナデ。内面は斜縦のハケ目後、先端を横ナデ。	外面に「一」と長くヘラ記号。
第10図 PL.13	11	円筒	胴部～基 底部片	高口 底	細砂粒/普通/にぶ い橙	6	三角	円形	透孔は大径。外面は縦ハケ。内面は縦に指ナデ。一部に指押さえ。	
第10図 PL.13	12	円筒	胴部～基 底部片	高口 底	粗砂粒・黒色・白色 鉍物粒/普通・や や軟質/橙		台形 下稜低 い	円形	外面は縦方向にヘラ削り。突帯は下稜の発達弱い。胴部に円形透孔の一部残存。内面は縦に指ナデ。	内外面とも磨滅。
第11図 PL.14	13	円筒	胴部～基 底部1/3	高口 底	粗砂粒・白色鉍物 粒/普通/にぶい橙	7	台形か 三角に 近い	円形か	外面は縦ハケ。透孔の下半部が残存する。内面は縦に指ナデ	
第11図 PL.14	14	円筒	胴部～基 底部1/3	高口 底10.6	粗砂粒・白色鉍物 粒/普通/にぶい橙	6	三角		外面は縦ハケ。突帯は貼付後周縁部を横ナデ。ナデは一部途切れている。内面は縦に指ナデ。基部の高さは8cm。	外面基底部の一部に炭素吸着。
第11図 PL.14	15-1	朝顔	口縁部片	高口 底	細砂粒・白色鉍物 粒・赤色粘土粒/や や不良・やや軟質 /橙	7	M字		外面は縦ハケ後、突帯貼付。その後周辺を幅広く横ナデ。内面は斜めハケ後、横ナデ。残存下位は指押さえ痕。	
第11図 PL.14	15-2	朝顔	口縁部片	高口 底	細砂粒・白色鉍物 粒/やや不良/橙	7			残存上端は擬似口縁。口縁部上位との接合の為、ヘラによる刻みあり。外面は縦ハケ後、横ナデ。内面は斜めハケ、一部ナデ。	
第11図 PL.14	16	朝顔	胴部片	高口 底	粗砂粒・赤黒色粘 土粒/普通/にぶい 橙		M字	各段に あり	胴部は2段の残存。各段に透孔が配される。上段の透孔は段間いっぱい大きさである。内面は縦位に丁寧なナデ。	

遺物観察表

第6表 遺物観察表(2)

挿図番号 図版番号	No.	種別	残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	ハケ目	突帯	透孔	特徴	備考
第11図 PL.14	17	朝顔 胴部片		高口 底	粗砂粒・白色鉾物 粒/普通/にぶい黄 橙	6	M字	各段に 円形	胴部2段が残存。外面は縦ハケ。各段に透孔が対向する位置に一对配されている。円筒埴輪に比して小径である。内面は縦に指ナデ。	
第11図 PL.14	18	円筒 口縁部～ 胴部片		高口 底	細砂粒・角閃石か 輝石粒/普通/にぶ い橙	4	M字		外面は斜縦のハケ。ハケ目は磨滅。内面は斜縦のハケ目・ヘラナデ、一部斜横のナデ。	口縁部外面に「一」のヘラ記号。
第11図 PL.14	19	円筒 基底部片		高口 底11.0	細砂粒・黒色鉾物 粒・白色軽石/普通 /橙	5			基部の高さは7cm。外面は縦ハケ。底部間近に基部粘土板製作時の製作台の板目痕。内面は縦に指ナデ。底面は禾本科植物茎痕。	外面磨滅。
第11図 PL.14	20	朝顔 口縁部片		高口 底26.0	細砂粒・白色鉾物 粒/やや不良/橙	6～7			口縁部先端は平坦面をなす。外面は縦ハケ後、先端に横ナデ。ハケ目は不明瞭。内面は斜めハケ、一部、ナデを重ねハケ目を消す。	
第11図 PL.14	21	形象 家 破片		高口 底	粗砂粒/普通/浅黄		—	—	家の上屋根の流れの一部と考えられる。図左端は破風に近い位置で端部の折返った粘土帯が剥離している。残存上位には突帯が貼付していたと考えられる。他の部分は縦位のハケ目。裏面はナデ。	13号墳35・36、遺構外10と同一個体か。

13号墳出土埴輪

挿図番号 図版番号	No.	種別	残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	ハケ目	突帯	透孔	特徴	備考
第16・19図 PL.15	1	円筒 一部欠		高37.0 口22.5 底11.8	粗砂粒・白色鉾物 粒・チャート/普通 /橙	2～3	M字	円形 背側は 心葉形	透孔は第2突帯寄りに位置する。時計の12時方向から右回りに切開が始まる。背側の孔は心葉形を呈する。外面は縦ハケ。整形は粗雑である。突帯は貼付後周縁部に横ナデを施す。基部は高さ約11cm。粘土板は左を上を重ねる。外面に製作台の板目痕が見られる。内面全体を通して斜めハケで基底部ではナデが主体となる。	
第16・19図 PL.15	2	円筒 一部欠		高35.2 口19.3 底11.8	粗砂粒・白色鉾物 粒/普通/橙		台形	円形	口縁部に比して基底部の伸長化傾向がうかがえる。透孔は円形、大径。外面はヘラナデと考えられるが器面磨滅。突帯は貼付後、周縁部に横ナデ。基部の高さは約8cmか。粘土板の重ねは右が上。内面の口縁部は外面と同じ工具で整形が施されているが磨滅している。	
第16・19・ 20図 PL.15	3	円筒 一部欠		高39.1 口19.1 底10.0	粗砂粒・赤色粘土 粒/普通/橙	7～8	M字	円形	基底部は細く、伸長化が著しい。透孔は第2突帯寄り。外面は縦ハケ。基底部最下位には見られない。突帯は貼付後周縁部に横ナデを施すが粗雑。基部の高さは約14cm。粘土板の重ねは不明。内面は口縁部から胴部が斜横のハケ目。基底部にはハケ目の下にナデの部分を残す。	胴部外面に「=」のヘラ記号。
第16図 PL.15	4	円筒 一部欠		高 口23.4 底	粗砂粒/不良/浅黄 橙		下幅の 広い 台形	円形	透孔は第2突帯寄りに配される。口縁部先端は幅広く横ナデ。外面は磨滅が著しいがヘラナデ。突帯は貼付後周縁部に横ナデ。内面も磨滅。口縁部は横、あるいは斜横のハケ目、以下はナデを施すと考えられる。	焼成時に基底部下位に炭素吸着か。
第16・19図 PL.15	5	円筒 一部欠		高38.5 口21.3 底10.8	粗砂粒・白色鉾物 粒/普通/橙	3～4	M字	横長の 円形	外面は縦ハケ。基部は高さ約11cm。粘土板は左を上重ねる。基底部最下端にはナデ、圧痕の部分を残す。内面口縁部上位は斜横にハケ目。口縁部下位から基底部上半はナデ後、斜縦に粗雑なハケ目。	胴部外面に「=」のヘラ記号。
第16・19図 PL.15	6	円筒 一部欠		高36.1 口18.8 底10.5	粗砂粒/普通/浅黄 橙		台形		基底部の伸長化が見られる。口縁部の先端、外稜は丸みを有する。透孔は胴部高に比して大径。段間の中央に位置する。外面は縦のヘラナデ。突帯は貼付後強いタッチの横ナデ。基部は高さ約14cm。粘土板は右を上重ねる。内面の口縁部は横、胴部、基底部は縦にナデ。	
第16・19図 PL.15	7	円筒 一部欠		高33.5 口21.0 底9.3	粗砂粒・白色鉾物 粒/普通/明黄褐	5	M字		成形全体が粗雑。特に基底部は下位が歪むと共に器面の仕上げが粗雑。底部調整は見られない。外面は縦ハケ。突帯は貼付後周縁部に横ナデ。基部の高さは約6cmか。最下位には粘土板製作時の製作台の板目痕を残す。粘土板の重ねは左が上。底面には棒状の圧痕が見られる。内面は口縁部上半に斜横のハケ目。以下は斜めのナデ。	
第16・19図 PL.15	8	円筒 一部欠		高36.8 口20.4 底11.0	粗砂粒・白色鉾物 粒/普通/橙	7	M字	不整な 円形	基底部の伸長化が見られる。透孔は第2突帯寄りに配される。外面は縦ハケ。突帯は貼付後周縁部に横ナデ。基部は長さ約13cm。左を上粘土板を重ねている。基底部下位には粘土板製作時の製作台の板目痕を残す。内面は口縁部上位に斜横、以下胴部上半までが斜のハケ目、以下は斜のナデ。	
第16・19図 PL.15	9	円筒 一部欠		高35.1 口19.3 底10.3	粗砂粒・赤色粘土 粒/普通/にぶい黄 橙	7	M字	正円形 に近い	口縁部の先端は内側に稜をなし短く屈曲する。透孔は正円形に近く大径。段間の中央に位置する。外面は縦ハケ。突帯は貼付後周縁部に横ナデ。基部の高さは約7cm。粘土板の重ねは不明。内面口縁部は斜縦のハケ。胴部・基底部も同様。	
第17・20図 PL.16	10	円筒 口縁部～ 胴部片		高口 底	粗砂粒/普通・や や軟質/浅黄橙	3～4	台形		外面は縦ハケ。口縁部は横ナデ。透孔の一部残存。内面は斜横位のヘラナデ。口縁部外面に赤色塗彩か。	胴部外面に横一条のヘラ記号。

第7表 遺物観察表(3)

13号墳出土埴輪(つづき)

挿図番号 図版番号	No.	種別	残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	ハケ目	突帯	透孔	特徴	備考
第17・19図 PL.16	11	円筒	基底部下 半	高口 底10.5	細砂粒・白色鉍物 粒/普通/橙	14			基部粘土板は右を上重ねる。外面は縦ハケ。内面は縦にヘラナデ。底面は直径0.8～1.2cm程の棒状圧痕が見られる。	外面磨滅。
第17・19図 PL.16	12	円筒	胴部下位 ～基底部 2/3	高口 底10.8	粗砂粒・白色鉍物 粒/やや不良/橙		磨滅		外面はヘラナデか。基底部下端に基部粘土板製作時の板目痕を残す。突帯は磨滅が著しい。基部粘土板の高さは約8.5cm。重ねは不明。内面は斜縦のヘラナデ後、縦の指ナデを重ねている。基底部最下位から底部は炭素吸着。	外面磨滅。
第17・19図 PL.16	13	円筒	胴部～基 底部1/3	高口 底11.6	粗砂粒・赤色粘土 粒/普通/にぶい黄 橙	3	台形		外面は縦ハケ。基底部下端は外方に小さく歪む。基部の高さは10.5cm。底部に植物の茎の圧痕。内面は縦・斜縦に指ナデ。	
第17・19図 PL.16	14	円筒	胴部～基 底部	高口 底12.7	粗砂粒/良好/にぶ い橙	2～3	台形		外面は縦ハケ。底部間近に基部製作時の粘土板の板目痕を残す。基部の高さは10cm。内面は基底部中位まで指ナデ。これより上位は斜縦にハケ目。	
第17図 PL.16	15	円筒	口縁部～ 胴部2/3	高口 24.6 底	粗砂粒・白色鉍物 粒/普通/橙	3～4	台形		口縁部は強く外反して立ち上がる。外面は縦ハケ。突帯は貼付後周縁部に横ナデ。内面は磨滅するが、口縁部に斜横のハケ目。胴部にはナデが施されていると考えられる。	外面も磨滅。
第17・19図 PL.16	16	円筒	1/2	高33.6 口20.2 底11.2	粗砂粒・白色鉍物 粒/普通/橙	13～14	台形	円形	軽量。口縁部先端に幅広く横ナデ。透孔は段間の中央。外面磨滅、縦のヘラナデ(或いは細かいハケ目)。突帯は貼付後周縁部を横ナデ。基部の高さは約8cm。粘土板の重ねは右が上。内面は磨滅著しい。口縁部上半は斜めにヘラナデ。	
第17図 PL.16	17	円筒	口縁部～ 胴部1/3	高口 19.2 底	粗砂粒・白色・黒色 鉍物粒/普通/橙	3～4	台形		口縁部の先端は幅広く横ナデを施すが、ハケ目を消しきっていない。外面は縦ハケ。突帯は貼付後周縁部を横ナデ。内面の口縁部最上位は横にハケ目。以下は斜・斜縦にハケ目。胴部はハケ目、ナデ。	
第17・19図 PL.16	18	円筒	一部欠	高36.6 口19.5 底11.5	粗砂粒・白色鉍物 粒/普通/橙		M字	円形	外面は縦にヘラナデ。突帯は貼付後周縁部に横ナデ。基部は高さ約11cm。粘土板の重ねは右が上。内面はヘラナデ。	内外面とも磨滅。
第17・19図 PL.16	19	円筒	基底部 1/3	高口 底10.0	細砂粒/普通/にぶ い黄橙				下端は外方に反り返っている。基部粘土板の高さは約10cmか。底面はナデ。棒状圧痕が見られる。	内外面とも磨滅。
第17・19・ 20図 PL.16	20	円筒	一部欠	高38.3 口20.6 底9.5	粗砂粒・石英・赤色 粘土粒/普通/にぶ い橙	2	台形	円形	透孔は第2突帯寄りに位置する。外面は縦ハケ。突帯は貼付後周縁部に横ナデ。基部の高さは約8cm。粘土板の重ねは右が上。基底部下位外面に粘土板製作時の製作台板目痕が見られる。内面は口縁部から胴部上半まで斜横のハケ目。以下はナデ。	胴部に「一」のヘラ記号。
第17・19・ 20図 PL.16	21	円筒	一部欠	高38.4 口21.5 底11.4	粗砂粒・白色鉍 物粒/普通/浅黄橙	4～5	台形	円形 (心葉 形)	口縁部の短小化傾向が見られる。透孔は円形を基本とするが、切開が粗雑で心葉形を呈する。外面は縦ハケ。突帯は貼付後周縁部を横ナデ。基部の高さは約12cm。粘土板の重ねは左が上、基底部最下位は外面に粘土板製作時の板目痕が見られる。内面は口縁部が斜横、胴部が斜縦のハケ目。基底部はナデを主体に一部ハケ目が施される。	胴部に「三」のヘラ記号。
第17・19図 PL.16	22	円筒	一部欠	高35.2 口19.7 底11.0	粗砂粒・白色鉍物 粒/普通/橙		台形	円形	外面は磨滅が著しいが縦位にヘラナデ。突帯は貼付後周縁部に横ナデ。基部の高さは約13cmか。粘土板は右を上にする。重ねが外面でも観察できる。内面も磨滅が著しいがヘラナデが施されていると考えられる。	
第17図 PL.16	23	円筒	口縁部～ 胴部1/2	高口 21.4 底	粗砂粒・黒色鉍物 粒/良好/にぶい黄 橙	2～3	台形	円形	口縁部は先端が外反。端部は外方を向く。外面は縦ハケ。突帯は貼付後周縁部にナデ。内面口縁部は斜横にハケ目。胴部は斜縦位にハケ目およびヘラナデと考えられる。	内外面とも磨滅。胴部に「=」のヘラ記号。
第18・19図 PL.17	24	円筒	基底部片	高口 底10.6	粗砂粒・細砂粒/普 通/にぶい橙				基部粘土板の高さは約10cm。粘土板の重ねは右が上。外面はヘラナデか。内面は縦に指ナデ。底面は棒状の圧痕が見られる。	
第18・19図 PL.17	25	円筒	基底部片	高口 底12.4	粗砂粒・白色軽石/ 普通/にぶい橙				基部粘土板の高さは13cm。下端は内外面両側に肥厚。外面はヘラナデ。内面は斜に指ナデ。外面にヘラの当たった痕跡。	磨滅。
第21図 PL.17	26	円筒	口縁部～ 胴部片	高口 25.0 底	細砂粒・白色鉍物 粒/普通・やや軟質/ にぶい黄橙	2～3	台形		外面は縦ハケ後、口縁部先端に横ナデ。内面の口縁部先端は横ナデ、以下は丁寧な指ナデ。	
第21図 PL.17	27	円筒	口縁部～ 胴部片	高口 23.0 底	細砂粒・黄色軽石 粒/普通/橙	6	台形		外面は縦ハケ。口縁部先端は横ナデ。内面の口縁部先端は横ナデ。上位は横・斜横のハケ。以下は斜に指ナデ。	
第21図 PL.17	28	円筒	口縁部片	高口 22.0 底	細砂粒/普通/にぶ い橙	5～6			残存部下端は第2突帯に近い。外面は縦ハケ。先端を幅広く横ナデ。内面は斜縦ハケ後、先端に横ナデ。	
第21図 PL.17	29	円筒	口縁部片	高口 24.0 底	細砂粒/普通・や や軟質/浅黄橙	3～4			外面は縦ハケ。先端は横ナデ。ハケ目はほとんど消される。内面の口縁部先端は横ナデ、以下は横に指ナデ。	
第21図 PL.17	30	円筒	口縁部片	高口 22.0 底	細砂粒・白色軽石/ 普通・やや軟質/ 浅黄橙	3			外面は縦ハケ。先端を横ナデ。内面は斜横のハケ目後、先端を横ナデ。残存部下端は斜横に指ナデ。	

遺物観察表

第8表 遺物観察表(4)
13号墳出土埴輪(つづき)

挿図番号 図版番号	No.	種別	残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	ハケ目	突帯	透孔	特徴	備考
第21図 PL.17	31	円筒 胴部片		高口 底	細砂粒/普通・やや軟質/橙	3~4	台形か M字	円形	外面は縦ハケ。突帯は貼付後周縁部を横ナデ。第2突帯寄りに円形の透孔を配す。内面残存上位に横のハケ目、以下は指ナデ。	胴部外面に「一」のヘラ記号。
第21図 PL.17	32	円筒 朝顔か		高口 底	細砂粒・黒色鉍物粒/良好/にぶい黄橙	5~6	三角		外面は縦ハケ。突帯貼付にあたり、断絶ナデ技法が見られる。内面は縦の指ナデ。朝顔の胴部か。	
第21図 PL.17	33	円筒 胴部片か		高口 底	細砂粒/普通/橙	不明			外面は縦ハケ、内面は指ナデ。	外面に「=」のヘラ記号。
第21図 PL.17	34	朝顔 口縁部片		高口 底	粗砂粒・チャート粒/普通・やや軟質/にぶい橙	不明	台形		外面は縦ハケ。内面は斜横にヘラナデ。指ナデ。	やや磨滅。
第21図 PL.17	35	形象家 基部片		高口 底	粗砂粒・細砂粒/良好/浅黄橙		—	—	板状の破片。家形埴輪の基部、壁面の一部と考えられるが、詳細は不明。断面台形の突帯が横方向に延びる。外面は縦方向のハケ目。内面はナデ。	12墳21、13墳36、遺構外10と同一個体か。
第21図 PL.17	36	形象家 壁面片		高口 底	粗砂粒・細砂粒/良好/にぶい黄橙		—	—	板状の小破片。家形埴輪の壁面の一部と考えられる。断面台形の突帯を貼付。外面はナデ。縦ハケ。内面はナデ。	12墳21、13墳35、遺構外10と同一個体か。
第21図 PL.17	37	形象人物 女子 髷		高口 底	粗砂粒/普通/にぶい橙		—	—	人物埴輪。女子の髷の一部と考えられる。板状の破片で外面にハケ目。内面にナデを施す。	

3号溝出土埴輪

挿図番号 図版番号	No.	種別	残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	ハケ目	突帯	透孔	特徴	備考
第25図 PL.17	1	円筒 胴部片か		高口 底	細砂粒・白色鉍物粒/普通/橙	6	台形		外面は縦ハケ。内面は斜縦にハケ目・指ナデ。突帯下縁にヘラによる刻み痕。	外面磨滅。
第25図 PL.17	2	円筒 口縁部片		高口 底	細砂粒・黒色鉍物粒/普通/橙	6	M字		外面は縦ハケ。内面は斜めハケ。残存部下位は斜横に指ナデ。	外面やや磨滅。
第25図 PL.17	3	円筒 基底部片		高口 底11.0	細砂粒・白色軽石/やや不良・還元気味/浅黄橙	7			外面は縦ハケ。内面は縦に指ナデ。底面は丁寧なナデ。	
第25図 PL.17	4	形象人物 破片		高口 底	粗砂粒・細砂粒/普通/淡橙	4	—	—	頭部片か。外面は縦ハケ。一部粗雑になっている。内面は不定方向に粗雑な指ナデ。	

3号溝出土土器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	特徴	備考
第25図 PL.17	5	須恵器 甕	埋土 胴部片	口 底	高	細砂粒/酸化焰/橙	外面は横ナデ。内面も横ナデ。 外面磨滅。

3号溝出土石製品

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm・g)	石材	特徴	備考	
第25図 PL.17	6	石製品	埋土 ほぼ完形	長幅 13.4 12.7	厚 5.8 573.2	二ツ岳軽石	背面側中央が浅く窪む。調査時のガジリが重なり、整形法については不明だが、礫形状から意図的に浅く窪めたものと捉えた。	楕円礫
第25図 PL.17	7	石製品	埋土 完形	長幅 13.7 15.2	厚 7.9 900.2	二ツ岳軽石	背面側に径5.5cmの孔を穿つ。孔内面は比較的新鮮で、摩擦は見られない。背面側右辺の平坦な整形痕については整形意図が不明だが、背面側の礫形状を整えるためのものと考えている。裏面側は平坦で、すわりがよく、意図的に整形されたものだろう。	楕円礫
第25図 PL.17	8	石製品	埋土 ほぼ完形	長幅 11.8 8.1	厚 5.5 375.9	二ツ岳軽石	背面側に平ノミ状の工具を用いた整形痕を残す。加工意図については不明。	

6号溝出土土器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	特徴	備考
第28図 PL.17	1	土師器 台付甕	埋土 口縁部 ~胴部中 位1/3	口 底	高	粗砂粒・細砂粒/ 酸化焰/にぶい黄 橙	S字状口縁。口縁部は横ナデ。肩部は斜左下にハケ目(6~7本/1cm)。胴部は斜左上にハケ目。その後肩部に横のハケ目を重ねる。内面頸部はヘラナデ2回。肩部は横にヘラナデ。胴部は縦に指ナデ。 外面磨滅。

第9表 遺物観察表(5)

18号土坑出土石造物

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm・g)			石材	特徴	備考
				長 幅	(31.5) 16.8	厚 重			
第29図 PL.18	1	石造物 五輪塔	埋土 ほぼ完形				粗粒輝石安山岩	均質で丁寧な成・整形を施す。宝珠部上面・括れ部は横位の、体部には斜向する巾2mm程の工具痕を残す。	空風輪

遺構外出土埴輪

挿図番号 図版番号	No.	種別	残存率	計測値 (cm)	胎土/焼成/色調	ハケ目	突帯	透孔	特徴	備考
第32図 PL.18	1	円筒	ゴミ穴 口縁部片	高口底 23.0	粗砂粒/普通/橙	3	M字		外面は縦ハケ後、口縁部先端に横ナデ。内面は斜縦のハケ目後、斜横のハケ目を重ねる。先端は横ナデ。残存部下位は指ナデ。	
第32図 PL.18	2	円筒 朝顔 か	13号墳東 胴部片	高口底	細砂粒・白色鈹物 粒/普通/にぶい橙	7~8	三角	円形	突帯寄りに小径の円形透孔を配する。外面は縦ハケ。内面は斜に指ナデ。	
第32図 PL.18	3	円筒	ゴミ穴 胴部片	高口底	細砂粒・赤色粘土 粒/普通・やや軟 質/橙	3~4	台形		器肉は厚い。外面は縦ハケ。内面は縦の指ナデ。	やや磨滅。
第32図 PL.18	4	円筒	ゴミ穴 口縁部~ 胴部片	高口底	細砂粒/良好/橙	6	台形	円形	第2突帯寄りに円形の透孔を配す。外面は縦ハケ。内面は斜めにハケ目。	
第32図 PL.18	5	円筒	ゴミ穴 胴部片	高口底	細砂粒・白色鈹物 粒/普通/浅黄橙	6	M字	円形か	透孔の一部が残存する。突帯は低い。貼付が粗雑で波打っていると考えられる。外面は縦ハケ。内面は指ナデ。	
第32図 PL.18	6	円筒	ゴミ穴 基底部片	高口底 10.0	細砂粒・白色鈹物 粒/普通・やや軟 質/橙				外面は縦ハケを施していたか。内面は縦に指ナデ。底面に工具痕か。	
第32図 PL.18	7	朝顔	ゴミ穴 口縁部片	高口底	粗砂粒・チャート の小礫/良好/明赤 褐	2~3	M字		外面は斜縦にハケ目。内面上位は横にハケ目、以下は斜めの指ナデ。	
第32図 PL.18	8	朝顔	13号墳西 口縁部片	高口底	粗砂粒・チャート 粒/普通/橙		台形		外面は縦ハケと考えられる。内面は不明。	内外面とも磨滅。
第32図 PL.18	9	朝顔	ゴミ穴 口縁部片	高口底	粗砂粒・輝石か角 閃石・白色鈹物粒/ 普通/明赤褐	3			外面は縦ハケ。内面は斜横にハケ目。	
第32図 PL.18	10	形象 家	13号墳東 壁面片	高口底	粗砂粒・細砂粒/良 好/浅黄橙		—	—	天地不明。板状の小破片。家形埴輪の壁面の一部と考えられる。断面台形の突帯を貼付。外面はナデ。縦ハケ。内面はナデ。	12号墳21、13号墳35・36と同一個体か。
第32図 PL.18	11	形象 馬	ゴミ穴 鈴	高口底	粗砂粒/良好/にぶ い黄橙		—	—	馬形埴輪の一部。垂下する薄い帯状の粘土帯の先端に鈴が表現されている。周辺はナデ、ハケ目。内面はナデ。	
第32図 PL.18	12	形象 馬	ゴミ穴 脚	高口底	粗砂粒/普通/橙		—	—	馬形埴輪の脚部先端の破片である。円筒状を呈する本体の一部に弧状の切り込みを入れ、蹄を表現している。外面は縦ハケ、内面はナデ。	

遺構外出土土製品

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm)			胎土/焼成/色調	特徴	備考
				口 底	高	厚			
第33図 PL.18	13	土製品 瓦塔	13号墳周 堀屋蓋部片	口底		高	粗砂粒/酸化焰/浅 黄	屋蓋隅部。隅降棟の一部を残し欠損。屋蓋は半截竹管状工具で幅1.5cmの丸瓦表現で継ぎ目がつけられている。軒先・隅木・垂木は先の鋭い工具で切り出されている。	
第33図 PL.18	14	土製品 瓦塔	13号墳北 屋根片	口底		高	粗砂粒/酸化焰/浅 黄	屋蓋部軒先。半截竹管状工具で幅1.3cmの丸瓦が表現され、2.5cm間隔で継ぎ目がつけられている。垂木は幅2.3cm、先の鋭い工具で切り出されている。	

遺構外出土石製品

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm・g)			石材	特徴	備考
				長 幅	(12.4) (10.5)	厚 重			
第33図 PL.18	15	石製品	周堀埋土 1/2?				二ツ岳軽石	礫上端を切り取り、平坦面を作出する。平坦面は平ノミ状の工具によるものであろうが、磨滅して詳細は不明。	楕円礫

遺構外出土金属器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm・g)			石材	特徴	備考
				径	2.3	厚 重			
第33図 PL.18	16	銅銭 政和通寶	13号墳東 完形					外輪周囲は劣化破損により凹みあり。裏面は平坦で外輪等不明瞭。	

遺物観察表

第10表 遺物観察表(6)

縄文土器集中部出土縄文土器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	胎土	特徴	備考
第35図 PL.19	1	縄文土器 深鉢	縄文土器集中部 口縁部片	砂粒	内反する平口縁で、口縁下に沈線で逆U字状ないし波状の文様を描き、0段多条のRLの縄文を横位および縦位に施す。	加曽利E3式
第35図 PL.19	2	縄文土器 鉢	縄文土器集中部 口縁部片	砂粒	内反する平口縁で、口縁下に太い沈線が巡り、以下の胴部に条線を縦位に施す。小型の鉢か。	加曽利E3式
第35図 PL.19	3	縄文土器 壺?	縄文土器集中部 口縁部片	砂粒	壺ないし樽状の器形を呈し、かなり内反する平口縁で、口縁部無文帯下に隆帯が巡る。橋状把手が隆帯部から下方に付き、隆帯上にRLの縄文を施す。	加曽利E3式
第35図 PL.19	4	縄文土器 深鉢	縄文土器集中部 胴部片	砂粒	胴部上半に沈線と微隆帯で曲線的な文様を描き、区画内にRLの縄文を縦位に施す。	加曽利E3式
第35図 PL.19	5	縄文土器 深鉢	縄文土器集中部 胴部片	砂粒	胴部に沈線と微隆帯で曲線的な文様を描き、区画内にRLの縄文を縦位に施す。	加曽利E3式

遺構外出土縄文土器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	胎土	特徴	備考
第36図 PL.19	1	縄文土器 深鉢	遺構外 胴部片	砂粒	胴部に沈線で懸垂文を垂下させ、逆U字状の文様を描き、RLの縄文を縦位に施す。	加曽利E3式
第36図 PL.19	2	縄文土器 深鉢	3号溝 胴部片	砂粒	胴部に沈線と隆帯で曲線的な文様を描き、区画内にRLの縄文を施す。	加曽利E3式
第36図 PL.19	3	縄文土器 深鉢	13号墳 胴部片	砂粒	胴部に条線を縦位に施す。	加曽利E3式
第36図 PL.19	4	縄文土器 深鉢	3号溝 胴部片	砂粒	胴部に条線を縦位に施す。	加曽利E3式
第36図 PL.19	5	縄文土器 鉢	14号墳 胴部片	砂粒	胴部に波状の条線を横位ないし斜位に施す。	加曽利E3式
第36図 PL.19	6	縄文土器 深鉢	18号土坑 口縁部片	細砂	やや内反する4単位の波状口縁で、口縁以下は無文。	加曽利B式
第36図 PL.19	7	縄文土器 鉢	遺構外 胴部片	細砂	胴部に沈線を巡らせて区画し、区画内に沈線で弧状の文様を横位に描き、LRの縄文を充填する。	加曽利B式

遺構外出土縄文石器

挿図番号 図版番号	No.	種類 器種	出土位置 残存率	計測値 (cm・g)			石材	特徴	備考	
第36図 PL.19	8	剥片石器 石鏃	13号墳北側 完形	長 幅	2.2 1.8	厚 重	0.4 0.8	チャート	完成状態。全面を押し剥離が覆う。基部をU字状に大きく抉り込んでいる。	凹基無茎鏃
第36図 PL.19	9	剥片石器 石鏃	13号墳北側 左辺返し部 欠	長 幅	2.2 (1.7)	厚 重	0.5 0.9	黒曜石	未製品か。加工は粗く、右側縁は珪晶で破損する。最終的に左辺の返し部を欠損、これにより石器製作を放棄したものだらう。	凹基無茎鏃
第36図 PL.19	10	礫石器 磨石	13号墳 完形	長 幅	12.6 9.4	厚 重	5.6 861.2	粗粒輝石安山 石	背面側のみ摩耗する。礫の断面形状は右辺側が薄く、これを反映して摩耗範囲も右辺側に偏っている。	楕円礫

写真図版



1 5-1区中央部全景(東から)



2 5-2区南西部全景(北東から)



1 5-2区北端部全景(南から)



2 1号墳全景(南西から)



3 12号墳全景(北西から)



4 12号墳南東部埴輪出土状態(北東から)



5 12号墳埴輪2出土状態(北西から)



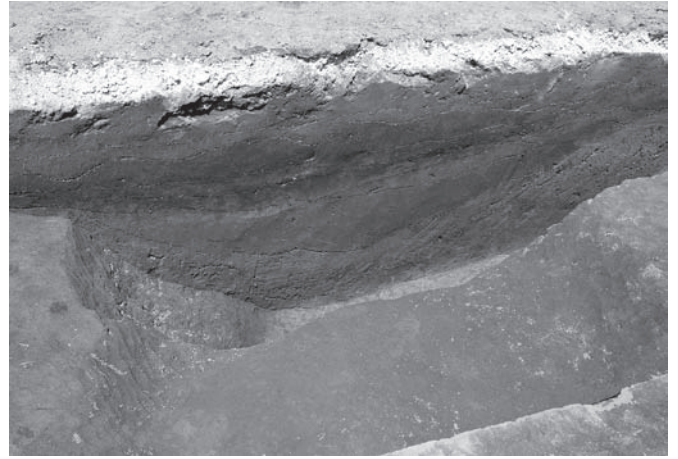
1 13号墳全景(東から)



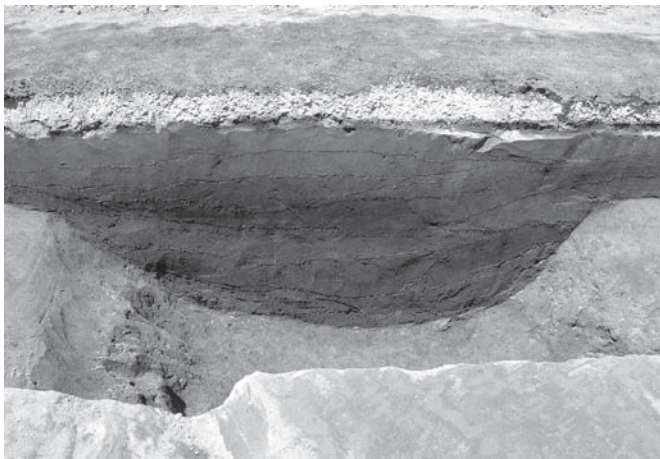
2 13号墳西部全景(南東から)



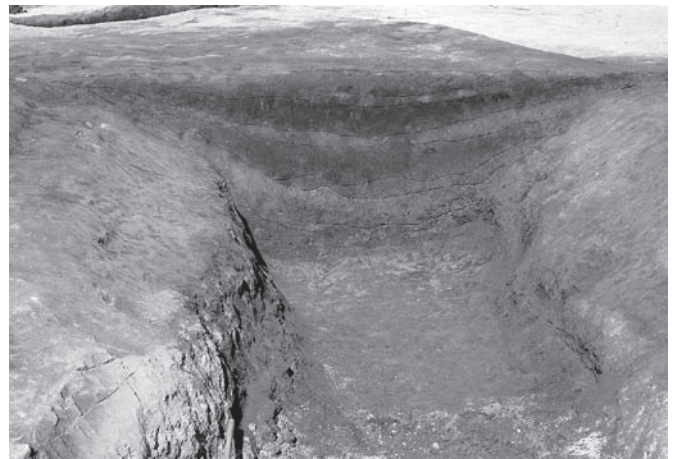
1 13号墳西部全景(北から)



2 13号墳周堀北部C-C'セクション(東から)



3 13号墳周堀南部C-C'セクション(東から)



4 13号墳周堀南東部D-D'セクション(南西から)



5 13号墳周堀東部E-E'セクション(南から)



6 13号墳周堀北西部F-F'セクション(東から)



7 13号墳周堀南西部G-G'セクション(南東から)



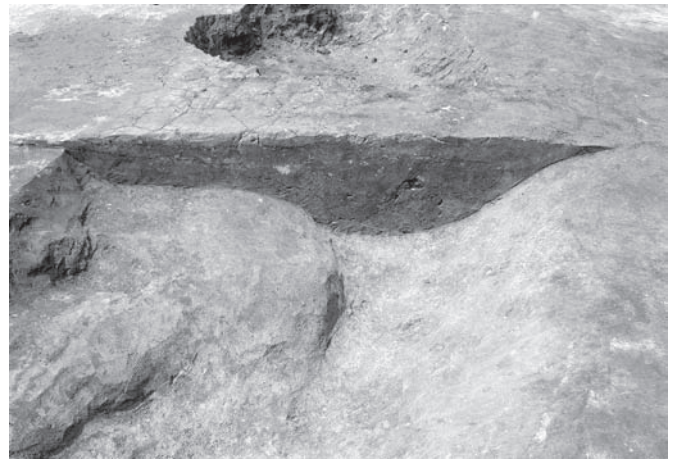
8 13号墳墳丘下溝全景(東から)



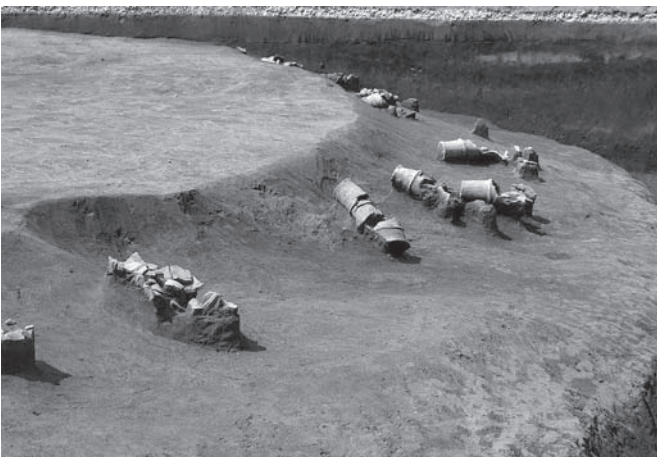
1 13号墳墳丘下溝全景(南から)



2 13号墳墳丘下溝南部 I-I' セクション(東から)



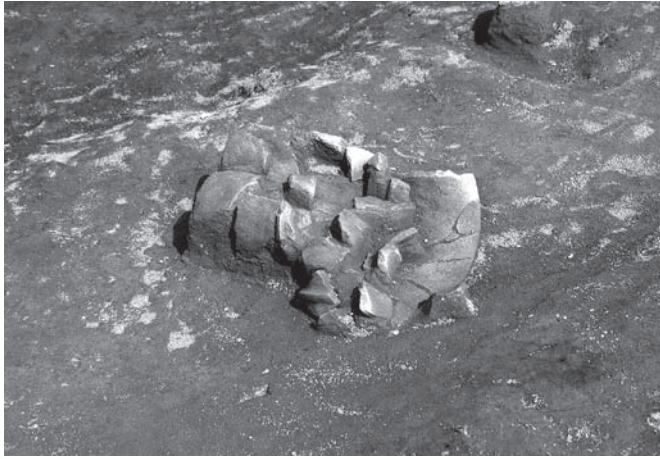
3 13号墳墳丘下溝北部 I-I' セクション(東から)



4 13号墳埴輪列(1~9)出土状態(北東から)



5 13号墳埴輪1 出土状態(南から)



1 13号墳埴輪 2 出土状態(南西から)



2 13号墳埴輪 3 出土状態(南から)



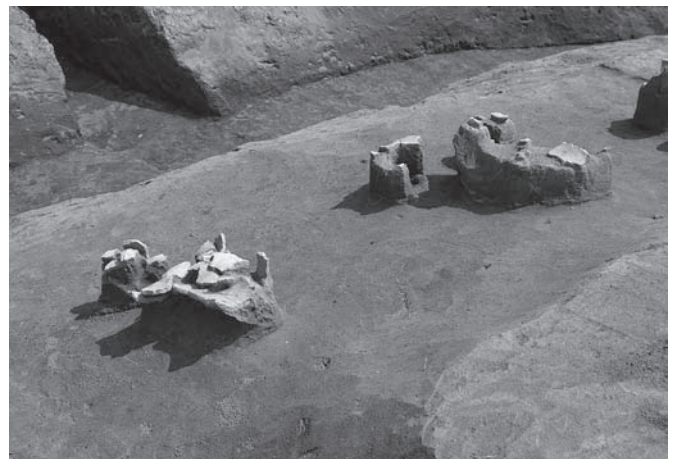
3 13号墳埴輪 4 出土状態(南東から)



4 13号墳埴輪 5 出土状態(南から)



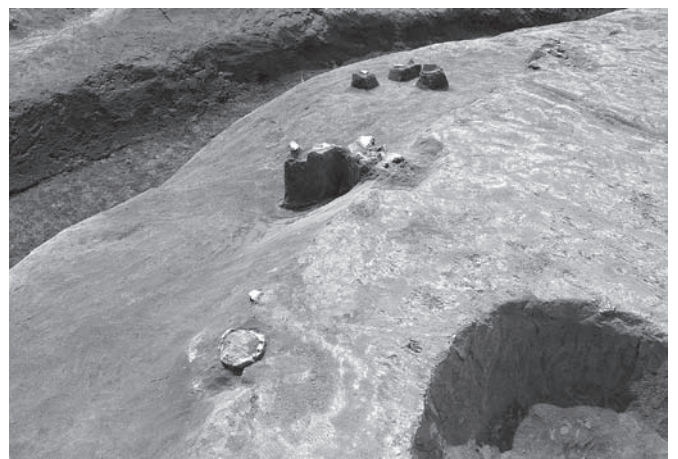
5 13号墳埴輪 6(左)～8(右)出土状態(南西から)



6 13号墳埴輪 9(左)出土状態(南西から)



7 13号墳埴輪 11 据え付け状態(南から)



8 13号墳埴輪 11・12 出土状態(北から)



1 13号墳埴輪14出土状態(北から)



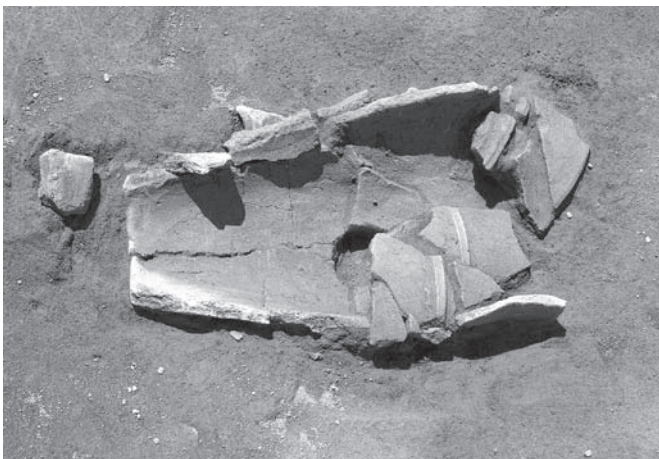
2 13号墳埴輪15～18出土状態(北西から)



3 13号墳埴輪15出土状態(北東から)



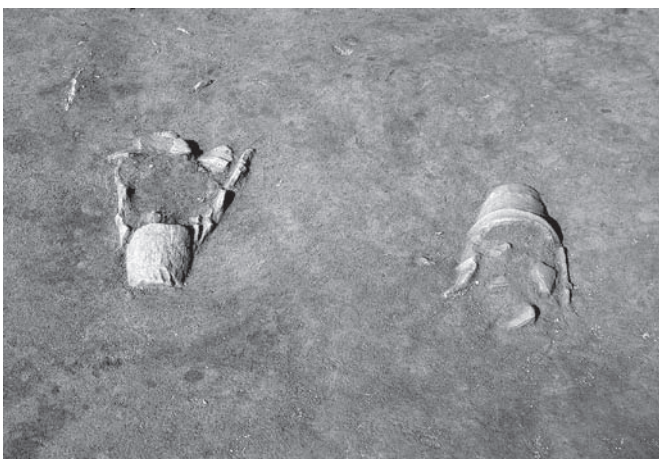
4 13号墳埴輪16出土状態(南東から)



5 13号墳埴輪18出土状態(北から)



6 13号墳埴輪19(右)・20(中)出土状態(西から)



7 13号墳埴輪21(左)・22(右)出土状態(南東から)



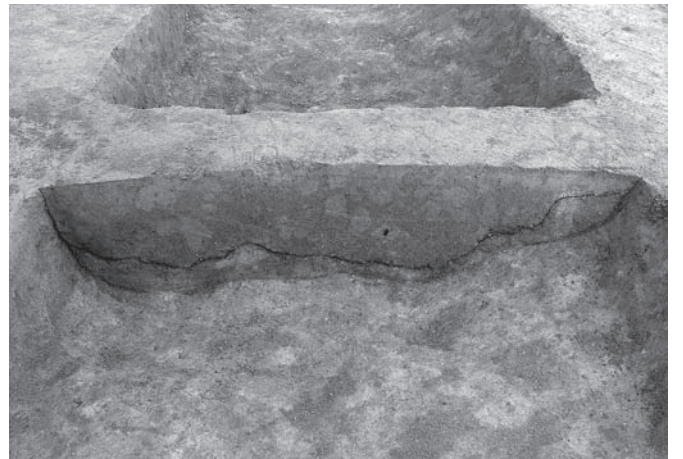
8 13号墳瓦塔出土状態(南東から)



1 14号墳全景(東から)



2 14号墳全景(南から)



3 14号墳周堀 A-A' セクション(北東から)



4 15号墳全景(北東から)



5 15号墳周堀 A-A' セクション(南東から)



1 3号溝全景(北東から)



2 3号溝全景(南西から)



3 3号溝東端部(東から)



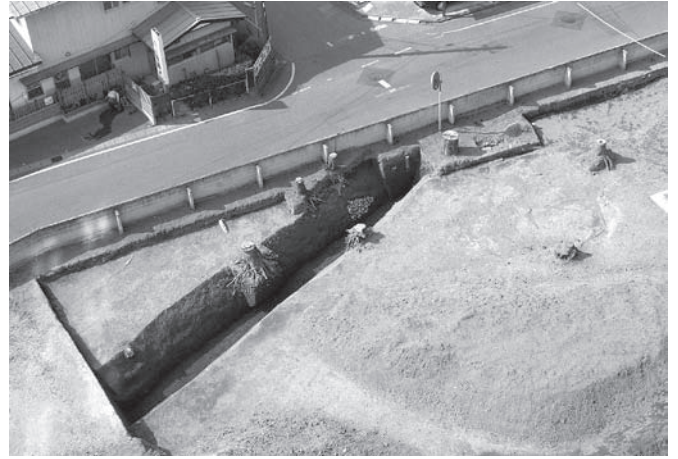
4 5号溝(左)全景(北から)



5 6号溝全景(東から)



1 6号溝全景(西から)



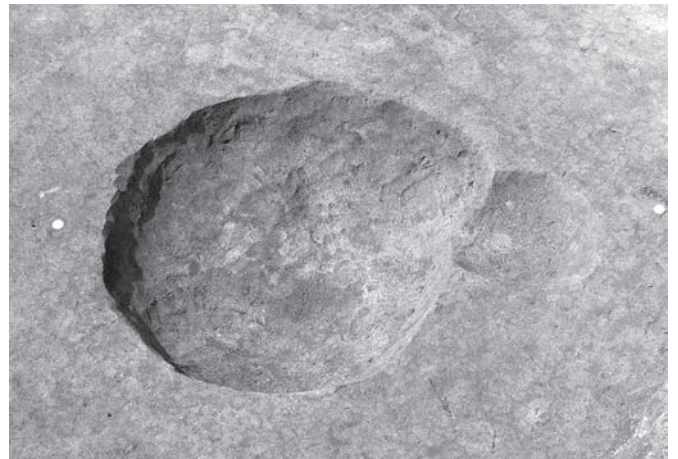
2 6号溝全景(北東から)



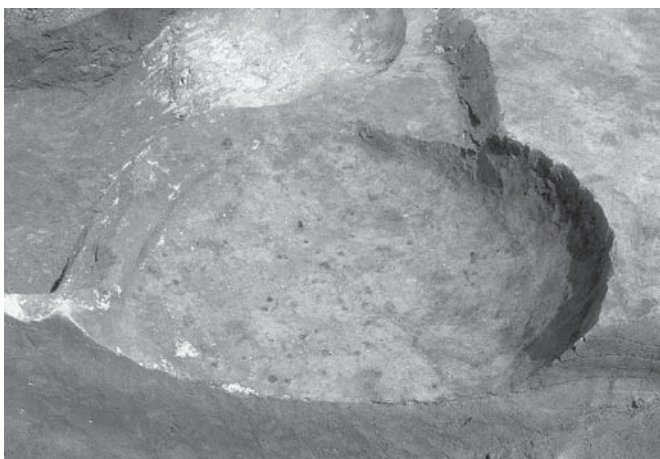
3 6号溝A-A'セクション(西から)



4 6号溝B-B'セクション(西から)



5 16号土坑全景(南東から)



6 17号土坑全景(西から)



7 18号土坑全景(北東から)



1 18号土坑全景(南東から)



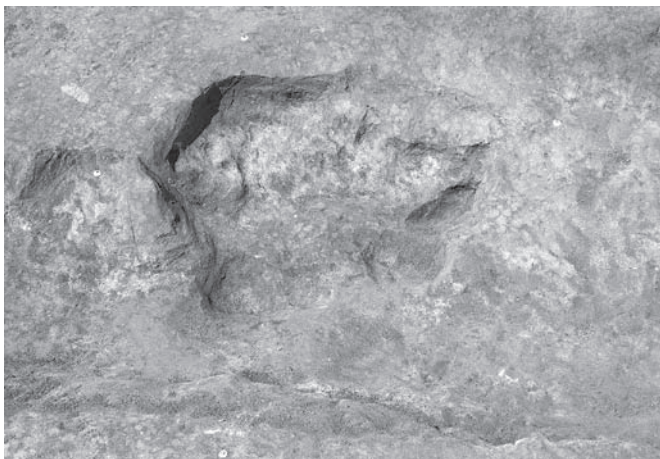
2 19号土坑全景(南西から)



3 19号土坑全景(南東から)



4 20号土坑全景(西から)



5 21号土坑全景(東から)



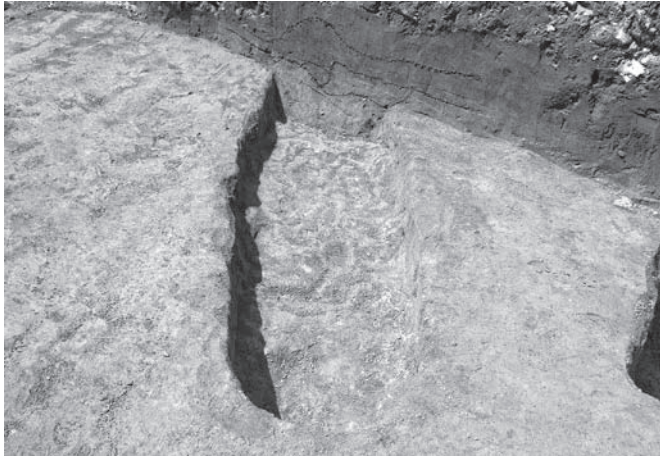
6 22号土坑全景(南から)



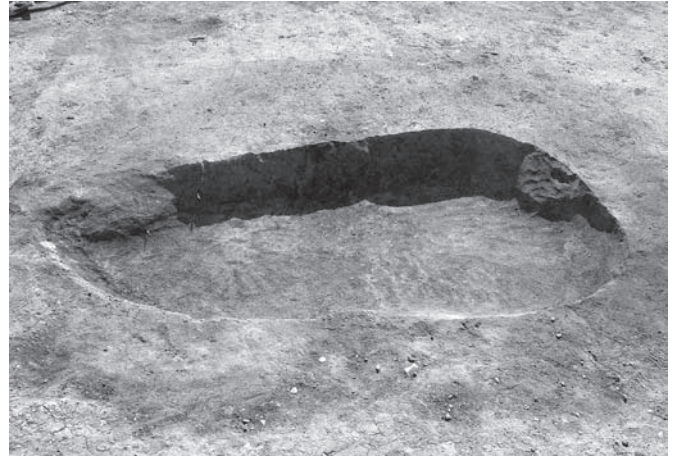
7 23号土坑全景(南東から)



8 24号土坑全景(東から)



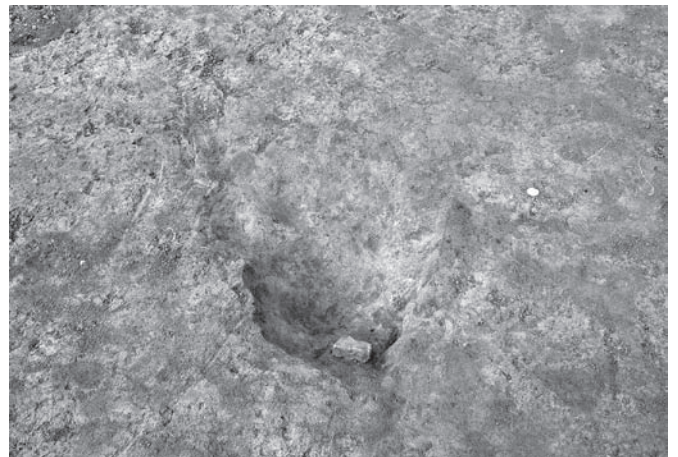
1 25号土坑全景(東から)



2 27号土坑全景(北東から)



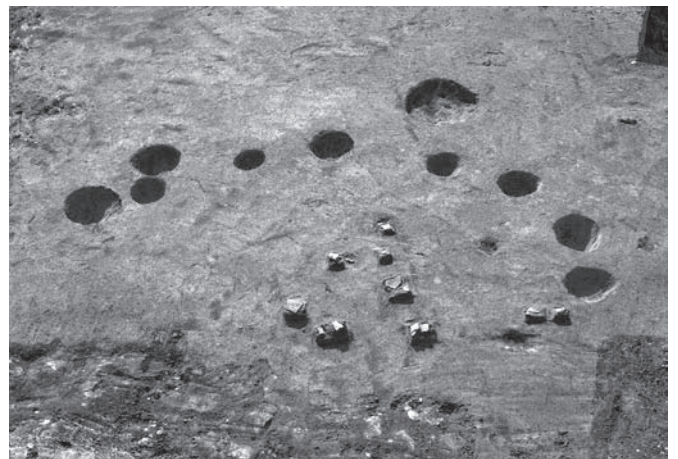
3 1号集石全景(北から)



4 1号集石掘方全景(南から)



5 縄文土器集中部(北から)



6 縄文土器集中部(東から)



7 5-1区中央部旧石器トレンチ全景(東から)



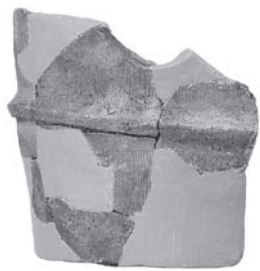
8 5-2区南端部旧石器トレンチ全景(東から)

12号填(1)



PL.14

12号墳(2)



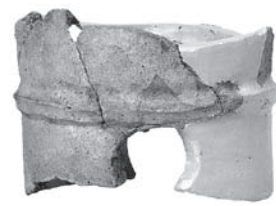
13



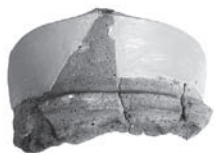
14



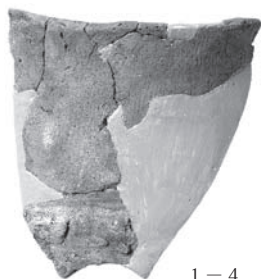
16



17



15-1



1-4



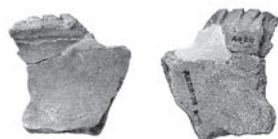
18



19



20



15-2



21

13号墳(1)



1



2



3



4



5



6



7



8



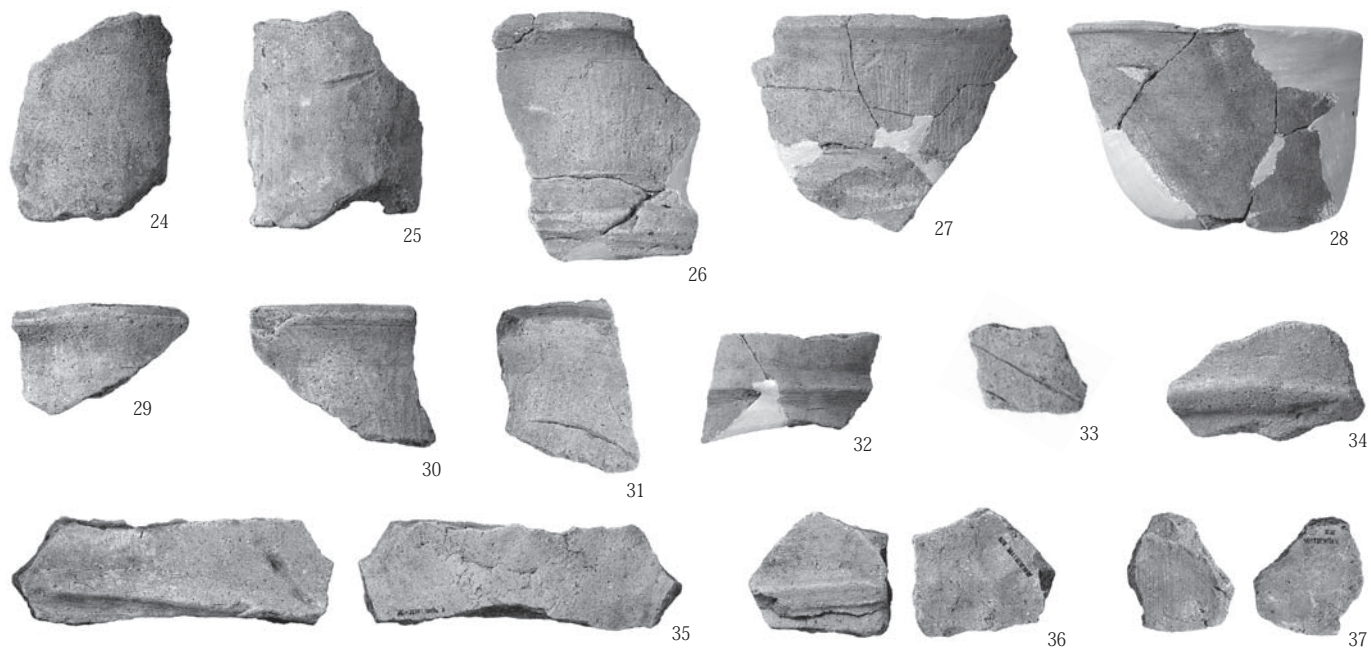
9

PL.16

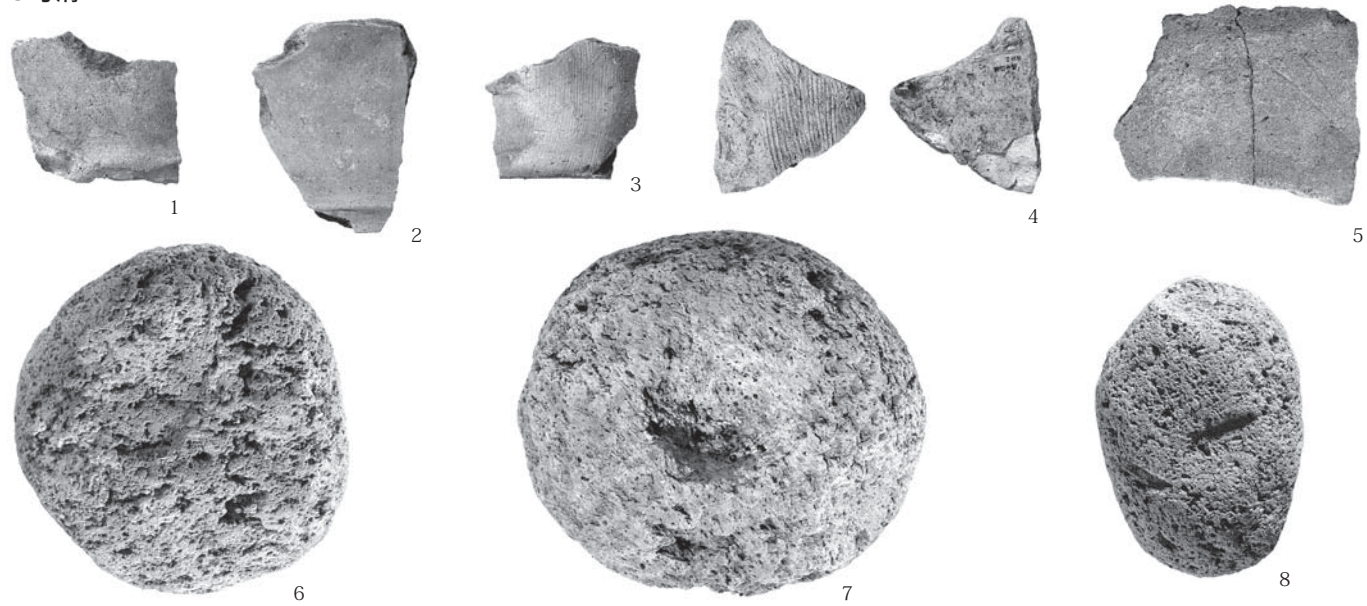
13号填(2)



13号墳(3)



3号溝



6号溝

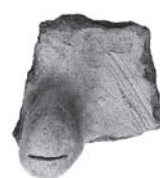
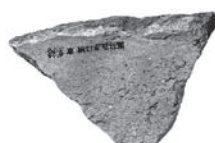
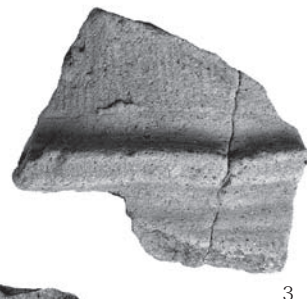


PL.18

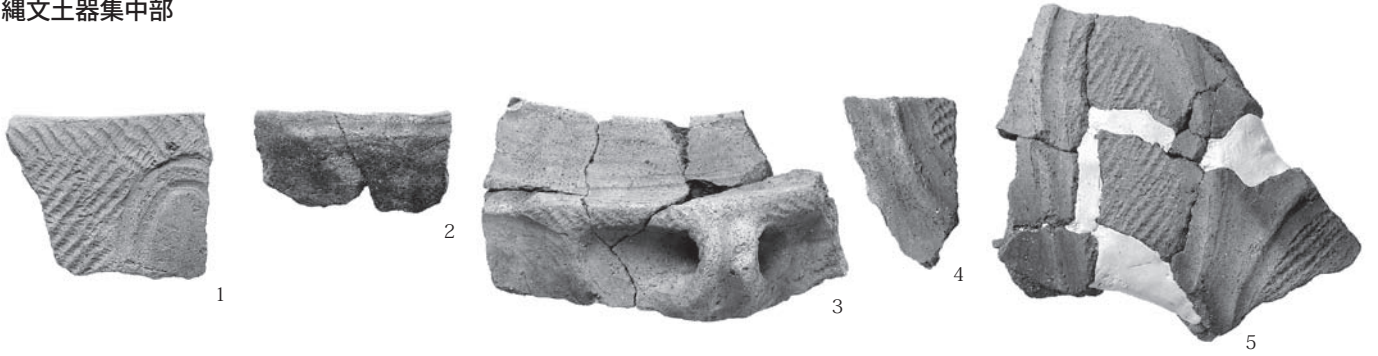
18号土坑



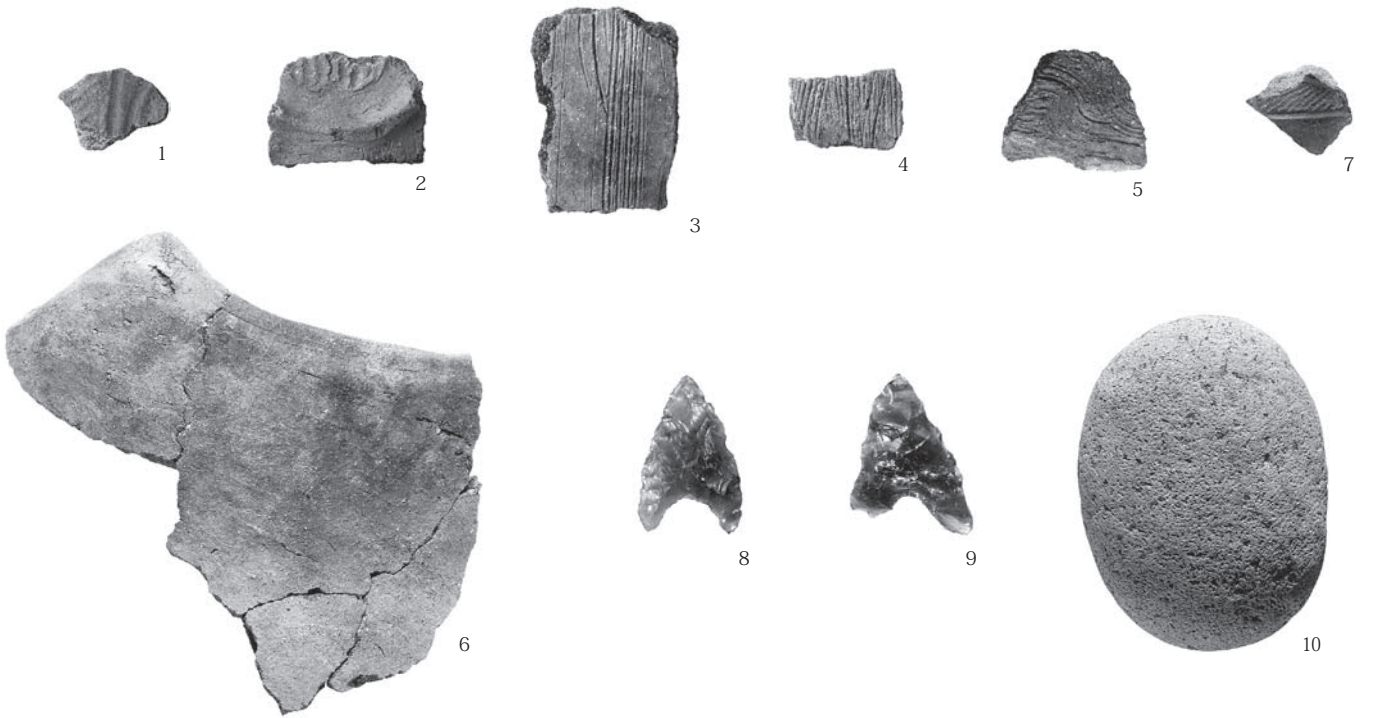
遺構外



繩文土器集中部



遺構外(縄文時代)



報告書抄録

書名ふりがな	たかばやしにしはらこふんぐんに
書名	高林西原古墳群(2)
副書名	群馬県立がんセンター緩和ケア病棟建築工事及び外構工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	577
編著者名	高井佳弘
編集機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20131121
作成法人 I D	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田784番地2
遺跡名ふりがな	たかばやしにしはらこふんぐん
遺跡名	高林西原古墳群
所在地ふりがな	ぐんまけんおおたしたかばやしにしまち
遺跡所在地	群馬県太田市高林西町
市町村コード	10205
遺跡番号	T0029
北緯(世界測地系)	361523
東経(世界測地系)	1392148
調査期間	20120801-20120930/20130301-20130331
調査面積	3274
調査原因	病院建設
種別	包蔵地/古墳
主な時代	縄文/古墳
遺跡概要	包蔵地-縄文-土器+石器/古墳-古墳-古墳5+溝3+土坑-埴輪+土器
特記事項	古墳時代後期の群集墳
要約	太田市南部の高林台地上にある古墳群の調査である。がんセンター敷地内では平成12・13・16年度にも11基の古墳を調査し、今回新たに4基の古墳を調査した。墳丘盛土の下にHr-FAの堆積が見られるものがあり、それらは6世紀前半に築造時期が特定できるので、古墳編年研究の上でも貴重である。うち1基は円筒埴輪列が倒れた状態で見つかり、多くの円筒埴輪が出土した。

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第577集

高林西原古墳群(2)

群馬県立がんセンター緩和ケア病棟建築工事及び外構工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成25(2013)年11月14日 印刷

平成25(2013)年11月21日 発行

編集・発行／公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田784番地2

電話(0279)52-2511(代表)

ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷／上毎印刷工業株式会社

高林西原古墳群 5 区全体図(1/200)

